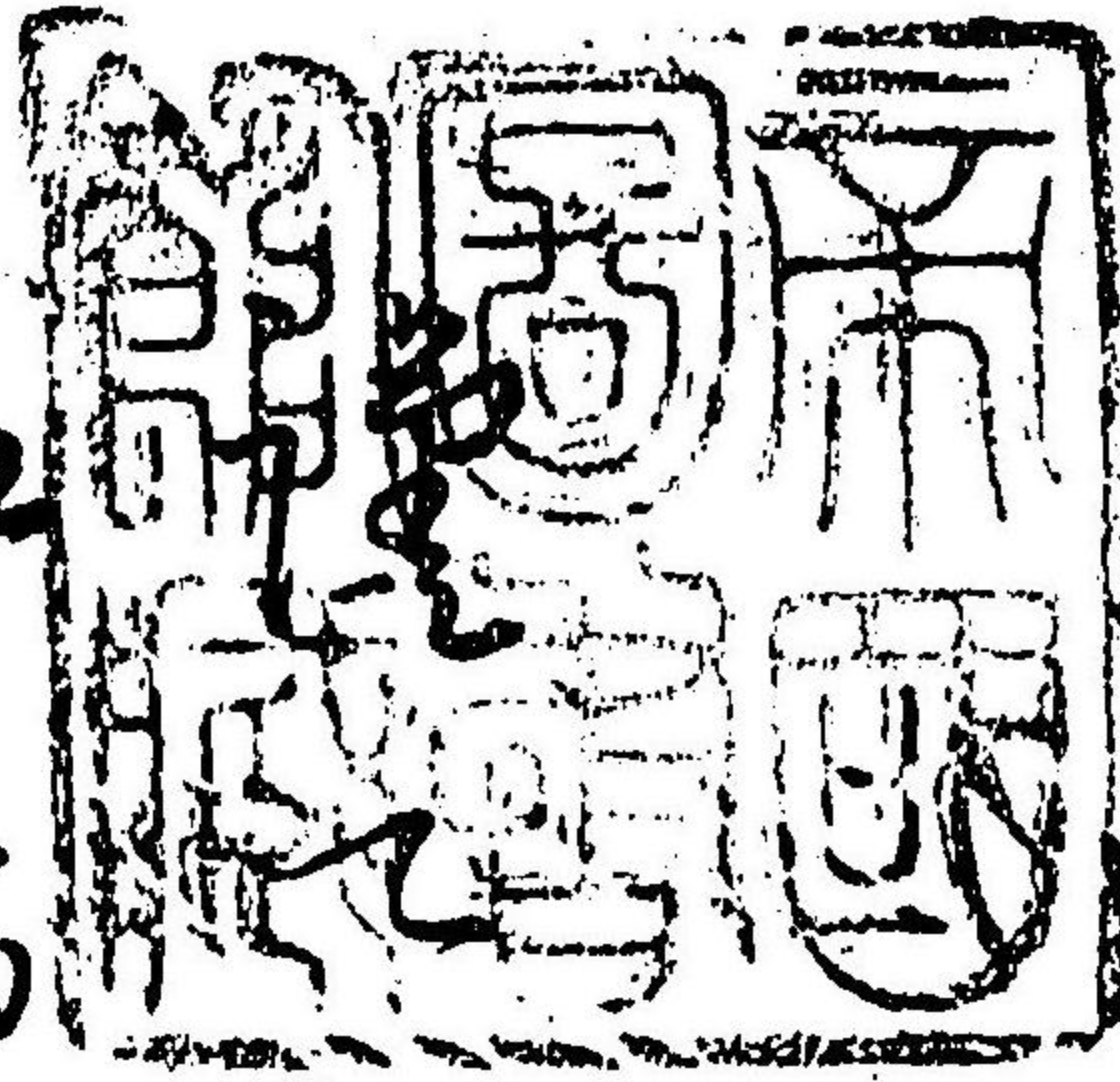


79
630

亀田武志存



知
徳

名
子
南
無

秋
拙
き
日
言
已
を
辱

一
再
び
流
罪
の
日

竜
田
孝
吉

明治
廿
八
年
四
月
十
八
日

明治
38 11 8
丙午



「マンリエスター、ガートマン」
「米國棉業」著者
チー、エム、ヤング君

此書の著者

竜田式赤毛布



竜田奉志

菅相南

君才具... 懸軍直入八千里。震動羅馬十五城。歸來國亡壯士死。又不見
輓近... 歐洲如疾風。霸圖半就霜蹄蹶。身落蠻烟瘴霧中。咆哮自憑蓋世
氣末路徒求着跟地。秋風原頭白骨堆。日暮行人幾翔淚。寧知單衣赤脚行乞餐。一鉢之中
寄生安。千山萬水重々翠。孤筇度盡乾坤寬。夜投高閣逢飛雨。閑看蛟龍爭糞土。信眉一笑
問蛟龍。爲誰辛苦爲誰怒。

回顧すれは早や三年の昔とありぬ。印度への船路と題して、神戸より孟買迄の寄港
地にて見開したるとなにくれとなく書き付けたりしは

今や幸に世界周遊の宿望を達せんとするに際し、竜田式赤毛布と改題し、孟買より
歐米を経て神戸に至る間の見聞を録し、以て竜田式世界一周記を完結せんとす
題して赤毛布と云ふ、少しく註釋あかるべからず、抑も赤毛布に種々あり、語學上の

赤毛布禮儀上の赤毛布、金錢上の赤毛布是也。君は何處へ行きますかと問ふに對し、サ
ンキユー(多謝)と答へて得意然たるは第一系に屬し、アルバカ地の「カカ」光る奴を
若てドレス(禮服)と見せかけ、或は船僕を賃して赤靴を黒靴に塗變んと勉むるなど、少
しく進歩したるは、第二系に屬し、充分の金が無く、寄附金を目當として旅行を企つる
は、第三系に屬す。今熟ら我自から我竜田君を見奉るに、自由に日清、英佛、獨印の諸國語
を操り又西洋の小笠原を以て自任し、金錢上に於ては勿論、彼毫も憂ふべきなしと云
ふ、此好紳士の旅行、豈夫れ赤毛布を以て目すべけんや、蓋し彼が赤毛布と云ふは、頗る
謙遜の辭にして、單に初旅と云ふを意味するものならん乎

九月三日 モンスーン季なるにも拘らず、快晴、天も亦我行、色を壯にせんとするか
ど、一種の自惚を起すも可笑し、午後二時半、彼阿會社飛脚船「バララット」號にて三年の
間大に世話にありし孟買に別れを告ぐ、木石ならざる者、それ感慨なからんや、大にあ
り盛に之ありと雖、詩人乃至文人にあらざる余は、之を適當に言ひ顯はすと能はざる
を悲しむ也、但し人あり強て之を余に求めんか、一語即ち答へんのみ、曰く、謂ひ難し！
三年の間、或は師の如く、或は親の如く、或は兄弟の如く、余を導き慈しみ愛し玉ひた
る在留日本人は、一名の漏れなく三十五名大舉して、態々バララットビヤ迄余を見送吳

れたるは、余の最も光榮とするところ也、茲に謹て深厚なる感謝の意を表す、此他に平
素商賣上の關係を以て外人八九名の見送り呉れたるあり、中には余の首に花環を掛
け、手に花束を持たし、殆んど余を佛化せんとしたるものあり

天竺に三年の夏を過しけり

今日の船出を夢にまで見て

印度は余が古里に亞で愛する國也、唯世界一周は、余が平素の熱望なりしが故に、以
上の句あり

東の古里指して歸るとて

西に向て行くぞおかしき

我飛脚船は西航を初めぬ

九月四日 天氣快晴海上平穩

小生等には誠に難有となれども、是れでは印度に潤澤の雨が降るまじく、孟買の新
聞が此内より騒げる如く、或は饑饉になりはせずやと、まことに心配なり

美酒佳肴に飽きたる旅客は甲板上にアラビヤ海の清風を迎へて安臥し、こゝ暫く
極樂の形あり、性來晝寢の出來ざる余は、本船、船員、乗客等を研究し始めたり、抑も此

「ラット」號は千八百八十二年の建造に係り、本年とつて廿二才と云ふ、人間で云へば若盛なるが船としては老爺なり、登簿噸は四千八百九十噸で、烟突は二本、外見非常に立派で仲々速うてゐるが、實際十三四運しか出ない、尤もステヂーで動搖はせず、最新形の飛脚船に比する時は、凡てが舊式なるは掩ふべからず、聞けば之が英印間の最終航海で、倫敦着の上賣捌かるものなりと、或は伊太利汽船會社が買ふなりとも云ひ、或は孟買の「セバート」社が買取り、孟買、メツカ、メシナ間にマホメッド巡禮者を積むに川ゆるるなりとも云ふ、何にせよ、彼阿會社は此グレードシャルド、ポートを離縁して了はんとする也

船員は、上級者丈け白人を川ひ、下級者は印度人即ちラスカーを使用す、白人が此半黑人に命令を下すには、印度語ヒンドスタニーを用ふ、船長曰く、ラスカーは給金も廉いし、柔順にして能く仕事をするが故に、東洋の航路には必要欠くべからずと

旅客は、日本人たる余等を除き、英人を主とし、佛人あり、白耳義人あり、獨逸人あり、西班牙人あり、馳馬人、西東人(間の子)もありたり、船中では俗累なし、隨て各種の人間が最も裸体的に、其特質を表示す、英人の大膽にして企業的ある、一見冷淡にして甚だ親切ある、禮に媚はず野趣に富めりとも云ふ風あるに對し、佛人は親々易く禮儀に厚く、

機慧輕妙にして文明的なる、而かも小知に誤られ輕薄の度合多き等、英佛人を比較するに、英を男性とせば佛は女性なり、白耳義人、西班牙人は佛人系に屬し、獨逸人、馳馬人が英人系に屬する云ふ迄もなし、彼の西東人に至りては、特質を有せざる人間以下の動物なりと見るを適當なりとす、日本人は皆様先刻御承知の如く、世界最優等の人種にして、英佛人の特點を集め有し、其欠點を脱離す、本船に於ては、竜田君遺憾なく此名譽ある戰勝國民を代表す、請ふ安せよ

本船が舊式に屬するは前述の如し、從て食堂の如き喫烟室、社交室等の裝置、佛獨飛脚船の如く立派からず、英船の上等は佛獨船の中等よりも陋なるべし、乗客待遇法に至りても頗る冷淡を極め、司厨長の如きさへ、傲然として乗客を藐視せる有様なり、但し英人は決して其積りで居るにあらず、從て英人の眼より之を見れば、普通のことなるが、余等虚禮に慣れたる耳目を以て見聞するときは、聊か主客轉倒の感なき能はず、獨逸人、佛人、白耳義人等頻りに不平あり、曰く、料理不味を極む、曰く、彼等は御客様の扱振を知らず、曰く、彼のステヂーは禮を辨へず、曰く、何、曰く、何と、余の斷案は即ち別に之あり、曰く、英人は宿屋としての旅客船業には失敗あり、是れ彼等の天性によるものにして、英人が運送業者として未曾有の成功をなす所以のもの、亦此特質に因るに

あらざる乎

亞刺比亞海

谷 朝 軒

長風拂熱我心。雲盡紅暎上海高。瞥見波間光怪出。飛魚一隊尾如刀。

九月五日 不相變天氣快晴。荒琵琶海は日本の琵琶湖に私淑し此名を付したるに
あらざる耶。船中依例、晝寝の展覽會を呈す、無遠慮に地蔵的の寝顔を呈せるものは、モ
一二週間で久振りに、戀人と相逢ふ快樂を夢みるものなるべく、千振の三升も飲だ様
な顔付をさせるものは、孟買のマルワリー(高利貸)に借りたる金が返せないで、種々苦
んだ當時を忘れ兼ねたるものなるべく、前後を打忘れて、遺憾なく眠れるものは、三年
間の激職を果して休暇を得、之を利用して世界一周でも思立てる御方なるべし、由來
「飲むこと」「眠ること」「讀むこと」は、船中の三大樂と稱せらる。眠ることは既に述べたれ
ば、飲むことを申さん、先づ英國の國民的飲物と稱せらるるウィスキー、ソーダを初めと
し、獨逸のビール、佛西伊國の葡萄酒、其他所有る酒類は、酒保に於て求め得べし

食堂 戲 賦

渡 邊 東 民

有口難作語。有耳奈不聞。得意唯有我舌在。八珍堆裡酒亦薰。

朝は十一時から二時迄、午後六時から九時迄、十一時から十二時迄と云ふ風に、三回公

開す、此他の時間にては求得べからず、特に日曜日は、午後六時頃から二時間賣出すに
過ぎず、乗客の内、英人最も酒を好むが如し、次に食事なり、朝飯が八時半、晝飯が二時、晚
飯七時と云ふ次第あるが、上等は晝飯の時に於て、例の燕尾服を着けざるべからず、凡
て窮屈なるが、中等は此等の点に於ては、極めて平民的にして、寢巻ならざる以上は、何
んな服でも澤山なり、但し晝飯の時は黒味掛かれる服を宜ろしとす、彼阿社の中等に
ては、晝一飯に一番御馳走をなし、スープより初めデザート珈琲にて終る、晝飯は晝の
残りたる冷肉に、一品暖きロール、キャベツ位が添ふあり、故にデナーと云ふは晝飯
にて、晝飯はチーと稱す、各食事の三十分前鐘鳴りて、川意を促し、食事時間に又鳴る、本
船の鐘一種恨むが如き音を發す

不景氣や「バララット」の鐘の音

九月六日 依例快晴あれども、海上微波を起し來る、新微波海乎、乗客中特に婦人達
の或者は、色蒼ざめて食堂に行く元氣は無論なく、デッキの椅子にのつたりと寢て居
る、それでも食に卑しき西洋人は、喰はずんば居られぬものと見へて、デッキ、ステユワ
ートに命じ、或はアイスクリーム、或は少しプリンク、或は少しアイストアップリコ
ットを給へと云ひ、或は中には澤山ビスケットを持って來いなど云ふ、狸垂婦を見掛け

たり

余は海國男子を以て自負せるものあれば、頗る得意にて、或は食ひ、或は飲み、或は語り、或は讀めり、此日食堂は殆ど強者のみ、男子のみの寄合で、壺を取て呉れ、ペバーを呉れ、其トーストを取て呉れ、いや其バターだかど、己れの權利を主張するが如く、男子をこき使ふて得意至極、誠に面倒極る婦人達が見なさいので、更らに一層の愉快を覺へたり、外界アラビヤの熱風に吹かれ、内界ウイスキー、ソーダの酒熱に燃され、總身頗る苦熱を感じたれば、一番アラビヤ海水に浴し呉れんと、余は風呂番に命じ、新らしき海水を汲取り、冷水風呂を作らしむ、十分しか用ゆることあらぬと云ふ指示あるにも拘らず、餘りの心地よさに三十分を費したり

九月七日 天氣は快晴なれども、風波加はる、弱者は彌々落膽し、強者は益々得意なり、余はさかんに、飲み、食ひ、語り、且つ少しく讀みぬ

九月八日 天氣快晴、風波亦大に收まり、船の動搖全く止む、是に於てか、弱虫共大に跋扈し初めたり、昨日迄半死の婦人達は、今朝御髪を遊ばし、白粉をコヲと塗り、頬紅迄も其處は御如才なく、最新形の晴着を纏ひ玉ひ、蝶の舞ふが如くに、甲板上に踊り出でぬ、余の如きは、天女の數多天降れるものかと、獨り呆然たり、彼等は今や、例の嬌音を本

調子に張上げて、歌ふが如く盛に、語り玉ふなり、譬へば嵐の翌朝、麗らかにさし登る朝日に向ひ、鶯の梅林に來鳴くが如し、甲板に處狭き迄駢べられたる長椅子、悉く此天女及之に隸屬する紳士と云ふ者の一群によりて、占領し盡されたり、彼等が談話に倦み横臥に厭きたるとき、即ち迷歩を運ぶに當りてや、奴隸の如く、又給仕の如く、此等天女に隨身するを以て、紳士の禮儀或は名譽とす、但し年若き天女は數多の紳士に取圍まれ、老たる天女乃至既婚の天女は、全く侍つかれざるを、一般の風とす、余は此等の事には一向に不得手なるを以て、同志の英國軍人(少佐)と日露戰爭談をなせり

晩飯後甲板に散歩す、電燈の小蔭に長椅子を寄せ、女は横臥し、男は女の足下に屈みて、密語せるを認め、探偵の結果によるに、女は美人と云ふにあらねど、端然たる風姿、衣裳などの着こなし、抜抜けたる英國最近式の乙女なり、男はスバラシキ、之も英國式好男子にして、余が女あらば惚れて見るべしと思ふ様の男あり、此先生は本船の二等運轉士なるが、何と云ふ了見でするのか、まきりに此女を口説くなり、是からマルセイユ港迄、每晚此通り、余はマ港にて上陸したるが、彼女は倫敦迄直行の由あれば、此上猶一週間、此關係を續けたる譯なり、結局如何になりしや、其邊甚だ心配なるが、何は兎もわれ船員が乗客に色をししかけるなどは、甚だ以て不都合千萬からずや、決して焼くにあ

らす

次に、以上の女と乗合の友なる二十一二の女ありき、此女不思議なる女にて、真正面に見れば、十七八の乙女にて、仲々の美人なり、横より見るに及んでは、四十恰好の御婆様なり、航海中着物を頻りに取り更へ、種々勉強したる様なりしが、何處となく垢抜けがしない所あり、人間としても、前記の女より一層見劣り居たり、此女、例の運轉士を競争したるも、好男子は美事横取りされたり、仕方なしにか、四十恰好の飄輕なる宣教師を擒にせり、どう云ふ了見だか、此娘は此老人と、手に手を把りて、盛に甲板を往來して得意あり、最後に憐れなる話あり、一人の色黒き、口大きく、唇他迄厚き、眼の爛々たる、一寸野蠻島の女王宜敷と云ふ女ありき、此人、初は甚だ謙遜にして、誠に氣の毒に感じ、わの色がも少し白ければ、わの口が少し小さければと、大に同情を表し居たる處、或晩よりさかんに衣裳を取更へ、晩食など勿々に濟まして、食堂を出づ、余之を怪しみ早く出で、甲板に至り見るに、果して野蠻島の女王は、幾多の水夫に圍まれ居り、水夫等は慰み半分に彼女を弄べるなり、色の戀のとあつたものにあらず、彼女は水夫等が奉る賞辭媚言を、真正直に受けて、御威斜あらざるなり、實に彼女は此侮辱を受けんが爲め、晩食に喰ふものを食はずして、甲板に走るあり、嗚呼何たる悲劇ぞや

九月九日 快晴、海平、朝八時半と云ふにアデンに着す

亞 丁

平 山 竹 溪

平沙漠々、暗烟塵。水色山光不似春。借問詩情何處好。騎驢客接曳駝人。船停まるや酷熱を極む、アデンは孟買を距る千六百六十四哩の西方に在り、英領にして重要な石炭港なり、人口三万五千を有す、重に「ソマリー」八あり、長さ十哩幅三哩の半島にして、碇碕の岩石より形成せらる、三年乃至五年間に一回の降雨あるに過ぎざる處なれば、一点翠の眼を怡ばしむるものなし、今本船より之を望むに、香港を見上げるが如く、市街は南面してアラビヤ風を受け、仲々清涼ある觀あり、然れども其實酷暑殆んど堪難く、三年も居れば人間の色を失ふと云ふ、故を以て英國官吏或は會社員等は、本國に居る時の月給の二倍位を貰ふと云ふ、本港より四五人の乗客ありたるが、皆赤色蒼ざめて、牢屋より出で來りたる者の如し、又其風俗甚だ古風にして、幾んど一世紀は後れ居るが如く見受けたり、本港は孟買政廳の管轄に屬し、代々の知事は此地に來らざるべからず、(印度各州の知事は、任命當時より管轄區域を巡歴する例あり) 遮莫余はアデンを愛す、一見その善く我熱海に類する所あればなり、即ち琉球節を作

ラテンはよい處南を受けてアラビヤ嵐がそよぐと

彼阿會社は九月三日より本日迄のロイタル電報を騰寫版にして持來れり取る手遅しと見れば待ちに待ちたる遼陽陷落日本軍は又もや大勝利なり何等の快報ぞや思はず大聲に萬歳を三唱す英人又皆之に和す蓋し彼等は皆萬歳の何たるを知らばなり此報導に依れば遼陽は實に九月四日朝九時に陥落せるなり英人曰く船のポートサイドに着く頃には旅順亦陥落すべし其時は三鞭酒を振て君に獻げん余等は君を本船に於ける日本公使と見るなりと

十二時半出帆す午後七時ペリム島を過ぐ英領にして紅海の狭口を扼する重要石炭港なり此港が特に余等の注目を惹きたる所以は日露戦争の始まる前我日進春日の兩艦が本港にて石炭を搭載したることありとす本港はアデンを距る九十哩の處に在り長さ一哩半頁港を有し山を以て圍まる

港内優に四十隻の大船を容るゝに足ると云ふ元來土耳其領なりしが一千七百〇八年にデビット・ペイルト卿が占領したるものにて現今はアデンの代理政廳の管轄するところなり

之より船は紅海に入るに際し、バブ、エル、マンデフ海峡を過ぐ、涙の門と云ふ意味で、

紅海は珊瑚礁多く、嵐の夜は必ず多くの難破船を見舟子が此處に這ひ上り號泣したるより來りしものと云ふ

紅海舟中

河上 遂 堂

日没長江猶未溼、翳々白鳥趁飛船。暑威愈急風愈緩、雲影更紅浪更青。讀書後含靈瘴濕、浴餘衣帶海潮腥。晚來沿例琴聲起、倚遍舷頭隨意聽。

九月十日 快晴海上安全

紅海はバブ、エル、マンデフよりスエズ迄千二百哩あり幅は百十五哩より二百〇五哩に亘る深さは四百尋より一千尋に至る、東岸はアラビヤにて西岸は埃及、ニユービヤ及アビシニヤ等の國に連る、紅海の名は種々の説あるが海中に珊瑚多きより此稱ありと言ふもの其實に近きが如し、併し海水の蒼々たるは他と異なるなきなり、成程海中一面の珊瑚嶼にして、船は此等島嶼を繞りて中流を行くあり、此日依例好天氣、幾多の汽船に逢ふ、餘は瀬戸内海を航するが如き感想を起せり、唯一つ遺憾なりしは露國義勇艦隊の來りて、本船を抑留せざるることなりとす

九月十一日 快晴海上平穩終日讀書酒は飲まず夕、三日月を見る、句わり

紅(暮ない)の海とは云へど久方に

宵告げ顔に三ヶ月の影

九月十二日 快晴夕景に至り少しく波起る次第に陸地に近くが故に、仇浪の打つ
あらん

九月十三日 一天拭ふが如く海面鏡の如し、午后一時半スエズに着す

蘇士灣 渡邊昇

連山無草木、獨見塔尖長。海熱歸潮赤、砂飛落日黃。鐘童黑於墨、野犬大如狼。天暮暑愈酷、
唯貪一扇涼。

之にて紅海の旅を終へたる譯なるが、其熱氣は猶ほ甚だしかりき

スエズ港は人口一万二千ありて、土耳其人、佛人、アラブ人、伊人等雜居せり、郵便及旅
客がアレキサンドリヤより鐵道にて送られ、本港にて積替へられたる時代に於ては、
非常なる繁昌なりし由あるが、現今は此等が運河を通過し積替港がポートサイドと
なりたるを以て、大郵船の碇泊なく、從て乗客荷物の上陸なく、又昔日の盛観たる唯運
河通過の手續をなすが爲め二三時間テウフヒックと云ふ新港に停まるに過ぎず、但
しスエズ本港は之より約三哩の西方にあるあり

午後五時スエズ運河に入る、眼界の及ぶ限り唯見る茫々たる橙色の大陸横はるを、

實に運河は右方亞細亞左方亞弗利加の二大陸を兩斷するものなり、聞く此橙色は世
界中他に見るを得ざる一種の奇色なりと、一樹の遮るなく、一卉の飾るなく、漠として
夢をたどるが如し、余は此雄渾なる景色を描く能はず、唯だ千古の大異觀、大壯觀と云
ふに止めんのみ

抑も此スエズ運河は、世人の知る如く、佛のルセツプ伯によりて設計せられたるも
のなり、此計畫を副王メヘットサイドに打明けたる當時、伯は此國に於ける一外交
官の地位を占め居たるあり、サルマンの特許、パシヤより用地權を得たるは千八百五
十六年にして、千八百五十九年に至り、彌々佛國に設立せられたるスエズ運河會社、一
株五百フランの株式會社によりて、此大工事は着手せられたるあり

パシヤ大株主たり且つ會社に土民使用權を特許せり、當時英國の總理大臣パーマ
ストンの派遣したるロバート、ステフェンソンを首めとし、數多の技師は、此大企業は
商業上無價値なりと、一笑に付し去りたりと云ふ、併し之は佛人が當時云へる如く、英
人の嫉妬に過ぎずして、今や本會社は高率の配當をなすを以て、有名ある世界最大株
式會社となれり、尤も抜け目なき英人のとなれば、歐亞の關門たる此運河に對し、實權
を掌握することの印度政策上必要欠くべからざるを見るや、百方埃及王に取入り、彼

が持ちたる株式を悉く其手に收めたり、故に今日運河會社の實權は事實上英人の掌握する處ありと云ふ、然れども元と佛國の企業に屬することゝて役員には多く佛人又は佛人系を用ゆるを見る

運河の長さはポルトサイドよりテエウフヒック迄九十九哩、幅員二三十間にして、處々「サイディング」として行達船の退避する四五十間位の幅ある處あり、「サイディング」は石垣を築きあれども、其他は土地を掘たる儘なり、深さは最淺二十六呎にして、通過船は皆五哩以内の速力からざるべからず

不世出の英雄奈翁一世は、印度征伐の爲め、地中海、紅海を連結せんとしたるが、彼が技師は、紅海は地中海より其海面三十三呎高しと云ふ報告をなしたる爲め中止したりと云ふ、蓋し喜望峰を迂回するに比せば五千百哩を利する勘定なり、兎に角スエズ運河は、余が今迄に見たる人間業の最大なるものなり、ポルトサイドの阜頭に立ち地中海の船を懸けるルセツプ伯の銅像を仰ぎ見たるとき

ルセツプの名は萬代に響くらむ

スエズへ(末々)殘る君が功績

過蘇士運河想見烈氏之偉業

天 樂

志懷霜雪氣如虹。開鑿功成駕禹功。宇內茫茫多俊傑。殊勳千載最推公。

九月十四日 朝九時ポルトサイドに着す、

本港は川口にて、山や阜などの船舶を保護するものあるにあらず、吾人が想像せる港と云ふものにあらず、副王メヘメツト、サイドの名を取り之に命じたるものにして、人口四萬二千を有し、市街は運河より出て來れば左岸にあり、本港は主要なる石炭港なるが、歐亞を連結する絶好地位を占め、其前途甚だ有望なり、アレキサンドリヤ、カイロ等とは鐵道により連絡せらる

運河より出て來り第一に眼に付くは、左岸に數十隻の石炭船が、荷揚をなせることなり、陸上には石炭の山を築けり、歐亞を往來する船は、皆此地にて石炭を積入れるものなるを思來らば、其盛況を想像するに足らん、

九時二十分上陸したり、不潔なる處、猥褻なる處、盜の處とかねて聞きたれば、其積りにて居たるが、決してそんな恐るべき處にあらず、船附場即ち港には、何處にも免れ難き欠點を備へ居るに過ぎず、世界の隅々より異りたる風俗習慣、異なりたる文明を持ち來り、此等の人々は、皆旅中の元氣を以て、遠慮會釋なく、鉢合はすのであるから、行違ひ調和せず、衝突して不快の現象を呈し、不快の音響を發するは免るべからざることな

り、此等の觀念を以て視たる余には、本港は馬鹿に立派に見へたり

三片拂ひ、船で上陸すると土耳其帽を被つた、例の案内者が群り来る、一志で方々を見せると云ふ、其實三志も五志も取られるるゝだが、余は案内本を有し且語を解するとして不要と辭退せり、水邊の町には船會社及之に關係する運送銀行保險等の諸代理店、軒を並べるを見る、偕て途を左へどり、市街の中心を指して行くと、伊太利人の小間物骨董、珈琲屋、酒屋、飲食店、繪草紙屋等が舖を連ねて、其前には賣手が手を揚げ足を動かして、喧しく、客を呼んで居る、英人を見付けたる眼にて此等の「ラチン」人を見るに非常に劣等にて、そごろに憐愍の情起る、余は「フライラバンテール」シミズと云ふ、日本人が三人居る伊人の店に往けり、主人は日本に長く在留し、又其息子は現今横濱に雜貨店を持てりと云ふ、日本品の立派なる陳列場を有し、外に歐品、土地の産物、反物其他細工物等を商へり、此處にて余は眞正の「アラビヤ」珈琲及「ナイル」河より汲み來れりと云ふ、水を御馳走にかれり、之れから馬車を驅りて、市中及土人町を見る、蹠足で弓を持ち、騾馬を逐ふ、原始的人物の後には、七磅もかゝれるならんと思はるゝ、倫敦仕立の洋服を着て、蹠足の騾馬に駕する西洋人が通過するなど、此處には西洋と東洋の文明が遺憾なく衝突して居るなり、「ラチン」人が多く居るが故か、巴里で起た「カフェ」なるものが澤山ある「カフェ」は「バー」を戶外に迄擴張したるもので、必ずしも珈琲を飲まざるべからざるに非ず、事實上より酒を備むるなり、伊太利人で紳士貴女と思ふ様を一群が種々の樂器を將て、彼處此處に唄ひ且つ踊り居る、之は日本で云へば法界坊主である、乞食である、此連中は飛脚船が着くと、小舟に乗り來り、歌ひ且つ踊り、終には蝙蝠倒にして、甲板の乗客を仰ぎ、錢を乞ふなり

本港にては英語、佛語、伊語、土語が行はれ、貨幣も亦た此四種行はる、眞に複雑極る處也

余は所用ありて「スエズ」運河會社に往けり、「ホーム」のある、恐らくは本港第一の立派なる建物にして、川口に沿ひ、絶好地位に聳立せり、導かれて七十恰好の童顏鶴髮の社長に逢ふ、余は英語の方が得意だが、先生は佛語の外いかんと云ふので、不得止佛語にて會話せり、頗る叮嚀で、種々有益なる説明を聞きたり

此運河會社と云ひ、一般市街と云ひ、表面上佛伊人にて持切り居るが如き觀われども、海運、保險、銀行、政事上等の實權は、悉く英人の手中にありて、「ラチン」人は英人の傀儡たるに過ぎざることが直ぐわかるなり

午後四時、拔錨、阜頭のルセツプ、伯銅像を仰望しつゝ、地中海に入る

羅馬何邊在。鰲頭浪接天。長洋風送客。萬里月隨船。笠綠芭蕉雨。衣黃沙漠煙。莫愁鄉信遠。電氣一系牽。

九月十五日 燬くが如き炎熱はスエズにて猛烈を極めポートサイドにては大に其威力を減じたるが地中海に入るに及んで俄然清涼となり天に蹴ける雲はまるで日本的となれり秋風は吹き初めぬ一片の明月は冲天に懸れり三年の間清涼の氣に觸れざりし余は此なつかしき大氣に觸るゝや肅然として一種の感慨に打たれたり戀郷の情は油然として起り來れるにてあるなり爰に仲磨氏の名歌を拜借し

青海原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

九月十六日 例の如く海上まことに穩かに氣は他迄清涼あり時に東北方にわたる一朶の雲起り來り雨降らんとして忽ち晴れあかねさす夕日を見するなど全く日本酌なり去來歸らん乎歸らん哉古里は實に戀しきものぞかし

九月十七日 天氣益々清涼夕景に至り多少寒冷を覺ゆ人皆黒衣(冬服)に取り替ふ婦人方は日本にてお羽織あるフロックを纏ひ玉ふ一層上品に見奉れり

正午メシナ海峡を過ぐ右は伊太利のレギョ市(人口六萬)左はシ、リ島のメシナ市(人口十五萬)なり恰も我馬關海峡を瀬戸内海に向て通過するの觀ありメシナ市は馬關レギョ市は門司なりメシナ市はレギョ市に比し非常に大にして砲臺燈臺大船渠等あり是等に連りて實に立派なる煉瓦造の大建築物を並べて後山に上れるを見る又山と山の間に大鐵橋ありて其上を蒸車の黒煙を吐きつゝ走るを窺ひて一幅の油繪なりされど世界に有名なる大火山エトナの雲霧の爲め此日之を見ることを得ざりしは遺憾ありき

かくて行く程に六時頃之も有名なる活火山島ストロンベリーを見る船は島の直下を過ぐ恰も摺鉢を倒に海中にふせたるが如し盛に火煙を吐き鎗鏝は噴火口の周圍に流出して堆し此島の東西兩端に人家數多あるを見る斷じて漁家にはあらず別荘などにやあらん

九月十八日 天氣晴朗午後四時頃サーシニヤ及コルシカ島の間を過ぐサーシニヤは現伊王の故郷にしてコルシカは奈翁一世の生れたる處あり兩岸唯だ要塞様のものを望見したるのみ夜に入り少し荒模様となる揺られつゝ寐る明日はマルセイユ港上陸の筈あるを以て此夜余が室の受持なるスチニョート西洋では東洋で「ボ

井[の]ことを「スチエワート」と云ふなりに半磅「バー」掛兼チーフスチエワート」に五志風呂番其他の「ゴアン」スホー井」に合計五志をやる、外に航海中の酒代二磅なり、

九月十九日 朝晴、晩少雨、

午前八時頃マルセイユ港に着す

シヤットウゾフと云ふ昔、牢屋なりき城島と、イルツフリユルと云ふ検疫所のある、一連の島の間に検疫を受くるべく停まる、右方にマルセイユの市街あり、有名なる船渠あり、之に連り市街あり、其後に田園あり、其後に麗はしき山ありて市を包圍せり、寔に地中海第一の良港ならん

牀軀の短き之は英人に比較して云ふのみ佛人及一般「ジャン」人は、英人に比せば短軀、顔色憔悴骨格遅ましからず、凡ての点に於て見劣りせらるなり、検疫醫來る、余等をは横目で睨んだ丈けで所謂検疫あるものを了したり、是に於て本船は徐々として左方より大半圓を畫きつゝ、完全を以て世界に鳴れる船渠に入りぬ、余は海運に趣味を有するととて、大に注意して「ドック」の裝置を視察したるが、船舶繫留の工合、荷役の「法」クレーン「使」の川方「セッド」の規模等、少しも孟買と異なるなく、一般の規模に於て、孟買に優る点を發見せず、唯黒き印度人の代りに、色白き洋服の人間が動かしつゝある

の差のみ

抑も、港は紀元前六百年代、希臘人の開設せしものみにして、現今人口四十九萬四千七百六十九を有し、佛國に於ける第二の市府、第一の海港として、恰も我大阪の地位を保てるなり、佛國の偉大は東洋貿易に成り、東洋貿易は則ち本港を通じて行はれ又行はれつゝあるあり、故に此港の盛衰は佛國の休戚に關する次第にて、佛國政府が鉅萬の資を投じて、天然の良港に加ふるに大築港をなしたる理由は實に此に存するなり、現今輸入の重あるものは、穀類、油種、石炭、砂糖、珈琲、皮類、アルセリヤ羊、及毛類等に、しり、年々約七百萬噸の入船出船ありと云ふ

當時例の慢性的なるを以て世界に有名なる「ストライキ」ありて、船渠内帆檣林立せるに拘らず、一船の荷役せるものを見ず、今其理由を聞くに、マ港には非常に澤山の伊人住し、彼等は佛人に比し生活の程度非常に低きを以て非常に安き賃銀にて働き、佛人労働者をして労働の餘地なからしむ、「ドック」は亦可成廉き労働者を得んとして伊人を使用し、佛人は竟に糊口に窮するに至る、即ち佛人大擧して「ストライキ」を起し、賃銀直上げを要求するありと云ふ、十二時上陸す、竜田先生彌々之より赤毛布の本性を露はすどころあり、彼は先づ一種以上の驚きを示せり、次で盛に文明を謳歌せり、今其

次第を述べん

余は當港の税關は非常に嚴重で、特に絹物、烟草、マツチ等は甚だ八釜敷と聞き居たり、余に一筋の縮緬兵古帶あり、二枚の絹手巾あり、幸に喫烟せざれば烟草、マツチ等は所持せず、併し此帶此手巾甚だ厄介なり、如何せんと心配夥し、偕て税關に抵るに、三個の荷物の内一個を開けるに過ぎず、何にもありませんか、何にもありません、夫れで宜敷也、即ち知る少し位の烟草或は絹物は、是れは自分が持ち居れば、夫れで大丈夫なるを紳士を捉へて荷にも身体検査を行ふの意地なく、佛國税關吏は餘りに禮儀に厚きなり

本船入港するや、例に仍り余は首として戦争の電報を見たり、處が云へるあり、曰く日本の軍艦は、佛郵船を検査し、去るに臨み佛船が手厚き禮をさしたるに、日艦は答禮をも爲さずして去れり、是れ實に佛國三色旗を侮辱したるものにあらずや、佛國政府は、今や日本政府に對し嚴談中なり云々と、佛國は元來露國の同盟國なり、英人が盛なる日本最負あるが如く、佛人は強く日本人を嫌惡せるなるべしとは余の信じたる處なり、況んや今此報に接す、上陸せば余の頭上小石の三ッ四ッ飛ぶは覺悟せざるべからず

税關より「グラノール」ホテルの宿引兼通辨英人あるが佛國に育ち、英佛兩語を自由に操る至極重寶なる人物なり、に連れられ、馬車に乗り、先づ宿屋に至る、馭者は「フロクコート」に「シルクハット」と云ふ扮装あり、馬は佛國特有の駿足なり、「ドック」附近にて先づ余の注目を惹きしは、荷車あり、孟買なれば牛車あるが、此處には非常に大なる車を、非常に大なる馬が牽けるなり、此馬は乘馬或は馬車馬と全く別種にして、佛國到る處荷車の場合にのみ用ひらるゝ専門の車挽馬なり、佛帝ルイ十四世が、良馬を得んが爲め、ノルマンデー種馬と「ミュール」馬とを交尾せしめたる處、こんな脚の太い馬鹿に柔順で力強き牛と馬と加へて二で割た様な馬が出来たるありと云ふ、蹄の直徑一尺もあらん馬具の肩のところ、太き牛の角みた様に突出せり、次に「港の道」路は、驚くべきものにして五寸に一尺の角石を以て、廣き市街の隅々迄も敷めるあり、次に五六七階の決して破壊すべからざる様なる大丈夫な、奇麗な建物が、薨を並べて、市中到る處是れならざるなきなり、彼處此處には佛國の誇といはるゝ鐘天の大寺院が、夫れは又建築の曲致を極めたる規模を以て立てらる、芝居がある、紀念碑がある、噴水がある、馬車驅道がある、散步場がある、「カフェー」がある、花園がある、公園がある、又到る處電車が走れり、大抵二臺乃至三臺の電車を連結せり、此他に「オムニブ」にて乗合馬

車(大抵大馬三頭が駢んで牽てをる「ホアチユール」にて普通馬車其他自用馬車「モートルカー」自働車にて自用のもの、乗合車、及荷車の三種あり)荷車、自轉車、凡ゆる交通機關が雜然として、皆全速力で走てをる、英國或は獨逸に於けるが如く、巡査の立て指圖するものなく、皆各自の爲すが儘に放任するなり、余はもふブツカルならん、今度こそは衝突だと冷々するが、決して打付からず、不思議なる程巧に交はすなり、凡て右に避けるなり、大陸は凡て右避で英國は左避なり、次に通行の人間なり、彼等は先刻御承知の白哲人種と申すものなり、色白は七癖隠すとかや、實に綺麗なり、況んや鼻筋の通り、所謂羅馬形の誠に申分なき顔付なるに於てをや、だ、此綺麗なる男女は、更らに人形の如く奇麗ある装束して、此奇麗なる敷石の上、此奇麗なる建物の間を往來するなり、黒色、跣足、縋縋、倭屋、不潔ある道路等に慣れたる赤毛布には、一種尊嚴なる御光を放つが如く見ゆたり

「ホテル」は「グランノナルコロニー」と云ふので、名代の家庭的「ホテル」である、清潔なること此上なく、主婦を初め、女中の叮嚀なる夥し、此宿屋は四方形の建物で、中間空地を庭とし、熱帯の植物及種々の花卉を趣味深く配置し、三百燭位の電燈を吊し、此下に大理石の表面を持つてゐる食卓をアチコチに配列し、椅子を添ふ、無論、此庭は硝子屋根を張

り、雨曝しにあらす、此他に軒下を利用し、數多の二間四方位の室を作り、夫婦者或は親友の食事するに備ふ、之れが、食堂なり、余は不取敢、靈飯をしたためたるが、其料理の旨いと、顎を落す以上あり、「スープ」は大なる銀のドンブリに入れ、銀の杓子を添へて持來る杓子で自分の皿に入れて、式の如く飲むなり、余は三度更へたり、次に「ポアソン」魚が出た、之れが有名なる「マルセイユ」鮪と來てをる、大切にした焼物だ、旨いの旨くさいので、眞に名狀すべからず、次に「アイスクリューム」次に「チーズ」次に「菜物」次に「珈琲」と來ること、式の如くなるが、余は「スープ」の三杯に、鮪の四片の爲め既に満腹し、唯言譯的に各皿の一小片を試みたるに過ぎず、但し満腹はするも、料理の味は鑑定が付くものなり、小生の鑑定によれば、佛國の料理は世界第一等ありと云ひ度い位甘い、佛國では「アイスクリューム」を夏冬に拘らず喰はす、「チーズ」は「フロマージュ」と云ふて邦人の食膳に漬物の欠くべからざるが如し、次に「菜物」元來葡萄は佛國の誇なるが、此他に「梨子」「桃」等美味なること、驚く許りあり、試に「梨子」を割くに音がせず、一片を舌上に載せんか、自然に溶て去るが如き感を起すべし、英獨亦菓實に自慢なるが、佛國産の足下にも及ばざるべし、珈琲に至りても、本港は大陸の大珈琲港と云はるゝ程の輸入港なれば、旨いこと勿論なり、佛蘭西人の飯は麵麩也、總て麵麩製法が發達せると夥しきもので、英獨等の「パ

ンは迎も其足下にも及ばず、此他に諸種の漬物あり日本のヨーロッパ的のもの、梅漬的のもの、醋漬的、酒漬的、粕漬的等、凡ゆる種類あり、英國の如く濃厚一偏の幼稚でなく、料理の程を極めて、淡泊に傾かんとするなり、實に料理法に於て語るに足るものは、世界廣しと雖ども佛人のみと云ひ度くなる也。

晝飯後「トーマスクック」でマ港よりリチン、巴里經由倫敦までの上等通切符を買ふ、代價七磅あり、佛國鐵道は、最急行等には一等のみのことありて、二等では不便尠からず。

次に日本の名譽領事を訪問したり、火酒「セルローズ」等の大問屋の主人で、福々しき人なり、仲々親切に待遇せり、次に「ノートルダム」と云ふ山上に、兀立する「ゴシック」風の大寺院に詣ず、之に登るには殆んど直立せる「ケイナルカー」に依るなり、寺の門口兩傍には尼が寶石を商へり、内に入ると、東京「ニコライ」堂の二倍位廣さありて、微な音でも大に反響する彫刻窓、硝子繪畫等、美術の粹を萃む、他に難船の圖額、破軍帽、刀劍、制服、軍旗等が飾付けられたるあり、此等は遺族が紀念の爲めに、奉納したるものとか、堂内燧に蠟燭然に居るを見る、是れ諸國より巡禮に來りし善男善女が奉れるものに係る、皆様御燈明を御献げなさいと、尼様が賣て居る工合、日本風に異ならず、此寺を外面より

見るに、高い塔の上には、金塗の大なる聖母が、港の方に向けて立て居る、水夫を護るなりとか、佛國の水夫が此寺を信仰すること、我金比羅に於けるが如しと云ふ。

偕て、回廊より下を瞰むに、マ市は巻繪をどを揚げたらんが如く、寸眸に集る、例の「ケイナルカー」にて下山し、「カセトラル」を見、「バレイロ」ン「ジャン」と云ふ、「レネイサン」式の建物其の繪畫廊、彼園等を見、カンチビエール街にある「ブールス」取引所にて、建築費三百六十萬圓を見、目坂きの市街を廻はり、ボレク公園を逍遙す、此はボレリトと云ふ佛人が帆船蒸氣船の過渡時代に、海運にて鉅萬の金を作り、何百町と云ふ大廣地を買ひ、自邸を造り、大庭園、大競馬場等を營み、一代の豪奢を極めたるが、死するに臨み、遺言して、此土地及營造物一切をマ市に寄附したるものにして、市は之のまゝ之を公園と改したるものなりと云ふ、此夜例の美味ある晚餐を終り、「チペラ」を觀に行きたり、處が佛國で而かも開港場と來て居るから頗る付の美人が、頗る思切たる藝を見せる、各椅子には「チペラグラス」函が附てある、五十「サンチム」の銀貨を投すと、函の蓋が自働的に開くを以て、即ち眼鏡を取り出して、穴があく程美人の顔を見得るあり、此處には淫賣婦盛に出入す、余は初め貴女の見物と心得居たり、芝居は少し早目に切上げ、年々定期に開店すると云ふ、大市を見る、宛然東京淺草觀音の年の市也、夫れから歸路、市中を

うろつき、辻君を愚弄しつゝ佛語の研究をなし「カンフェー」に寄り「ピール」を傾け、歸宿す此日初めは驚き、次に賞嘆し、終りに稍通人を氣取るに至れり、撲らるゝだろうと思ひしところ、決して撲られざるのみならず、到る處誠に叮嚀なる取扱には、却て張合なく失望したり、日本人だと頗る彼等の注目を惹き「ジャポネ」く」と私語し、シロく余の顔を見る、御光などの發するにやあらん、戦勝國民あれば

九月二十日 巴里、里昂、地中海線と稱する朝九時二十八分發急行列車に搭じ、里昂に向ふ途中はローン河が美なる小山を圍り、て地中海に注ぐ、佛國にて最も有名な山紫水明の地方あり、彼の高襟詩人などの歌ふ、葡萄畑は、此地方にあるあり、佛國の土地が如何に立派に耕され、佛國の百姓が如何に有福なる生活を爲せるか、佛國村落が如何に美麗あるか等は、此地方を通る者の注目に値する所なり、或は山を廻へ或は清流を渡り、或は森林に入るなど、余は東海道を思ひ出せり、蒸車で晝飯をさし、午後二時二十八分と云ふに、里昂に着す、正金銀行の坂井、小田の両兄出迎へらる、グランオテル子ゴシヤンなる里昂第一流の宿に御輿を据へたり、マ港を大阪とし、巴里を東京とせば里昂は正しく京都なり、我桂川加茂川に對するにローン、ローンの二清河あり、京都が絹織物の中心なるが如く、里昂は世界の絹業の中心あり、我の本願寺に對し、里

昂は嘗て佛國大僧正の本據なりしこと等、對照し來れば、能くもかくは似通いたりと
思はるゝなり

里昂は人口四十七萬五千人を有し、紀元前五百年代に希臘人の建設したるものなりと云ふ、「コロセツ、フルビエール」と云ふ、「ノートルダム」寺及巴里の「エツフェル塔」に倣ひて作りたる「フルビエール」塔のある丘岡に「ケーブルカー」にて上り、瞰下せば市街は「パノラマ」の如くに見ゆ、前述のローン、ソーンの二大清流が殆んど並行して市街を貫通し、中間の部分は最も繁昌なり、この中間の市街の東端に丘陵の如き高地あり、この處が絹糸の中心にして、余輩の見聞する所によれば、豫想の如く器械によるものにあらず、工業組織も手機制にて全く家内の工業なり、自己の勘定にてやるものもあれば、他人の爲めに賃織或は加工をさすものあり、余は世界に有名なる當市の絹織業が、近世工場組織にあらずして、家内工業なるを見て、豫想外に感したるが、元來絹物は美術品で、器械に掛かるべく、其技術餘りに妙微あるの事實を見ざりしによるものなり、高島屋の太田君の話しに、從來日本の羽二重の程度迄は、原料と見做して輸入税を課せざりしが、十月十五日より加工したるものと見做し、之に二割に近き重税を課することとなりたるに付、當地にて加工する原料の輸入著るしく減少すべく、英國

の自由港に絹業を取らるゝの結果を見るべし云々

次に「カセドラル、オテル、ド、ビル」市役所、取引所等を見て、ルバルク、ド、ラテート、ドール「金頭公園」に至る、我上野公園に似、園内に動物園、植物園等あり、植物園には世界の凡ゆる植物を築め、一々名稱、産地用途を書き附けあり、印度の椰子、バナナ、コ、ナット、蘭、マンゴ等は、例の温室にあり、日本の梅、櫻、菊、百合、牡丹等にも、久し振り面會を遂げなつかしかりき

動物園には、當市の名稱たる「ライオン」獅子居らず、上野公園の動物園より不忍池に出づるに、亭々たる喬木林を通るが如く、本公園も動物園と金鷺湖との間に同様の喬木林あり、湖上には歐洲の池湖に普通なる、帆掛船の如く遊泳せる大鵝鳥の浮ぶあり、若き男女の徐漕せるあり、園周には、乳母が例の姥車を押して、童女の嬉戯せるあり、或は肥滿を避けんが爲め、二八の乙女が自轉車を稽古するなど、云ひ知れず閑雅あり

我京都が寒暑とも厳しきが如く、里昂は亦寒暑とも烈しき由にて、此夏など百十度迄熱度上りたりと、當時なほ秋なるに余は非常に寒氣を覺へたり、印度から來た故にあらず

此公園の正門に一の記念碑あり、佛國を代表する女神は憤然としてアルサスロー

レンスの方面を指し、其女神の足下に當市を代表する獅子が楯矢を負ふて苦めり、是は獨佛戦争の戦敗紀念碑ありと、戦勝紀念は、余屢々之を見たるも、戦敗紀念碑は之が初めてなり、佛國人たるもの、たゞ無心の兒童と雖之を見て憤起せざらんや

是から小田君の下宿に行き、正金の菊地、仲佐、宮岡、坂井、小田の諸君が、手別けして調べられたる日本食、鋤焼鯛の丸焼、吸物、日本酒等ありを饗應せられたり、久し振のことにて、一入の美味を感じ、大に過食せり、食後種々の話ありたる中で、仲佐君の説に曰く、當地の銀行利子は三步にして商人利子は六歩なり、絹業は薄利なれば、大商人は此利率差を利用して大に儲けるなり、又曰く、佛國は非常なる富國なり、百姓などは非常に儉約にして、非常に蓄積す、故に二歩位で之を使用することを得るなり、露國外債は、最近の調べによるに、百五十億、フランなり、其内八十億は佛國の金なり、日本で此低利の金を使用せざるは遺憾あり、當地人は上等入などは、此日露戦争の爲め日本人の眞價を知り、非常に内心尊敬するに至りたるが、露國と此財政上の關係ある爲め、露國に左袒せざるを得ざるあり、露國の公債を持つは、單に上中等の人のみならず、一般の人民之を持って、例へば正金銀行の小債、佛人が五枚持ちをると云ふ風なり、彼は自己の利益上より、露國が敗ることを欲せざるなり、故に勝ち誇る日本人を惡むに至る、彼等は

日本人を見ると「プチングル」と云ふ、小さき黒奴と云ふ意味なり、我等は黒くはないが、彼等は白があるを以て云ふならん又曰く、當地人は甚だ勘定高く、利の前に人情なく、悪賢くして少しも油断ならず、且つ風俗淫亂にて、妻女にして間夫なきは少れなり、眞夫は吝嗇にして、妻女の「フロック」乃至寶玉を買ふを嫌ふあり、然れども飾を生命とせる女は、他迄之を欲す、即ち間夫を拵へ、操を金に代へ、以て此慾望を充たすありと、佛國にて直ちに眼に付くは、賣店の賣子が、凡て頗る美人なるにあり、傾城の笑顔をして極めて叮嚀に、世界最美と稱せらるゝ佛語で來るから、物を一つ買ふにも、一種以上の愉快を感ずるが、彼等は、大抵間夫を持ち、或は淫賣婦ありと

余等は打連れて、此淫亂市の夜景を見るべく出掛けたり、先づ一年中佛國の各地を巡回するて、市を見る、日本の勸工場的にして、組合組織なりと云ふ、マ港で見た我儘草奥山見た様もものなり、次に寄席「諸藝芝居」チエマー「ハラエテ」に行く、藝當は云ふ迄もなく、思ひ切り面白ひが、他面に於て此處は一種の大魔窟なるなり、幕になると數多の佛蘭西女中の佛蘭西女が、ざらりと散歩場へ出御遊ばさる、其光景三千の辨天様が天降れるが如し、此に於て紳士諸君なるものは、香水と「コスメチック」で固めたる頭を振り立て、此辨天連の間に割り込み、鵜の目鷹の目で美形中の美形を撰び眼

元口元は申すに及ばず、腰付迄も注意深く御覽あり、借彌々御意に叶ひたれば、ちよいとあきた、あの鳥使は仲々旨いではありませんか、まゝ珈琲でも飲で話させうで、珈琲屋に行くなり、珈琲も飲むならん、酒も飲むならん、空腹の辨天様になると、御菓子を召上るなるべし、此辨天様仲々鋭き商賈人なれば、一杯の葡萄酒で嘲られては引合はずと云ふ考へから、君は妾を愛するか、然らば妾の宅に行かないかと、早速御催促が初まる代價でない結納を定めて、此紳士は辨天様へ婿入を遊ばすなり、此等の芝居で賣残りたるものは、酒場へ押掛ける、芝居は十一時に終る、十一時から酒屋が盛にあるなり、佛り酒の爲めにしたゝか、良心を麻痺せられ居る男は、容易に此魔女の餌となるなり、佛國は公娼を認むるなり、此公娼に對し此種の女を引張り、稱す、寄席酒場等に入るは資本を要す、故に資本なきものは、市街を賣り歩きするなり、以上余は君子の言ふを屑とせざることを言へり、何となれば、歐州文明の表面を謳ひ、裏面を語らざるは、之を描くに親切ならざるを、信すればなり

九月二十一日 晴天

正金銀行支店長小野政吉君の案内にて、里昂商人俱樂部に行き、小野菊地、五十嵐の三君と會食す、次に高島屋に竹田、太田、齋藤の同窓諸君を訪ひ、次に晩食を菊地、仲佐、宮

岡坂井、小田、五十嵐諸兄と里昂第一の橋本なる料理屋に會食す且つ飲み且つ語る、快談湧くが如し、次に「フランスパレクル」と云大散歩場に行く、中央にルイ十四世の乗馬の像あり、佛國が帝政より共和政体に移りたるとき、凡て帝王に關係ある像を打碎はしたるものなるが、此像だけは餘りによく出来居たる爲め、其儘に置きたりと云ふ、實に名作あらん、生動するが如し、カフェーに行き、例の澤山に出御せる辨天様の秋波を頂戴しつゝ、飲み且つ語る、次に此處を引上げて裸踊、遊廓など見物し、翌朝一時二十八分の急行列車にて、佛國首都巴里に向ふ

巴

里

中井

弘

凱歌門向佛皇宮。

樹影燈光夜景紅。

欲問當年創業跡。

奈翁廟畔月如弓。

巴黎城郭一望看。

十六炮臺戰後寒。

吟客登臨無限感。

歐洲猶未保平安。

春滿街頭車馬紛。

葡萄美酒帶餘薰。

遙自凱歌門外望。

綠林原上客如雲。

智圖蒙塞團團開。

無邊佳景絕塵埃。

珊瑚珠與金剛石。

能動都人魂魄來。

同

西岡宜軒

巴黎府裡小仙鄉。即是人間避暑場。樹色苔光淨如洗。衣香扇影亦生涼。白紗衣薄肌如雪。斜倚窓窓繡帳中。夜半期耶々不到。齒香吹送薔薇風。層閣霜飛欲暮秋。留郎一夜話閑愁。

盜資省得有餘算。新購千金臘虎裘。奇香滿帽綵花紅。捲盡車窓倚細風。不奈吾即歸去晚。

凱旋門外月如霜。

九月二十二日

晴天、大陸的の寒氣を覺ゆ

朝九時九分、世に花の都と謳はるゝ巴里「カールド・リオン」に着す、兼て里昂より手紙及び電信にて依頼し置きしことゝて、公使館の外交官補津田五郎氏「ステーション」に出迎へらる、氏と余とは同窓あるのみならず、東京駿河臺にて一年半許り同宿したる縁もあり、平素より心許せる友垣なり、相見ざる五年餘、彼は外交官にて、且つ巴里と云ふ世界社交場裡で磨き上げ、散髪の工合、髭を蓄へたるなど、頗る人相變り居れり、余に於ても三年間の印度仕込にて、東京神田水道の水を使た時分とは、餘程色黒くあり、少なからず御姿變り居る筈、加之ならず、彼も余も共に近眼と来て居るが、友情と云ふものは、奇妙不可思議のもので、以上の外面的變体にも拘はらず、彼が余を見出したるか、余が彼を見出したるか、何時の間にか、互に相抱いて互に再會を喜ぶありけり。「君は丸で佛蘭西人見た様だよ」と、心から彼の立派になりし風体を賞めたるに對し、「君は印度に久しく居たるに拘らず、餘り色が黒くあいせ」と云ふ御挨拶には、誠に恐れ入れり、「ボワチニール・デリー・ヘルト」と稱する二頭立の馬車を驅り、赤毛布彌々より是

都入の圖也、リニエツリオンノ大道より、高襟の新跡詩などで耳が幸魚にある迄聞されたる、セーヌ河を左に取りイル、ツ、セントルイイル、ツ、ラ、シターとて、恰も大阪の中之島の様か、兩島を見、右方には「オターイル、ド、ビル」市役所、世界美術の中心たるルーブル夫れから東京の銀座に相當するアベニユー、デ、シャンゼリゼーの大通等のある、世界の最大美市と稱せらるゝ巴里で、又粹を抜きたる目貫の處を通過せり、之は津田が、先づ田舎者の荒膽を抜かんとするの策略と見ゆたり、實に建物の宏壯雄麗なるは申すに及ばず、道路もどはマルセーユ又はリオンの如く、石疊のガタ／＼にあらすして「アヌファルト」道にあらざれば、木道「ハード、ウード」堅木を煉瓦の形に切りたるものを豎に埋並べて作たる道あり、馬車など通るときは、金輪のものでも馬蹄の音のみ憂々として聞へ見向されば、馬車やら馬やら分らぬあり、市中到る處として、兩側に綠樹あり、二道以上の分るゝ處に植込あり、津田の教ゆる儘に、左顧するに「シヤンプル、デ、デビユア」國會議事堂巍々として、河邊に兀立す、不世出の大才ガンベッタを聯想し、悵然として天空を仰げば、「エツフェル」の大鉄塔は雲表に聳へ、其尖頭一二寸にして大輕氣球の人を乗せて半天に隠れるあり、余は見るものゝ如此珍奇、壯觀、華麗、清美あるに眩惑し、呆然として唯大口を開くのみ、諄々として述べ立てつゝある津田の説明などは、馬耳東風

と聞流し、腦裡湧き來る萬感に打たれ、時に狂氣の如き喜悅の表情をなすを免れざりき、「ビブル、ツス」露國萬歳と號ぶに、夢より醒たる如く、我に復るに、是は京童の我等日本人を嘲るなりけり、新聞も近頃は、大に日本を尊敬し初めたるが、開戰當時は随分思切つて日本を卑み、悪口をつきたるものありなきと聞きつゝ、「マゼラン」街ある「オターイル、マゼラン」と呼ぶ宿屋に着、女主人のこれこそは佛蘭西女の標本と思はるゝが例の美聲朗かに、美の結晶と云はるゝ佛蘭西語を以て、「ウイ、モツシユ」ビヤン、モツシユと云ふ調子に釣り込まれ、一も二もなく談判終了、即ち巴里見物の本陣を此處に構へたり

例の美味なる料理を圍み、山程ある珍談湧くが如し、かくて朝飯を済まし、先づ巴里市を大觀すべく、「トロカテロー」セーヌ河を隔てゝ相對する「シヤン、ツ、マール」練兵場にて千八百六十七年、千八百七十八年、千八百八十九年、千九百年等の博覽會の敷地あり、長さ千百ヤード、幅五百五十ヤードありに赴き、超然高擧せる「ツール、エツフェル」二名三百ヤード塔に登る、抑も此塔は千八百八十七年より八十九年に亘り、技師「エツフェル」氏の建設したるものにして、巴里市の何れの部分よりも、之を望見するとを得べし、遂に此塔上より瞰下せば、市内は勿論五十五哩の四方は「パノラマ」の如く、事詳

細にわかるるあり、實に世界の最高塔にして、高さ九百八十四呎、基礎積百四十二呎四角上部に行くに従ひ狭少となるも頂面猶ほ三十三呎四角の面積あり、總て鐵製にして中空廻昇段あれども、大抵昇降機により昇降す、一、二、三、四階等ありて、各階には廣き廻廊あり、其處には望遠鏡其他、体重測量器、蓄樂器、易占器、活動寫眞器等据付あり、此等は皆自働的なり、紀念品の賣店あり、例の美人の賣子が、吾等の財袋を搾らんとするは申す迄もなし

塔の頂上より紀念端書を親友に送るなどして、後津田の説明により巴里を大觀す抑も巴里が政治上、佛國の首都たるのみならず、美術、科學、商工業上に於ても、佛國の主府にして、兼て世界の最大見世物市なることは、今更云はずもが、其人口は三百萬、面積は三萬、エーカーあり、清河セーヌは半圓形に、市の中央を貫流す、其長さ七哩に亘る、此内にセントルイ島及シテール島の二島を含むを以て、巴里は自然にセーヌ河右岸左岸及此兩島の三部に分るゝなり

巴里は政府側よりセーヌ縣及人民の撰舉に成る市會の治下にあるものなるが、平年の經常費は、實に三億五千萬フラン、壹億五千萬圓なりと、以て其規模を窺ふべし、全市を二十區に分つ、(1)ルーブル(2)ブールス(3)タンブル(4)オテルドビル(5)パンヲチン(6)

- リニクサンブル(7)パレイブルボン(8)エリゼー(9)オペラ(10)アングロセントロラン
- (11)ボパレノクル(12)ルイ、(13)レゴベラン(14)チアサルパトワール(15)ボーギラルド(16)シ
- レバチノールボンソー(18)モンマルトル(19)レブテシヨイモン(20)メンルモンタン

是れ也

巴里は如斯廣大あり、而かも到る處として立派あらざるなく、面白からざるなし、各區夫々特長の一見せざるべからざるものあり、少くも六ヶ月を費すにあらざれば、巴里を知れりと云ふべからず、尤も撰中の撰粹裏の粹なきにあらざ、余は之を數へて左の諸區を得たり、先づ巴里の中心たるルーブル區、其隣のエリゼー區、及ブールス區、オテルドビル區、セーヌ河向のパレイブルボン區、リニクサンブル區等なり、此他に有名なる芝居のあるラメラ區、トロカデローのアルバシー區、及シテール島、ノートルダム寺と寺町により直通せるタンブル區、寺院區等、觀ざるべからざるものゝ内なり

巴里のシテール島は、紀元前五十一年「パリシイ」種族の建設したるものにして、英語の「シテール」を意味し、倫敦の「シテール」伯林のウンテルデンリンデン、紐育の「ダウンタウン」に相當するものなり、單に巴里が、此「シテール」より發達したるのみならず、佛蘭西なる國は之より起源したるものなりと云ふ、現今大審院のある王宮、ノートルダム「セントチャ

ベルの両名刹及オテルデユー「公設慈善病院」等建物中見るべきものありとす

セーヌ河の右岸ころ、巴里の實業及流行の中心にして、名たるとブルバール(巴里)にては道路を分ちて「ブルバール」「アベニュー」及「リユー」の三とす「ブルバール」は、市中目貫の大通にて中央を馬車道となし、例の木道なり、兩側は人道にて、大抵アヌファルトの砥の如き街道なり、此街道には綠樹を並植せるは例の如し「アベニュー」は幾多の町筋を連絡して、市中の主要部を貫通する、縦筋の大道あり、リユーは普通の町にて多くは「アベニュー」に連絡せらるるには宏壯なる大厦高樓、相連つて町筋四ツ角に聳へ、華美を盡せる大芝居、人目を眩惑する店舗等は、皆此部分に集中せるなり、世界美術の寶庫を以て目せらるる「ルーヴル」世界に其類を見ざる大通たる「シャンゼリゼー」巴里市役所、我市役所の如き殺風景のものにあらずして、宮殿に劣らざる建築の致粧飾の美を極めたるものなり、彫刻物、公園、音樂堂、建築の大偉觀を以て鳴る「トロカテロ」世界第一の大芝居たる官設「オペラ」王宮、倫敦のブリタニッシュ、ミュージアム内の大圖書館にも劣らざる國民圖書館「ビブリオテック」、ナショナル「羅馬のフォリウム」に於ける「ベシヤン」院に倣ひたる建方なる大取引所「倫敦、マンチエスター」及獨逸の諸市に於ける取引所の建築、亦皆此式による、英蘭銀行、獨逸帝國銀行と、歐洲金融界鼎足の一たる

佛蘭銀行、世界の郵便制度に其範を作したる郵便局「オテル、デ、ポスト」等宏壯雄大なる建物、亦皆此部分に斐を並べつゝあるなり

次にセーヌ河の左岸、即ち全河により半月形に限らるる巴里の部分は、全市三分の一の面積を有し、其特点是學術技藝の淵藪なるにあり、ラチン街ある「ソルボンヌ」大學は正に英國の「オックスフォード」「ケンブリッジ」に對するものなり、此區分の西端河岸には國務長官及各國公使の官舎、代議院、陸軍の諸部署、舊貴族の邸宅、主にセントセルメーン街にあり等あり、普通の見物人が觀るべき重なる場所は「リュクサンブル」の宮殿、(建物及内部の美術品尤も見るべし)丘上に聳立せる國葬寺たる「パンテオン」、中世の技術品を蒐集せる「クリュニー」博物館、植物園、及び余は余の愛する佛蘭西人の真中「セーヌ」河の邊りに埋められんことを願ふと云ふ遺言に對し、蓋世の英雄奈翁一世を埋めたる「オテル、デ、アンパルト」等なるべし

午后二時頃、津田、五十嵐、余の三人にて「ポアド、ブー、ロン、ニユ」大公園に馬車を驅り、ラック、シユペリユアー、及ラック、アンフェリユアーと稱する二湖水の連絡せる處にて昔隅田川にて鍛ねたる腕を試さんとして漕艇す、此處は巴里の市中にてありながら、全く紅塵を絶てる幽境あり、げに夕べ天女の浴したらんと思はるる、清湖に隔てなき友

垣と學窓時代の得意技を揮ふあり、其快蓋し言ふべからざるものあり

午后三時過ぎ、英國のハンプトンコートよりは寧ろウインザー離宮と云ふべく、獨逸のポツダム離宮に相當するメルサイユ宮殿を見るべく、ガールデアンパリド(停車場)より電氣列車を取る(普通の列車にて、蒸力の代りに電氣力を用ゆるものなり、日本に於ける特別仕立の廻遊列車の如くにして、粧飾實に清麗を極む、夜間は満車燦爛たる電燈を點す)セーナ河を右方に見下し、巴里の城壁を踰ゆるや、烟突林立せる諸工場の鐵槌の喧轟を聞きつゝ、次第に上阪とあり、墜道などを通り、約半時間にしてメルサイユ市(セーナ、エ、チアス縣の主府にして人口五萬四千あり)アル街なるソプロワトリヤ停車場に着、直ちに馬車を驅り、有名なるルイ十四世の離宮たるメルサイユ宮殿(或は城)に至る、佛國帝政の大立物、一世の豪華を極めたるルイ十四世を主とし、代々の帝王が財を惜まず、各其時代の鉅工名匠をして、遺憾なく天才を發揮せしめたることゝて、流石に世界第一の宮殿たるに耻ぢず、英國の兩殿は固より、獨逸のポツダム宮殿も之に比せば光を失ふべし、東方遙に巴里のリュクサンブル宮殿と相向ひ、一筋の大道は實に此兩宮殿を相結ぶなり、建築は小形にして、煉瓦及石材の角造あり、其後園は廣大都雅を以て世界に鳴る、近頃の計算によるに、建築後園、其噴水、十字架形の池水

彫像等の費額は、二億圓餘にして、維持費年額、百十六萬圓を下らずと、以て其結構を窺ふべし

此宮殿の起源はルイ十三世の爲めに遊獵殿として建てられたるに初まり、ルイ十四世の御宇に至り、御獵の時のみならず、屢々大宴を此所に催ふせらるゝ、杯馴致して遂に全朝を爰に移し、號令を天下に發するに及び、ヘルサイユは金剛石の如く全歐の飾となるに至れり、又星移り物替りて、例の革命時代には、王宮の道具は賣拂はれ、繪畫は凡て「ルーブル」に移されたり、此宮殿が今日の如く、博覽館に變化したるは千八百三十三年より三十七年の治者、ルイ、フィリップの主唱によるものにして、彼は之を全歐の秘藏品庫たらしめんと期したるありと、例の普佛戦争の時、此宮殿はプロシヤ王ウイルヘルム一世の參謀本部なりき、千八百七十一年一月十八日には、聯邦各州の協賛を得て、プロシヤ王は獨逸皇帝として戴冠したるなり、如此にして、益々聯邦制度の強固を期したるは、例の鐵血宰相の計略によるものからんが、之れ實に佛國に取りては拭ふべからざる汚点ならずや、夫の或は里昂の戰敗紀念となり、或はプロシヤ、ドラ、コンコルドに於けるストラスブルの彫像に、喪服を裝ひ、花環を捧げ、全州のアルサス、ロレンスを押領せられたるを忘れざらしめんと勉むるなど、何れか此没情殘忍の處

置に憤り、到底之に報せんとする苦慮ならざらんや

アンドラレイヌ大道に一車を驅り、一哩ならずして「グラン、トリアノ」及「プチトリアノ」なる平建の離宮に達す、前者はルイ十四世がマダムトマインテノの爲めに建てたるものにして、王は其瀟洒なるを愛し、特別客の爲めに屢々晚餐、舞踏、餘興、滑稽戯曲（モリエールなどは、茲に櫻痴居士的の役目を仰せ付かりたるものあり）等を催したりと現今は名家の繪畫及やんごとなき方々の用ひたる道具、或は彼の蒐集したる美術品を陳列せり、客室に大「テール」あり、其表面に當時十七世紀の世界圖あり、ルイが三千の美人に戯れつゝも、宇内の大勢に注目を怠らざる用意ならんが、現今の地圖に比せば、非常に不完全にして、形ち大に異なる處多し、特に日本あるものと見當らざるは甚だ滑稽なり、ルイよ汝猶靈あらば、來て汝が其存在を知らざりし日本が、汝の最も恐怖し、汝の子孫たる今日の佛國が、潜伏する怪物、露國を何の苦もなく膺懲しつゝある腕前を拜見せよ

「プチ、トリアノ」はルイ十五世がマダムリユバリーの爲めに建てたるものなるが、ルイ十六世の後、マリーアントワネットの愛好したりし宮殿なり、例により遺品の展覽あり見るべきは庭園にして、一大池水を穿ち、其周圍に田園生活を寫せり、贅澤に飽き

たる反動として、當時の田園詩人たるセルソー、著「村落預言者」なる書物、非常に歡迎せられ、此小説の背景を此處に實現したるものありと傳ふ、曰く庄屋様の御邸曰く捕吏の家、曰く牧師の居宅、曰く水車場、曰く閑房、曰く羨さい屋、曰く馬屋、皆眞に迫れり、花の如き宮女は夫々ルソー先生の教科書を携へ、此處に來りて、實地演習をやられたるものなちん乎

津田に、佛蘭西歴史の講義を聞きつゝ、參天の杉林の間に一直線をなせる大路を取りて、ベルサイユ宮殿の後園にある十字架形池の邊に出づ、試みに此十字架池の一端に立ち、宮殿を望見するに、池水は清くして鏡面の如くに湛へ、幽邃の林叢は劃然眼界を限りて、超々遙かに宮殿を見る、曠濶雄丈而も清閑幽雅人をして去る能はざらしむ、此時此際十五夜の月は彼方の森の松が枝に貫ける大珊瑚球の如くに差上れるなど、情趣寫すべからず吾輩死する迄、此清遊を忘るゝ能はざるあり

○ 渡邊 東民

林泉依舊尙明媚。殿閣依舊尙崔嵬。猶有人事淡於夢。昨日榮華今日非。猶記春風月明夕。百花影裡君王歸。三千宮女笑相迎。頰霞鬢雲萬重圍。又記彈丸雨注日。誰知却爲敵所依。未消二十年前恨。鸞魁來穿袞龍衣。

七時卅七分、例の電氣列車にて歸巴す、ジュマの「格姫」にて有名なる「オマラコミック」の横町ある料理屋にて、巴里料理の粹の粹なるものを喰ふ、其勘定は津田持のこと、て一入の美味を感じたりき、食後一里の不夜城大通を散歩す、晝間業務に忙かりし巴里人は夜間決河の勢を以て、此大通りに押寄せ或は散歩し、或は「カフェー」に飲み、或は美人に戯れ、怡然として一日の勞を忘るゝあり、支那の李鴻章、日本の伊藤さんは勿論英國の皇太子でも本街に來れば大海の一滴となりて消失するなり、人或は「プール」の夜景を見て、不夜城と嘆賞し、百鬼夜行と慨嘆す、余直覺的に之を觀察して、多大の趣味を感じり

十時頃、全町の「チエートルデマウポータ」を見る、流石は巴里の芝居丈けありて、マルセーニ或は里昂の比にあらず、四階の高樓なるが、内部は見渡す限り、一本の支柱を見ず、各階の棧敷、天井、四方の壁、運動場「カフェー」等の彫像粧飾、唯人目を眩惑する許りなり、役者技藝の妙は、今更ら言はずもがな、生辨天の數多、棧敷に徘徊せらるゝこと例の如し

九月二十三日 晴天昨日よりは少し暖氣也

朝九時頃、孟買の「タタ商會」よりの紹介狀を以てリニエラフィット街の「タタ商會」を訪

ふ、昨日は一日、津田の厄介になりたるが、既に巴里は呑込みたる積りであるし、且は佛國にては馬港及里昂にての経験もあり、一足飛びに佛國式の高襟をきめ込み、今日は獨立運動と出掛し、街に出るや「ソトン」をつこらと、馬車屋を呼び「アレナリユ、ファイテ」ラファイテすを頂戴し、街に出るや「ソトン」をつこらと、馬車屋を呼び「アレナリユ、ファイテ」ラファイテ街に行けと命令を下し、少し遅しと見るや「アレビテ」早くやれと云ふ風に叱り飛ばすなど、赤毛布はこゝ頗る得意也

或は「シャルダン」花園區に出で、或は満艦飾に飾り立てたる寶石店、小間物屋の町筋を通り、或は意氣で高尚な貴女と紳士が、手を組で舞踏するが如くに行交ふ「ブラス」廣場に出で、或は鐵道馬車、電氣鐵道「オートモビル」自動車、例の牛馬兼体の大馬三頭乃至四頭にて牽ける荷車、頭小さく、眼大きく、首長く、房々たる美尾を高く波打たせる「アラビヤ馬」、少くも五千「フラン」を出したらんと思はるゝにて引ける「トクカート」ニ「ウニエラ」種馬の二頭立ある「プローカム」自働的大荷車、岡太郎馬車、軌道なしの蒸氣車、此他想像し得べき凡ゆる運輸機關が、雜然として行交ふ四ツ角に出で、終りに發天閣が覺を並ぶる間を、小さくなつて出て來り、無言の驚愕の姿勢にて、ラッツイエツテ街の五十番にと着にけり、車屋に待つべき旨を命じ、紹介狀に名刺を添へて右手に持ち、帽を

取りて左手に持ち「ベル」を押し、熟ら様子を見るに、ドーも商店の構らしくなく住宅の如し、ハテ不思議と思ふ内、下婢出て来る、即ち演述口調で滔々(?)と來意を述べると、私の處はソナナ所でありませぬ、夫れは大かた、ラフヒテ街の五十八番の間違ならんと言ふ、即ち紹介状を見るに、ラファイテ街と明記しあり、之れは朝より縁喜でもない、頭掻きつゝ出來りたる時は、迎も見られたさまであかりしなるべし、更に二「フラン」を張込み、今度は真正のタ、商會に着く、支店長セスナ氏(パーシー)と面會、孟買の近況を聞かせ、巴里の近況を聞く、折悪しく此日は「メールドー」にて、畫間氏は手脱け出來ず、其代り佛人の番頭が案内して呉れるとに、かれり、例のルーブルの諸館、ナボレチンの墓陵のある、現今參謀本部のある、オラルアンパリド、及びリュクサンブル宮殿等を見物し、一にも二にも嘆賞と驚愕を以て、迎へ、かくて再びタ、商會に歸るや、セスナ氏は「メールドー」を終へ居たるとして、余を晚餐に招待せり、八時半同氏の案内にて、久しく余の希望なりき世界最大の「オペラ」を見物したり

此「オペラ」は實に巴里人の深厚雄大なる趣味を表白したるものにして、文藝美術の研鑽場なり、正面に國民音樂學校「アカデミー・ナショナル・ド・ミュージック」の大文字を刻出せる宏壯華麗の宮殿にて、正しく近世文明の誇也、光也、技師カルニエール氏の設計

に成り千八百六十一年に起工し、千八百七十四年に完成したりと云ふ、世界に比類なき大芝居にて、其敷地實に三「エーカー」優に二千五百五十六人を容るゝに足る、今其費額を聞くに、敷地のみか四百二十万圓にして、建築費は一千四百六十萬圓なりと云ふ、大抵其立派さは、之によりて推量せらるべし、世界の珍木奇石は各方面を蒐められ、夫々適當に布置せらるゝを見る、前廊「ポルチコ」に七個の「アーチ」を有し、各「アーチ」は文學美術を代表する彫像にて粧飾せり、右方よりいへば第一柱には「シユフセイ」作の琴歌像、次は「ギヤウム」作の音樂像、次は「アイセラソ」作の短歌像、次は「シヤブ」作の演説像、次は「リユボア」及「パトリキル」作の歌像、次は「フワルギエール」作の戯曲像、次は「カルポー」作の手踊像、次は「ペロー」作の謡曲像等なり、各像の上には「メダリチヤン」を刻出せり、「ロシヤ」畫樓には三十本の「コリンス」式一石柱あり、其内十六本は三十三呎の高さにして、十四本の小柱は赤大理石、各金輝の柱頭飾を戴けり、又驚くべき彫刻ある「アチツク」は金輝の能樂面、及詩神と樂神が美神及譽の神により侍らるゝ彫刻によりて粧飾せらる、建物の中央屋根には低き「ドーム」あり、其後に三角大破風あり、其上には「アポロ」神が金羽馬に跨り手を揚げたる彫刻立てり、「オペラ」の前面は「オペラプラス」と云ふ大廣場なるが、「オペラ」建築者たる「カルニエール」氏の銅像屹立す

借て光り耀く黄金門を入れば、玄關又は前房に至るべし、此處には切符賣下場あり、
 「此オペラ」は官有なるを記憶せざるべからず、門番等すべて兵士及巡查を用ひ、例の如
 く鉦工名匠の作に係る彫像並列せり、直ぐ目前に大階段あり、「エスカリエール」ノ
 「ア」御幸段と云ひ、カールニエールが最も力を盡せる作なりと、段は白大理石欄干は「ア
 ルゼリヤ」瑪瑙なり、三十本の一石色大理石の大柱は、轟々として三階の上に卓立せり、
 其他彫刻金輝電燈凡てが夢想的龍宮の實現也、余は平場に座りたるが、仰望すれば「
 一ム」の天井裏を見上ぐるあり、此天井一杯は「オペラ」に關係ある歴史畫を以て蔽はれ、
 金むくのピカ／＼光れる彫刻の粧飾ある、是も一世の名匠によりて作られたる電燈
 が千生瓢箪の如くにあつて煌々として燃いてをる、左右及び後側には、例の「ボックス」と稱
 する高座が、小宮殿の如くに開き、錦繡の幕の内より花の如き美人が、繪の如くに粧ひ
 て「オペラ」鏡にて余等を見下すなど、言ひ知らず美觀壯觀を極めり

舞臺は高さ百九十六呎、幅百七十八呎、奥行七十四呎にて、演藝は我國の能樂と同じ
 ものあり、問答叙事悉く歌にして、嚴肅莊重を旨とす、此「オペラ」の役者は非常に名譽あ
 り、政府の試験を経て、皆斯道の蘊奥を極めたるものなりと、何はともあれ、此「オペラ」の
 雄麗精美は、寔に言語に絶し、之れを觀されば共に天下の美を語るに足らずと云ひ度

くなる位なり

▲塞 納 河 (セーヌ河)

栗 原 後 樂

樹影連橋翠欲流。濃烟一抹鎖綺樓。麗人多少臘脂水。寄得離愁注五洲。

▲凱 旋 門

南征北伐弄兵機。席卷五洲振武威。勦業全成多枯骨。凱旋門裡幾人歸。

▲仙 游 樂 地 (シャンゼリゼー)

玉勒金鞍公子馬。朱輪華殺美人車。都門未許誇全盛。菜色亂民據井闕。

▲公 約 德 場 (コンコルド)

噴水銅盤龍起雨。凌雲石塔劍磨鋒。當年頸血淋漓地。化作人間遊樂場。

▲朱 里 宮 園 (チニイリリー公園)

頽垣殘礎故王宮。幾代豪華一炬空。花木園歸借樂地。如今無主領春風。

▲拉 布 雨 宮 (ルーブル宮殿)

不聽鳴鑼佩玉聲。唯見遺蹟麗雕楹。輪蹄無禁宮門裡。博覽場開舊帝城。

▲華 士 鐵 塔 (エッフェル塔)

天崩地裂凱歌聲。奮鬪如狂拔古城。護國雄魂水不汚。千尋鐵塔見功名。

▲奈 翁 廟

栗 原 後 樂

拔山力盡霸圖空。追懷當年感不窮。恨殺英雄千古業。消沈古廟一棺中。

▲盧 堡 宮 園 (ルクサンブル)

林泉靜邃骨將仙。石馬踞淵噴水烟。門落薔薇香滿地。春風猶有似當年。

九月二十四日。此日天氣晴朗、然れども寒し、朝九時五十分カールドノールより、いとをしき巴里に「ナルボア」を告ぐ、蓋しカレイドパー經由、倫敦に向はんとてなり、食堂車にて二人の英人と昵懇になれり、一人は極めて快活なる男にて間斷なく喋くり、今一人は威嚴ある沈黙、即ち英人の所謂「イマングリシユ、サイレンス」を守つて居る、兩人共常識の他迄發達してをる生粹の英人なるが、前者は自らも言ひし如く、非常なる旅行家程ありて、圭角がとれ、進歩主義で、一般英人の欠点たる頑固なるところを、白く、余は日本を愛す、進歩主義なればあり、宗教に束縛せられざればなり、教育と宗教の區別判然たればなり、之に反し、英國は宗教の爲めに進歩する能はず、實に宗教は萬事に就て英國を退歩せしめつゝあり、云々、此紳士の風采を見るに、端然たる二十世紀的標準英人風なり、四十二三才にして李坡浦の棉商人ありと、次に沈黙先生は如何と云ふに、五十以上の年配にて、羅馬加特力教の教文乃至獨逸人の様な黒衣を着け、凡てが質素

を極む、この人は余が右の二十世紀先生と喋々宗教を談じ、教育を論ずる間、一言をも交えずに居乍ら、夫れでも熱心に聞き居たるものと見ゆ、後より二十世紀先生を余の「カー」に派遣し、日本人の宗教觀を叩かしめたり、此舊式先生はジョンホルの粹なるものにして、エリザベス朝の遺物かと疑はるゝ位、自ら持すると高く、仲々頑固なり、兩人共自餘英人の如く、盛なる日本最負なり、但し前者は進歩的なるが故に日本人を敬愛し、後者は勇武なるの故を以て我を敬重するの差あるあり

余は今や英京に向ふの途次、此兩人に逢ひ、以上の觀察を以て、非常の利益を得たり、何とあれば今日の英人は、凡て此二種の型の何れかの一に屬するものにして、此二型が社會のあらゆる方面に於て、暗闘をあしつゝあるを、後日發見したればなり

午後一時四十五分カレールに着す、既に列車の來着を待ちつゝありたる、外輪の英國海峡運送船に乗るや、乗合の數多の英人は、余が側に群り來りて、祝辭を述べ、余其何の故たるを糺せば、曰く、今朝の來電によれば、旅順口は陥落せり！此吉報をドバーより持來りたるものは、即ち此瀛船なりと、萬歳萬歳萬々歳、余は大日本帝國を負つて立てる總理大臣であるかの如くに狂喜せり、而して彼等の祝辭を受けたり、之れが例の虚電ならんには、倫敦に迄知れざりしなり

海上平穩なりしが故に、一時間程にて無事ドーバーに着す途中税關吏行季を檢せり
ドーバーは、白堊岩天然の屏風の如くに立ち塞がり難攻不落の要害なり、流石の奈翁
が其對岸カレーより指を喰へて睥視したるは、實にもと思はれたり

余は今、我全盟國へ上陸するのである、船を出る、瀟車に乗る、唯に周圍の光景が變り
「ツイ、モツ、ニュー」が「イエス、サー」に替りたるのみならず、町噺にして美貌なる佛人車掌
は、卒直にして雲つく男の英人と變化せるあり、鐵道、橋梁、建築、村落、住民、風俗、言語等、凡
てが佛國に比せば、田舎臭い頑^{ハツチ}なるが、如何にも丈夫らしき感想を起せり

末廣 鉄 腸

澤々牛羊滿曠原。高樓層閣幾村々。車丁指點龍城近。煙氣蒸空日色昏。

四時四十五分、チャーリングクロスと云ふ大停車場に着す、檜田住谷等十數名の在

倫日本人諸君、出迎へらる

檜田住谷兩君と、停車場の「バー」で名物「ツイスキーソーダ」を仰ぐ、佛蘭西のうれに比
せば無愛相極る「バー」女の批評的秋波を浴びつゝ、此處を出で、これも名物なる「ハン
ム」馬車(御者客の後方に乗る)を驅り、しよば降る雨の英京を小さき車窓よりのぞきつ
どある英人の家庭に下されたり、これなんランカスターゲート街グロスターテレス

なるワルトン夫人の住居にして、余が滯京中の本陣にと、檜田兄の周旋しくれたるも
のなり

余は此日から倫敦を見物し始めたるが、其大体を此處に云ふて置く必要ありと信
ず、倫敦は言ふ迄もなく、世界の最大都會なり、併し單に倫敦と云ふも、意義甚だ漠然た
るものあり、シチー、ナブ、ロンドン、カウンティ、ナブ、ロンドン及グレート、ロンドンの
三通あればなりシチー、ナブ、ロンドンは金融、銀行、保險、其他貿易の中樞で、晝間の人口
は九十萬に達し、夜に入れば三萬に減少す、カウンティ、ナブ、ロンドンは中廓外を含み、
其人口四百五十萬に達す、グレート、ロンドンは外廓外迄を含み、人口七百萬と號す
余が此處に倫敦と云ふは、グレート、ロンドンで通常世人が倫敦と云ふ倫敦を云
ふなり

巴里がシチーより發達したる如く、倫敦はティムス北岸の小市邑、即ち今日のシチ
ー面積僅かに一方哩より發達したるものあり、之れが次第に發達するに従ひ、貴族階
級のウエストミンスター市を初め、ティムス河兩岸の八十五村を合併せり、かく種々の
都邑が異りたる時代に於て漸次に併呑せられたることとて、且つは例の頑固ある住民
か各其市區の自己流を通し行くを以て、現今に至るも倫敦市は雜然たる糺ぎ合せ街

たるの觀あり、倫敦の特色は此處にあり、巴里、伯林乃至紐育の如く、整然たらざるどころがその値打也、倫敦は巴里の如く美ならず、伯林の如く清らかならざれども、さりどて紐育の如く殺風景ならず、其廣袤は六百九十餘方哩なるが、此廣大なる街は、隅々にいたる迄、アスファルト道にあらざれば、木道なり、特に人目を引くは、道路に一本の鐵軌(レール)を見ざるとなり、是れが又英人の自慢あり、倫敦の建築は玉石混淆にして、煤烟及濃霧の爲め黒くなり、伯林等に比せば古色蒼然たる趣あり、四五百年以前の建物が處々方々に散在せるが故のみにあらざるなり

シチーが倫敦の生命なるが如く、倫敦は英國の生命なり、巴里が佛國の政治的首府で、伯林が獨逸の軍事的首府なれば、倫敦は英國と云はず、世界の商業的首府あり、大英國總關稅の折半は、倫敦より收入するものに係ると云ふ風にて、倫敦を作つたテムスの兩岸には、世界無比の港灣制度があるので、倫敦は又た實に世界第一の港である、倫敦港の出船入船は、大英國外國貿易の六分の一を占むと聞けり

テムス河の長さは二百三十哩で、大蒸氣船と雖ども、五十哩の上流に溯ることを得、倫敦は此兩岸に沿ひ河口より百二十哩に亘りて横はる、場末の方を細かく云ふ必要なければ、此處には倫敦中の倫敦に付て云はんは、之れを二つに分ち、例の法律學校

で、八益敷いテムプル(倫敦の眞中)を中心とし、之より東及西即ちシチー、イーストエンド及ウエストエンドの二とせん

前者はテムプル以東で、商業地又は金儲地である、港船渠、稅關、銀行、取引所、敷ふべからざる事務所、兩替屋、「ブローカー」、「アンターライター」、「郵便本局」、「タイムス」社此等を壓して雲表に聳ゆる「セントポール」寺院等は皆此區域に包含せらるゝなり

後者即ちウエストエンドは、テムプル以西で、金を費ふ處、法律を作る處、流行を作る處である、王宮を初めとし、貴族の邸宅、俱樂部、博物館、繪畫廊、芝居、兵營、内閣諸省、貴衆兩院及ウエストミンスター、アメイ等はツヨリと並べるなり、又此區域は公園、街區及花壇の聚叢せるを以て人目を惹くべし

倫 敦 谷 朝 軒

儼然北海大都城、自古源々出俊英、義繫君臣三鼎立、富資鋼鐵百工成、人摩肩去不分影、雲接地飛難放晴、別有壯觀堪注目、白鬚老將閱天兵、厦屋相連若疊波、虹霓百丈截長沙、從來市况如奔馬、無復人心似老駝、強富名通天下著、貧窮民比首都多、欲知來往舟車利、龍動橋頭幾度過。

全 南 條 碩 果

街衢閉戸日升暉。知是滿城朝拜時。斷續鐘聲多少寺。人々皆挾教書之。

全

村田保

驅馬高嘶雨忽催。鈴鳴門外乞人來。滿天烟瘴盡如夜。層道響聲車似雷。
朝餐棄母買衣去。夕市賣妻携酒回。十萬蒼頭嫗與贊。空誇龍助歐洲魁。

九月二十五日 晴天麗かに指登る朝日を浴みつゝ、檜田住谷の両君と宿を出て、

イトパークの南端、ケンシントンロードに添へる皇婚アルバート記念像、及アルバートホールを見る

記念像の構内へ入ると、四角の一層高き處あり、其四隅に歐羅巴、亞細亞、亞弗利加、及亞米利加を代表する彫像立てり、夫から又一段高き處に四角臺を作り、其四隣には農業、製造業、商業及工業の代表彫像立てり、其上に又一段高き臺ありて、其四方面には各時代の代表技術家百七十八人の集合彫刻あり、其上にアルハート親王が「ガーター」禮服を着て立てる金塗の十五呎像あり、其天蓋は金地と青字にて、女王ビクトリヤ陛下及陛下の臣民はアルバート親王が社會公善の爲めに盡瘁せられたるに對する感謝を紀念せんとて此碑を建つるもの也の銘あり

此建造費は壹百貳拾萬圓にして、半額は寄附金、半額は國庫の支出に係ると云ふ

「アルバートホール」は此記念像の正面に建てられたる圓筒造の大廣堂あり、伊太利復興式にして、音樂會、技術科學等の集會、又は其他の公共集會に用ひられ、バルホール、チャーチンパレオン等屢々來りて例の長廣舌を揮へりと云ふ、其廣さ優に八千人を容るゝに足り、其建築費は二百萬圓なりと云ふ

此日恰も日曜日なりければ、日曜奏樂あり、余も亦三志を張込みて入場せり、正面に大「オーガン」あり、其音猛烈、高調のときは窓硝子を打破るべく、「アングロサクソン」の血汐は湧くべし、低調泣くが如く訴ふるが如き時は、頑たる田舎漢をして猶且袂を推らしむ

次に「プラットホーム」に現はれたるは、美にして清き三十前後の、遺憾なく發達したる牀軀を持てる、標本的英國婦人が天女の衣の如き白衣を纏ひたるなり、彼女は人間以上の直ちに骨髓に滲み入るが如き、清き朗らかな美聲を以て「春のさゝやき」なる名歌をうたひたり、次は燕尾服着けたる紳士が、さびある「ジョンホル」の音調を以て「パトラ君」なる滑稽歌を演せり、始めより終り迄滿堂寂然として軍令を待つ隊伍の如し、只だ時ありて或は激し或は悲しみ、中には涕を流せるものあるを見たり、今日は彼等の安息日あり、此は彼等の清樂あり、余は健かに此日を以て「ジョンホル」の崇高なる真趣

を窺ひ得たり

之より日本人俱樂部に行き、本家日本食をしたため、久し振りにて玉突を試み午後九時頃歸路に就き、ブリチツシユニユシヤム附近に住める榎田氏の友が訪づる、シユマの椿姫生活をつくりなり、

九月二十六日 晴天、來英以來非常に快暖を覺ゆ、例の「ガルフ、ストリーム」の加減ならん、十二時迄宿の主婦及娘を相手に英國の風俗習慣を聞き、日本の風俗習慣を聞かせつゝ、山鳥の尾の長々しき話に餘念なかりしが、机上の論にては仕方なしと、正午「ベグツカー」案内記を片手に、實地演習にと出掛けたり、先づ途をハイドパーク内の「サーペンタインリバー」の北岸に取り、西岸に沿ひて南方に公園を横ぎり、グリーンパークを見、パーククレイン街を過ぎり、ハイドパークの東門たる「マーブルアーチ」に出で、又公園の北端馬車驅道をたどりて歸宿せり

ハイドパークはケンシントンガーデンと續き合ひて、面積三百九十噓「ケンシントン」共六百三十噓也と云ふ、大したものであり、之れが土一升金一升と云はるゝ、倫敦の真中に横はつてをるのである、園内「サーペンタインリバー」と云ふ幽邃なる湖水あり、佳人を乗せて舸を泛ぶべく、彼處の丘には、蒼鬱たる深林を穿ちて清風に臥すべく、又粗

林に入りて、孔雀、山鳥、牡牝鹿等を逐ひ出し得べく、或は公園の園圃に配植せる珍奇の花卉を見、造化の美を賞すべし、馬に騎り得るものは「ライデングコース」に行くべし、其處には此道の達人巡查ありて、騎手に怪我なき様見張居れば、下手でも生命に別狀なかるべし、「オートモビル」を持つもの、箱馬車を持つもの、「ウクトリヤ」を持つもの、自轉車を持つもの、皆行ききて「ドライブングロード」に乗れ、乗物なく而かも幽邃の趣を解せざるの俗物と雖も、此處に來りて皆様が乘廻はる有様を見聞せば、幾分か心行くならんかし

夕飯後「バス」云ふ二階付の馬車に乗り、ハイドパーク「プレー」スより、オックスホルド、ホルボーン、チープサイド等の東京銀座に當る大通を英蘭銀行迄行き、而して返る、此間二階の一番前の椅子を占領し、下界を瞰下したり、意は蠢々たる飯袋動物を白眼に睨むなりし、此通りは倫敦中最も繁昌し、朝より日没迄は、貴婦人令嬢方が「シヨツピング」に出掛け、日没頃から舞臺は一轉して、名高き醜業婦、及之を追ふ俄鬼によりて百鬼夜行の巷と變化するなり

士女相携晚逐涼、百花香亂與衣香、生憎樹隙朦朧月、照出鴛鴦夢幾場、

杉田 鶉山

九月二十七日 九時頃起出でたるに薄暗く、食堂なほ瓦斯を點せり、余怪で之を主婦に問ふ、曰く「セニエイン、ノーメンバ、フナク、眞正十一月霧なり」と、實に戶外は眞暗なり、直き前の街燈さへ、極臙ろに光るのみ、余は好奇にも勇を鼓して外出す、全身に薄絹を纏ふが如く快暖にして、夢中を彷徨するが如し

ハイドパークに入る、寸前を辨せず、晝の夜とは之を云ふならん、殆んど手探で公園を南東に横ぎり、ハイドパークコーナーに出でたるときは、夜の引明くるが如く明るくありたり、即ちグリーンパーク夫れからパレイスカーデンをまがり「バツキャンガム」王宮を見る、これは又驚くべき王宮なり、一寸府廳宜敷と云ふ豆腐形の建物で、王宮の莊嚴もあければ、雅致もあく、輪奐の美などは、藥にしたくもあし、何そ其名の立派にして、其實のつまらなきや、余は失望しながら猶途を東南に取り、傍近の近衛兵營を見たり、雲つく男が、例の棕櫚の毛の様な奇妙なる制帽を被り、赤服を着て、見た處頗る立派で、如何にもエラシーあり

是よりセントセームス公園を正東に横ぎり、内閣ホースカード「アドモラリター」を見たり、久しく「タイムス」紙上で御芳名を承り居たるとして、今日拜謁するに付て、一種の感慨を起せり

今朝より歩き續けて、大に疲勞はしたるもの、巢に引込むはマダ／＼時刻早しと云ふ處より、有名なる「ウエストミンスター」等を訪ふ、

現英王エドワード七世が本寺で戴冠したるは吾人の記憶に新たなる處なり、抑もウエストミンスターアベ、はテムス河の左岸ある窪地に、有名なる英國々會議事堂とアピントン街を隔て、屹立する名刹なり、西曆六百十六年頃アングロサクソン王セバルトが建立したる者にして、爾來或は増築せられ、或は外寇の爲めに打壞されたるが、結局王家の墓所とあり、國葬寺とあり、百年の後此境内に葬らるゝを以て、不朽の名譽となすに至れり、例により「ゴシック」流の本堂が巨人の如く屹立せる此清境に入るに、古色蒼然たるが故にか、一種崇高なる感に擊たる、内部は十字形をなせる建物にして、滿堂大理石の紀念像立てり、曰ウイリヤムヒット、曰マルコルム大將、曰ワイルン提督、曰クラッドストーン、曰ゴルドン大將、曰アイザックニエートン、曰チャールスマルウイン、曰ロバートステフェンソン、曰ワット、曰セキスピヤ、曰ウイリアムウチー、曰サチース、曰ヘンリーフォセツト、曰サツカレ、曰オリバーゴールドスマス、曰ロバート、曰テニソン、曰トーマスグレ、曰ミルトン、曰ベンジョンソン、曰ロングフエロー、曰マコレ、凡そ英國史に芳名を残せる英雄豪傑は、悉く網羅したりと云ふ

も過言にわらず、余が踏み行く地面は棺の蓋にして「セクスピア」此處に眠る「グランド
ストーン」此處に横はる「等の銘あり、余は幼時英文學を愛誦したるが、此處に來りて書
中の諸名士に會するが如き感を起し、低徊數刻去るに忍びざりき。

九月二十八日 例により朝霧深し、後晴天、米國經由にて日本行手紙を書く、正午よ
り徒歩にてリセントパークに遊ぶ、此公園は倫敦最大公園の一にして、四百七十二噓
の面積を有す、周圍は「アウターサークル」と云ふ廣大なる馬車路を以て繞らし、内部は
植込芝生等趣味深く造りたる小徑「Y」字を裏返して置た様な大湖等あり、園内の造營
物で余の注目を惹きたるは、動物園、植物園、「プリムローズヒル」及「ロースクリケット」場
等なりとす。

動物園 流石は世界最大の動物園と云はるゝ程ありて、大きく完備したるものな
り、千九百一年の觀覽人は無慮七十五萬五千六百八十五人ありしと、動物の數は、二千
九百二十種にして、七百九十種の哺乳動物、千五百七十五種の鳥類あり、土曜日の晚は、
陸軍音樂隊園内の奏樂堂に來りて奏樂す、本園の象及駱駝は婦女子を乗せて大に儲
け居れり。

植物園 公園の北方に動物園ありて、南方には植物園あり、圓形をなし、「インナーサ

ークル」と呼ばるゝ馬車道を以て圍繞せらる、奇麗で、築山的で、貴族的ではあれど科學
的にわらず、英國的にして、獨逸的にわらず。

「プリムローズヒル」 此はリセント公園の北方に位する高地にして、之に登れば東
南眼界の及ぶ限り、雜沓の倫敦市街を眺むべく、北方ハムスラッド及ハイゲートの鮮
綠を覽るべく、倫敦第一の佳境なり。

「ロースクリケット」場 此は園内の西部にあり、「ケンブリッジ」チクスファード「兩大
學」及「イートン」對「ハーロー」學校の競戯を以て有名あり、實に全英國は此を見んが爲め
に、此所に群集するなり、先づ「倫敦の回向院」あり。

五時頃、ヘーカー街停車場附近の「マタームチユリー」蠟細工展覽場を見る、古今を通
し、世界の有名なる人物を、自然大に捏製したるものにして、一々眞に迫る、或は現英王
エドワード七世の戴冠式あり、或は「チルソン」戰死の光景あり、或は現内閣々々會議あ
り、時節病人目を惹くは、我 至尊が伊藤、山縣、東郷、黒木等を隨へ、クロバトキン、アレキ
ソーフ等を隨從せる現露帝ニコラスに謁を賜ふ光景なりとす、傍らなる一英人、其何
の場色たるを聞く、余之に告げて曰く、露帝が平和談判の爲めに來京參内せるありと、
英人謝して曰く、成る程！入場料は一志なるが、尙ほ六片を張込めば、其附屬たる奈翁

一世遺品蒐集室及驚怖室とて、石川五右衛門、高橋お傳的惡黨の生姿、ルイ十六世、マリ
アントワネット等の首刎ねられたる斷頭臺、其他恐怖すべきものを寄せ集めたる一
室を見るを得べし

七時頃歸宿、檜田、住谷、高石(大阪毎日新聞通信員)等の諸君と會食後、「イチャールドスリ
」と云ふ青樓にて玉突をなし、十二時半頃歸宿す

九月二十九日 晴天、朝十時ブロード街の「ドール」と云ふ仕立屋にて、常服を造らし
む代價六磅也、領事館、正金銀行、三井物産等を訪ひ、エラキ方々と物言ふ、自分もエラク
なつた様に思へり

九月三十日 朝晴、晚少雨

都人か「チューブ」と呼ぶ地下鐵道を取りて、「シター」に至る、抑も此「チューブ」は地面
より三丈位の下に、徑一丈五尺餘の鐵管を二條連絡したるものにして、長き管狀をな
すが故に此名あり、此管中を電氣にて動く列車の走るなり、セバードブッシュと云ふ
倫敦の西端驛より、ウクスブリツジ路、オックスフォード街、ホルボーン及チープサイ
ドを經、英國銀行迄六哩の倫敦中、目貫の地を通るあり、貸銀は二片均一にして、労働者
には特別の取扱をなし、往復切符を二片にて賣出す、切符は入口にて函に投入するを

以て、途中切符紛失騒をなす必要あり、車内は非常に清潔を極む、聞く此は米人の發起
に成り、米國の資本に係ると、此貴族主義の倫敦、而かも其中心で、是は又絶對的平民主
義を實行せる這般米人の勇氣は、吾人の嘆賞を値すべからずや

余はローヤルエキステンションの前で下車し、其近くなるセントポール寺を見たり、
有名なる大寺で、此寺の鐘か開ゆる範圍の奴が、所謂倫敦兒であるのだらうで、例の
ツクチーと云ふて、我ハランメイ調をやるなり

次にモニメント塔を見る、此は一千六百六十六年九月二日より七日迄打續きて、
四百六十街、一萬三千二百軒、及八十九寺を燒盡し、七千三百三十五萬圓の損害を倫敦
に加へたる大火事を、紀念せんが爲め建てたるものにして、高さ二〇二呎あり、三百四
十個の廻段によりて登り得べし、頂上の鉄欄に倚り四方を望むに、眼の及ぶ限り偉大
ある英京を瞰下するなり

不相變おひろいにて、お江戸日本橋に相當する倫敦橋を見たり、但し此橋は日本橋
の如きケチナ橋にあらず、テムス河に架けられたる最初の橋にして、長さ九百二十
八呎幅五十四呎、五個の花崗石大アーチによりて支ゑらる、其欄干の「ランプ」臺はペニ
ンシユラ戦争にて分捕したる大砲もて鑄造したるものありと、全工費は、二千萬圓な

りと云ふ、本橋は交通最も頻繁ある兩岸を連絡するものにして、毎日二萬二千輛の馬車、及十一萬の通行人ありと、以て其盛況を推すべし、次に少し下流に架せる塔橋を見ぬ、全長半哩にして、中央に高百四十二呎、長さ二百呎の塔橋あり、大船の上流に溯るときは、底部の中央より両方に引上げられ、其間に通行人は塔橋を通るなり、構造は鐵骨石皮にして、工費千六百萬圓なりと云ふ

次に此塔橋々畔に巍々として聳ゆる倫敦城を見たり、昔時久しく牢屋として用ひられたるものなるが、現今は兵營、遊就館、寶物庫等に充てられ、古代の服裝を爲せる門番衛士等徘徊す、正に史詩的光景なり

歸路有名ある「ギルドホール」に至る、倫敦市役所なり、先づ附屬の圖書館、博物館、學校等を參觀し、議院に至る、既に閉場せるにも拘かはらず、役員の一人來りて余に握手を求め偉大なる貴國民の性格を祝す等の讚辭を述べ、特に余の爲めに案内し、諸室を觀覽せしめ、倫敦市長は如何にして就任披露の宴を開き、バルホフは如此にして答辭演説をなし、日本公使林子爵は如此に坐し、チャンパーレンは税關問題に就て如此に公開演説をなし、聽衆は如此にして聴けりなど、一々叮嚀に説明し、呉れたり、新聞紙上にては能く聞く話あるが、現場に來て見ると、成程と合点の行くなり

六時歸宿、夕食後、檜田君、住谷君等と、ル「アハンブラ」てふ寄芝居に行く、「エンパイヤー」(寄芝居)と共に、レイヌスター、スケニヤーにあり、倫敦中最も著名なり、尤も兩者共又有名なる大魔窟なりと知るべし、此夜の掲題は「アングロフレンチアンタナ」英佛全盟と云ふにてありき、幕が開くと、平和の神像は舞臺の中央に建せられ、各國を代表せる一群の女隊は、神前に舞踏し、禮拜をなす、何となく怖ろしき風体をさせる惡魔は、來りて女隊を追散らし、平和神像を打壞はす、次の幕が開くと、一群の小女隊、日本の軍服を着けて中隊運動を爲す、大拍手、大喝采なり、記應せよ見物人は日本の同盟國民なり、次に露西亞隊來りて、之も調練をなし、ロシア踊をなす、棧敷の隅の方に一二人拍手せり、思ふに佛人が獨逸人なるべし、次の幕は歐羅巴五大強國、及日本を代表する美人隊現はれ、交るゝ前列となり、前列とありたるものは、各其代表する國風にて手踊をなす、小女隊は皆代表國々旗を前掛となす、就中日本隊は揃ひも揃ひし美人隊で、旭日旗の前掛をなし、花見傘を翳して舞ふ、滿場崩るゝ許りの大喝采あり、今度は日本隊及露西亞隊が舞臺の兩側に分れ、日本隊の後に英國隊及伊太利隊、露西亞隊の後に佛國隊、獨逸隊、日本隊と露西亞隊は、中央に來り、入り亂れて舞ふ、次幕は英隊、佛隊、露西亞隊、三隊現はれ、佛隊は惚れゝする美人隊、英露隊は男裝女隊あり、舞ひつゝ互に美人隊

と合せんと競ふ、佛女隊何れに就かんかと感ひ、暫時躊躇の後、豁然英隊に合し、互に相抱く、露隊は指を喰へて茫然自失す、大喝采、最終幕は、日本露國兩隊の間に、英佛隊が入りて仲裁をなし、又初幕に見せたる如く、各國隊が寄集り、平和神像の周圍に、平和踊をなすと云ふ筋書あり、役者少しも物言はず、唯音楽によりて動作し、仕様によりて意味を表はす、頗る美的なり

十月一日 朝雨、正午より晴

雨を冒して貴衆兩院を見る、佛教信者が印度の佛陀伽耶を語る如く、立憲國民は英國の議院を禮拜せざるべからず、ウエストミンスター寺の後ろ、テームス河に沿ひたる近世ゴシック流の大建物あり、貴族院、衆議院、ウエストミンスターホールは互に相連絡せり、千八百四十年の起工にして九十七通の應募圖案中第一等賞となりたる、チャールズバリー卿の案によりしものありと云ふ、敷地八噓を占め、内部は十一の廣庭百の段階子、千百の部室より成立し、建築費大枚三千萬圓を要したりと、かくも造用のかかりし建物なれども、欠点なきにあらず、外部の石材は白雲石あるが、風雨の爲め次第に壞圯するが如き、建築の基礎が餘り低きに失し、高潮の時はテームス河の水面下にあるが如き是也、建物の北端に、大時計塔聳立す、高三百十八呎にして、中央塔は高三

百呎、南西の「ピクトリヤ」塔は三百四十呎の高さあり

テームス河に面する建物の構造は、宏壯雄麗を極む、長さ九百四十呎にして、ウヰリヤム勝王よりサインクトリヤ女王に至る迄、歴代英王武裝像を刻出せり

階て内部に入るに、外部の壯觀に遜らず、諸室の趣味深き裝置、飾付は云ふに及ばず、隅々に至る迄、手の込みたるさま驚くべき者あり、廊、待合室、委員會室、ウエストミンスターホール等には帝王、宰相、政治家等の大理石彫像を並置す、又歴史的重要な大出来事は、名家の揮毫によりて天井裏及壁上を飾れり、議場は恰かも神輿の中にでも入りたるが如き感を起す、繪硝子を透して来る五色の光線は、彫刻或は丹青によりて粧飾せられたる内部に燦發し、燦然として一種云ふべからざる美觀を呈す、議員席、議長席、演壇、傍聽席、來賓席等を見るに付け、余は此處に一世の雄辨を揮ひたるパーク、セリマン、ピット、グラッドストーン乃至バルホワー、チャンバレーン等の諸名士を想ひ起さざるを得ざるなり、實に彼等の演説振は、髣髴として眼前に浮ひ來るなり

此日土曜日ありければ、かねて小室支店長の誘引もありたれば、ボンズベリなる三井俱樂部に日本食の御馳走に預る爲めに行けり、十一時頃歸宿す

十月二日 曇天、折々少雨

十二時頃、キユーガーデンと云ふ場末の大公園に遊び、次で佛のヘルサイエ宮殿に似寄りたる「ハンプトンコート」を觀覽せり

十月三日 晴天、日本郵船會社に往き支店長セームスと快談す、日本人にては、吉井、石井、春田、永井等の諸君に會したり、談笑の後、吉井君は余を拉して「シチー」第一流の青樓「バーマーストン」に抵りぬ、先づ入浴し、晝飯をしたゞめ、玉突をなして歸る、時に暮色蒼然たり、梅田とアールスコートなる伊太利品展覽會を見るべく「パス」を取る、至れば一組の男女あり、相抱きて密語し、時々接吻をなす、人前で失敬千萬なり

十月四日 晴天、十時宿を出て、トラファルガル、スクエヤーの「ナショナル・ガレリ」(繪畫展覽場)を觀る、巴里のルーブルとに比せば御話にならぬ小規模なれども、流石は能くも古今の名畫を蒐めたるものなり、曰英派、曰伊派、曰佛派、曰西派、曰獨派、曰和蘭派、曰フレミッシュ、曰タスカン、曰アンブリアン、曰ベネシヤン、曰プレスシヤン、曰パソニアン、曰パリスチス、曰ロンバート、曰バルマ、斯道の流派殆んど漏らすなく、實に千六百五十幅を觀覽に供せり、彼の樂逸にして氣魄奔放の概あるターナー翁の傑作を築めたる一室は最も余の注目を惹けり

リセント、ストリートの「インペリアルレストラン」にて中食し「ブリアツシユ、ミューツ

ヤム」英國博物館を觀る、此博物館を視れば、英國の偉大は即ち之を知るとを得べし、凡てが云ひ知らず大仕掛にて、博物館と圖書館の二つより成り、博物館の完備せる更らに驚くべし、例の太陽の沒せざる已れが領地より、錢に飽かして取寄せたる實物なれば、凡てが眼覺むる心持す、木乃伊が百以上も陳列せられ居ると云はゞ、見ぬ人も太抵其大さは推測せらるべし

圖書館の方は、圓筒形をなし、其周圍壁は即ち本棚となれり、此圓形室の直徑百四十呎にして、高さ百〇六呎なり、場内壁に五百人の讀者を容るべし、現今書籍の數は二百萬部にして、年々五万部づゝを増加すと云ふ、之を一筋に並列せば四十哩の長に連なるとは、何んと驚くべきにあらずや、拙譯「米國の棉業」が目錄に載つて居たから、借りて見たが、我兒に逢ふの心持がした

日も段々暮れかんとするにぞ、日本食の晩飯を喰ふべく、日本人俱樂部に走せた、丁度梅田氏と落合ひ、食後「ヒポドローム」を見るべく出立つた、下題は「西比利亞」と云ふので、其筋書は或二人の露國軍人が、一美人を競争し、美人は年少軍人の方を好むことを、長老軍人探知し、故らに冤罪を構へ、年少軍人を西比利亞に逐ふ、斯くて西比利亞にて如何に罪人が辛苦艱難をするか、如何に露吏が罪人を虐待するかを見せしむ、彼等は豚

群の如く、乗馬吏の鞭によりて驅らるゝあり、互寒の爲め彼等の四肢は凍り、唯だコロ
／＼と半の如くに倒るゝあり、而かも此苦界より遁れんとするものは直ちに銃殺せ
らる、憐れにも夫の年少軍人は此豚群の一員とあり居るなり、話し變て、美人は已が戀
ひ慕へる人が、西比利亞に在りと聞き、態々西比利亞に來り、ゆくりかく面會するを得、
相伴ひ馬車にて落行かんとす、追手發砲しつゝ之に追跡し、竟に大池の頭に來る、馬車
は踊り込む、騎馬も亦飛込むと云ふ大立廻はりなり、是れは又絶跡的の寫真劇にして、
我國の壯士芝居其儘なり

歸路、檜田の女友に逢ひ、相携へて日耳曼料理屋に行き、日耳曼「ビール」を飲み、余獨り
歸る、十二時半就床す

十月五日 曇天、十時食事中、李坡浦より船長中村重謙氏、李坡浦船主、ウィリヤム
シヨンストーン「商會手船の二等運轉士」來る、氏は潜航艇の如き一氣船を、十五万圓位
にて日本に賣捌くべく、主人の命を承けて來倫せるあり、余は三井の小室氏に此人を
紹介せり、歸路、正金銀行にて五百圓を受取り、殘金は巡回信用狀に切替へたり、三時、長
野と云ふ文部省留學生來訪、英文學研究論を聞く

十月六日 朝より日本晴也

孟買の彼阿社より紹介狀を貰ひ居たるとして、リールデンホール街の彼阿本社を訪
ふ、先づ社長サツランド卿と會し、次に總支配人と談す

十月七日 朝雨、夕晴、ノツキリ寒冷を覺ゆ、終日印度メール、日本メールを書き、夜
十一時出で、倫敦「ヘニーパー」の巨壁たるデイリー「テレグラフ」新聞社を見る、倫敦
の「フリー・ストリート」は、實に新聞の淵藪にして、一部三片の「タイムス」より此「ヘニー
パー」に至る迄無慮五百七十種の新聞は、大抵此街區又は近邊にて發行せらるゝな
り、「タイムス」は組織も主義も獨立にして、世界の新聞王たるは言ふ迄もなく、「デイリー
テレグラフ」は保守改進の趣味を帶び、ベンチット「パーレー」氏の如き、有力なる軍事通
信員を有するを以て有名あり、文体の如きも「マコーレー」的にして、莊重華麗を極む、「デ
リーニユース」は自由派ある半片紙にして、發行部數最多く、恰も我萬朝報と相似たり、
「スタンダード」は保守黨機關にして、有名ある家庭新聞あり、「モーニングポスト」は即ち
貴族の機關なり

夕刊新聞の著名なるものは「ペルメルガセット」「イーブンングスタンダード」「グロ
ーブ」等にして、就中「グロウ」は、夕刊紙の最古に屬し、桃色紙を用ひ、紀事簡潔要領を得
たるを以て、公衆の愛讀する處たり、言はゞ夕刊の萬朝報なり

最も余の注目を惹きたる事實は、一新聞にして毎日七八版乃至十五版迄摺り出すにあり、少し異聞珍事ある毎に版を重ねるものと知るべし。

兎に角、巴里や此倫敦で、人が新聞を讀むとの旺あるには驚くなり、猫も杓子も新聞を讀まざるなきあり。

借ても我輩が見た此「デーリー・テレグラフ」此は、其主義に於ても、其組織に於ても、將た其機關に於ても、最も「アップ・トゥ・デート」最新式なるを自慢する程ありて、立派なるものあり、蒸氣機關でも「ダイナモ」でも、印刷機でも、何一つとして一通り餘分を有せざるはなし、不時の用意到れりと謂ふべし、ナツター君と云ふ記者に面會したるが、氏は嘗て東京にあり、大隈伯などは悪意ありと、時恰かも軍事費に付き大隈伯が無遠慮ある演説をなし、之がため倫敦市場に風波を起したる際とて、明日の紙上には大隈伯の事を書くんぞと言ひ居れり、午前三時半頃歸宿す。

十月八日 少雨、十二時領事館に行き、檜田氏とある青樓に會し、三時半正金銀行の五十嵐氏とイスリントンの農業館を見る、歸路ハイゲート街なる捨田の下宿にて御馳走を受く、此三人は皆孟買に三年以上住したるものあれば、夫れから夫れへと話柄は絶ゆることなし、余等は此會合を名けて「孟買ダックス」評議會と云ふ、但し「ダックス」と云ふも、色男を意味せず。

十月九日 日本晴、夜來少雨

エルデンアベニューなる野澤商店支配人林君を訪ふ、「ボーカー」を遊び、夜十二時頃歸る。

十月十日 英國的「マイルドウエザー」溫暖なり

ピクトリヤ停車場より、往復切符(三志六片)にて、有名なる水晶宮「クリスタルパレス」を見る、行く途々頗る詩的なり。

抑も此「デナム」の水晶宮は、サー・セオファックスの設計に成るものにして、玻璃及鐵材のみを用ひ、重に千八百五十一年の大勲業博覽會の材料を使用せり、間口六百〇八呎、大中央堂及翼堂より成る、奥行は百二十呎、高さ百七十五呎あり、外に少し離れたる兩側方面に於て二百八十二呎の高塔、天空に聳ゆ、此全工費一千五百万圓ありと云ふ、水晶宮の周圍は、開雅清曠なる園地にして、「クリケット」場あり、噴水あり、湖水あり、林地あり、草地あり、大理石の彫像亦排列せらる、唯水晶宮内の見世物、料理屋、俗樂等、淺草奥山の「ドンチャン」は此仙境を俗化せるを憾む。

○

杉田 定一

千秋風俗集双瞳。草木未春春色融。日暮滿堂傳電氣。天邊湧出水晶宮。

夕景歸宿食後檢田住谷太田等の諸君と盛に快談し、就床したるは十一時半なりき

十月十一日 非常の十一月霧にて、白晝街燈を點す、

南ハムステッドなる文部省留學生田崎慎治氏を訪ふ、頗る款待せられ、剩へ有益なる海運保險談氏の専門を聞くを得たり、夕景田崎氏は、余等を日本人俱樂部に案内せらる、例により美味ある日本食後、玉突をなし十一時歸宿す

十月十二日 日本晴、バグントン停車場より發車し、愛らしき田舎道を縫ひてオ

ックスホールドに抵る、流石は學術の淵藪丈けありて、市街迄が學者風を帯ひ居れり、寺町に寺か並ぶ如くに、オックスホールドは到る處「コレツシ」で鼻をつきろうあり、曰「ゴルフスソリスチ」曰「ケゴル」曰「ニユー」曰「セントスグダレン」曰「ユニバシチー」曰「オールソールス」曰「リンコロン」曰「エキセター」曰「ジューサス」曰「トリニチ」曰「パリナル」曰「ウオースター」曰「セントゼヨーンズ」曰「クライストチャーチ」數へ來ればれゆびも損ねぬべし、余は「ユニバシチースクール」と云ふ學士試験場、及「クライストチャーチ、コレツシ」とて、グラットストーン等の卒業したる當地最大の「コレイジ」を見たり、現英王エドワード七世の寢室、翁の舍室等、其儘に存す、學生の食堂は黒光りに光れる「イングリツシユ、オー

ク製の食卓に、教師生徒の席次を正し、周圍の壁上には、本校の卒業生たる英傑の油繪肖像を掛けつらね、歴史的趣味津々たり、英雄崇拜熱蓬勃として湧く、實に牛津は人格を作る處なるべし

十月十三日 日本晴、烟臺附近に露軍の逆襲を撃退し、又々日本軍大勝利の快報

を傳ふ、快哉を叫びつゝ、キャンノン街に「ジョンエリチャット」商會を訪ふ、孟買の「カリンポイエアラヒム」商會の紹介なり、マンチエスター、オルダム、アクリントン等への紹介狀八通を得、歸路領事館に立寄り、檢田氏を誘ひ、戦勝祝として「セントセームス」劇場を観る、下題は「ガーデン、チア、ライス」虚言の團と云ふ、佛蘭西劇の翻案なり、或高貴の令嬢、其婿とあるべき人を、他の悪女に奪はれ、病氣を發し、狂人となる、後に全快したるも、前郎君の面影を考へ出す能はず、茲に二悪漢あり、此事實を聞知し、共謀して一美男を換玉とあし、右令嬢の家に遣はし、恰も前非を悔ひたるが如く、裝はしむ、令嬢庭前に來り、此男を見出し、我戀人と思ひ、直ちに割き中とある、然るに偶然にも真正の男歸り來り、兩人の此關係を見、大に憤怒す、論諍の結果は、遂に決闘とあり、真正の男見事取を取る、是に於て美人は彌々偽男のものとなる、併し元來此偽男は良心を喪はず、俠氣あるものなれば、自分が錢の爲めに、神聖なる戀を汚せるを耻ぢ、二悪漢には彼等より貰ひ

居たる金札を擲付け置き、本男に向ては女を渡すべきを約し、相共に美人の許に行き
白状す、美人の喫驚一方ならず、僞男の無禮を怒る甚し、然れども妾の戀は凡て汝に獻
けたり、妾は渾身汝を愛するなり、妾は如何にするも此戀を眞正の男に移す能はず云
々、苦惱の堪難々の情觀るものをして頭をくまらしむ、遂に肉体のみを任かすとし
て本男を入れ、僞男は即ち家來となる、間もなく大戦争起り、婿がねは王家に謁すべく
出陣し、僞男はるの從卒とありて亦た之に赴く、非常なる苦戰の後、おいたはしや婿君
は天晴の戰死を遂げ玉ふ、死際に一封の書狀を僕に托し、妻君に致さしむ、妻君之を披
くに此僕即ち以前の男と夫婦になれ、然らざれば佛とあらずと云ふ主旨なり、よりて
茲に目出度夫婦になると云ふ筋なり

十月十四日 金曜此日は倫敦で稀な日本晴なりしが故に、有名なる「ウインザー」城
及「イートン」校を見るべく出發せり、倫敦より二十一哩の西方に在り

城は小高き山上に在り、テムス河其西北を繞る、此間三百年四百年と云ふ古喬木
亭々として相依るを見る、樹間は悉く青甕を敷けるが如き芝生なり、クインピクトリ
ヤは夏日此喬木林の蔭、此青芝の上に、印度人の侍講を延き、印度語を習ひ玉ふを常と
せりとかや、此邊一帶を稱してホームパークと呼ぶ、現王エドワード七世は川の向ひ

なる「イートン」校の學生をして「クリケット」或は「フットボール」に使用せしむること屢
々なりと云ふ、城の西南は、所謂城下町を形成し、城の東南方には、女王の母君ある、メッ
チエスナブケント、及皇婚アルバートの墓所あり、今は女王自身も此處に葬らる、女王
は痛く此「ウインザー」城を愛し玉ひ、一年中六ヶ月は此處に住はれ、毎朝馬車に召し、母
君と貝人の墓所を詣で、後其西南に位する「フログモア」にある、故母君の住宅に往き、朝
飯を召されたりと云ふ、城の南方は、千八百哩の「グリーンパーク」(公園)あり、數千の鹿を
放てり、城の南門たる「ジョージ」四世門より、四五間位の廣さなる一直線の途が、緑の芝
生を貫通すること三哩、雪山上「ジョージ」三世乗馬の銅像に至りて窮まる、試に城の南
門に立ち、雪山の銅像を眺むれば、繪を見るが如き感あり

「ウインザー」城内にて見るべきは「アルバートチャペル」王宮(ステートアツパートメ
ント)「ラウンドタワー」(丸塔)或は天守閣、御厩等なり、宮殿の立派なるを説くは、蛇足なる
べければ略す

次に余は「イートン」校を見たり、「イートン」校と「ハーロー」校は、英國にて歴史的の學校
なり、牛津を見て、「イートン」を見ざるは櫻を見て梅を見ざるの憾あり、本校は千四百四
十年「ヘンリー」六世の創立に係り、學生は短き「ジャケット」に廣き襟飾、絹帽と云ふ裝束で、

頗る貴族的なり、教場講堂等を見るに、凡てが古色蒼然たり、机の高さ二尺に足らず、腰掛けなどは五寸位の高さのものあり、英國樞製なるが、皆「ナイフ」で樂彫か施されてある、教師の居る一段高き處には、小供をしばく鞭が挿し立てとある、蠟燭臺もある、宛然寺小屋的だ、これが英國風で、英人は非常に自慢あり、講堂は四方の壁を、英國樞で張り詰めたるが、其上には毎年の卒業生の姓名が順次に刻付けられ、正に滿壁を蔽ふ、グライストンあり、サリスベリーあり、バルホワあり、ローズベリーあり、グライプあり、れば、カルゾンもあり、詩人のセリーサーへ自ら其名を刻して得意あり

一昨年カルゾンが印度より一時歸省したる時の如き、身は非常なる繁忙を極めたるに拘はらず、一夕此講堂に來りて、故舊に一場の演説をなすことを禁する能はざりしなり

八時頃歸宿す、夕飯後、檜田君と「ゲイチー」劇場を観る、之れは又奇劇の甚だしきものにして二回も見ようものなら、お隣は屋根替へ致すべし、桑原々々、呵々

鶴山

雲巽花顔氷雪肌。翩々舞影亂如糸。三千佳麗君休羨。龍動橋邊多乞見。

十月十五日 雨天、朝十一時半、高田商會に行き、マンチエスター、ナルダム、アクリントン等への紹介狀を貰ふ、晝飯後、玉突をかき、檜田を負かす、夕飯後、大散歩を爲し、ハイドパークに大道演説を聞く

杉田翁

萬衆如蟻成隊來。幾場演説一時催。弊衣破帽君休侮。從古多爲改革媒。

十月十六日 晴天、五十嵐、小牧両君訪問せらる、共に晝食し、三時半、アルパートホールへ行き、日曜音樂を聞く、次にブラーク公園を散歩し、日本人俱樂部に往き、饅飯を食ひ、玉突をなし、歸宿したるは十二時半なり

十月十七日 雨天、三井に往き、長々待たされ、三通の紹介狀を得、日郵に往き、永井君と共に晝食を喫す、吉井君と海運上の議論を上下し、高田商會、エリチット「商會等に立寄りたる後、海軍中機關士種ヶ島氏と玉突をなす、互角の勝敗なり

明日はマンチエスター行を決行すべし

十月十八日 晴天、倫敦も早や少しく鼻につく様になりたるに付、且つは商賣柄と云ふ一種の義務もあれば、日軍大勝利、露軍を進撃中なる快報に接せる翌日なる此吉日を卜し、マンチエスター市に到る、倫敦のユーストン停車場を午前十時三十五分に發し、マ市へは午後二時十五分に着きたり、途中は、同乗マ市キャスルトンの「アルビ

ナン紡績持主なるエー、ケー、コツカー氏と快談し、時の移るを知らず、氏は蘇格蘭人に
して快男子なり、其名コツカーは奮闘兒を意味するものありと云ふより説き起して
曰く、英蘭人は政治家なり、外交家なり、蘇格蘭人は創造者なり、支配人なり、愛蘭人は軍
人なり、労働者なり、今日英國が偉大なる所以は、此三者が相提携し共働すればあり云
々、彼の宗教觀に曰く、余は名義上耶蘇教徒なり、然れども膠柱的耶蘇教を信せず云々、
要するに向上主義あり、黒岩涙香的あり、彼又英人の特質として誇て曰く、英人は獨立
なり、英人は如何ある場合に於ても、絶對服従なるものを認めず云々、最後に彼は彼自
身が「セルフメイド」自作の人たるを誇り、此城手に唾して扱くべしてふ概を示せり、倫
敦では既に餘りに階級的にて六ヶ敷もマンチエスターは今猶一躍高位に上り得る
機會多し云々、彼は自家製織の反物を、倫敦市場に賣りて歸り路にゐるものあるが、絶
えず笑を漏し居たるより見れば、大に儲かりしものと見ゆ

マ市着、先づ「クインズホテル」に宿を定め、案内記片手に主たる町筋を散歩す

十月十九日 晴天、正午「マンチエスター」ガ「デアン」社に、拙譯米國棉業原著者ヤ
ング氏を訪ふ、三十五六才の背高き好男子なり、瘠せざるの寡言にして神經家らしき、
何とはなしに操觚者の風あり、彼は余の來訪に對し非常に歡喜の表情をなせり、彼の

米國棉業は佛蘭西語及西班牙語に反譯せられたるが、先日西人は氏を來訪せり、此西
人は工業學校々長にて、其譯書は彼國の文部省及諸官省に贈り、甚だ好評なりと云へ
りと、併し英語は君の様に旨くは話せなかつた「ヤング氏仲々上手ものあり

「カーデヤン」新聞の市況欄受持記者モンクスハウス氏に引合せられ、三人にてキン
グ街ある「レホーム」俱樂部に會食す

食後、玉突場の片隅で喫煙せる一組の紳士に紹介せらる、曰くトムソン、曰くドリ
曰くジャックソン、曰くマツキントツシユ等八九人あり、余は喫煙せざれば、彼等の問
を幸ひに、日本人の爲めに大氣烟を吐き、彼等は大口を開きて驚きぬ、ヤング氏は、頑弟
が法螺を吹きて、人を困らしてゐるソナ位ひの態度にて、頗る得意なり、此俱樂部は
徹頭徹尾自由貿易主義なるが、此日此處にて、何等か主要なる相談會ある由にて、ヤ
ング氏は夫れに出席するととなり、余はモンクスハウス氏の案内にて取引所を見たり
唯、見る一大堂内數千の人は、蟻の如くに集りて喧騒せり、棉屋あり、糸屋あり、紡績屋あ
り、機械屋あり、石炭屋あり、何十萬圓の商賣をなすにも、口頭にて爲し、少しも間違さし
と云ふ、取引所の事務所は、各地よりの報告新聞等を掲示し、建物の保存をなす位にて、
取引を登記し或は干渉すると少しもなく、極めて自由放任なりと云ふ、會員とならん

と欲せば、一年四半期に四磅を出金せば宜敷しき由にて、日本の如く煩雜なる規則なし歸路、ヤング氏の勧めにより、十月十四日の出版なる「ランカシャ棉業」を買求め、一旦歸宿し、四時頃更らにポートランド街なる「ジョーヂ、フレーザー」父子商會を訪ふ、三井物産の紹介によるなり、社長は不在なりしが、二人の白鼠然たる番頭出で來り、大に歡迎の意を表したり

二十四年間三井物産と取引せるが、未だ一度も紛議なるもの起りしとなく、双方共に満足せりと、冒頭を置き、日本人として貴殿が此市の紡績を見に行けば、殺害せらるゝやも知れず、其理由は日本人は巧慧にして、或は機械の寸法を取り、或は秘密製法を看取し、直ちに得意の倣擬をなし、英國製に競争するを以て、英國の商賣を滅却すればなり、現に日本との商賣は、年々減退し又昔日の盛觀なし云々と、椰榆一番し、次に戦争談に移り、日本人が驚くべき人種あるを嘆賞し、一轉して曰く、併し必ず紡績工場を御覽に供すべし、乍去吾等は所謂奴隸なれば、明朝且那樣來店の上確定して、御宿迄萬事御知らせ申すべし、工場へは當社の者を御伴せしめ、御案内致さすべし云々、余が殺されぬ爲めの保護人ですかと戯れたる所否々、貴殿を見奉るに、容貌魁偉英語も自由に話し玉へば、先方に行き、余は「スミス」なりと名乗り玉へ、必ず先方は日本人ならずと

思ふべし、即ち殺さるゝ心配は御無用なり云々、彼等の一人曰く、失禮ながら貴殿は四十格恰と見奉る如何と、他の一人は曰く、左様御年は召されまい、三十六七とは是れ如何ん、余は二十七歳なりと言ひたるに、彼等は呆然として驚きたり、御年僅かに二十七歳にして、既に印度に三年を過させ玉ひ、随行員もなく、單身歐米を遍歴して、智識を廣め玉ふ、余等は馬齡五十有八を重ね乍ら、未だ百哩以上の外に旅したるとも、貴殿は實に四十歳の英人に勝るとも劣るとなし、日本人の四十格恰の人は如何にエテからん、穴賢々々、彼等は舊式的英商人の標本あり

十月二十日 曇天、朝十時マンチエスタ―商業會議所に書記長を訪ふ、ヤング氏の紹介立派ある歴史を有して、有名なる會議所なれども、凡てが自由貿易主義ある當市のとどて、事務上珍らしきとなし

次に「バルマル街の「パーシユタム、ピシユラム」商會、孟買合名社の紹介によるに、支配人チャーチヒル君を訪ふ、君は有名なる英國政治家チャーチルの玄孫にして、商賣人なれども、政治家の血液、脈管に踊れるものと見ゆ、雄辯家にて盛なる日本最負なり、滔々として日露戦争を論じ、又巧に兩軍の戦術を批評せり、正に是れ好箇の快男兒にて新式英商人の標本なり

次に「カーデアン」社にヤング氏を訪ふ。談は自然に棉花直輸入のことに移る。氏曰く「本市は有名なる運河により、且李浦へ荷揚するとなくして米棉を直輸入するの便宜を有す。然るに棉花「ブローカー」の協會は李波浦にありて、可成李浦を通過せしめんと努め、或有力ある李浦の棉商人は、當地紡績に貸金をなし、その代り李浦より原棉を買はしむることにせり云々。ヤング氏は又明日の新聞に出す積りありとて、日郵對紡績聯合會の契約に關する歴史を記し、「本市紡績は宜しく日本紡績に倣はさるべからず」と論せる原稿を見せ、異論なきやと問へり、唐突の際、余は讀過一番異論なしと答ふ。明日の新聞に出るとならんが、彼阿社の惡感情を買はざるやと聊か心配せり。すべて新聞記者には物言はぬに限るぞかし。

十二時半頃英國紡績聯合會總裁として芳名噴々たるシー、ダブリュー、マツカラ氏を「ヘンリー・パンナマン」商會に訪ふ。頗るパンナマン卿に似たる人で、六十格恰なり、快辯を揮ふ流るゝ如し、併し「オフコース、ユー、ノー」の句多し、多辯の方なりとはヤング氏に聞居たるが、如何にも銜る方あり、とはいへ随分面白き漢子なり。余は實に此先生より御自作の第一回萬國紡績聯合會大會報告(特製)及棉業と題する小冊子等を貰ふの光榮を擔へり。先生曰く此第一回をツリーリッチにて開會したるは、セラシー(嫉妬を防

がんとしてあり、次は英國の廻番なり、此頃米國より萬國紡績業者の南部棉作視察の勸誘われども、英國は躊躇せり、大英國産棉獎勵協會と相容れさればなり、併し余は棉業に對し「ブロードベニュー」世界主義を抱持せり、他國棉業が發達せば、何處迄も發達せしめよ、英國棉業亦共に、より多く發達すべきなり、最後に余は日本及孟買紡績等が、我萬國紡績聯合會に加盟せんとを切望す。云々、二時半「フレージャー」商會の紹介にて、「リッチャードハウオース」紡績を覽る。最初に蒸籠機關等原動力諸室を見、順次「ペールプレート」カー、チプナー「ラチス」の作用にて混棉室に下り來る様なれり。「スカッチャー」「カーデング」「ドロージング」「スラツペンク」「インターメチエート」「ローベング」「スピニンク」「リング」及「ミュール」の二種あり等の諸部室を見、織物部に至りて、梭製造所上系取り機械の運轉「ドロージング」部室にて、「フローワー」及「リッチャーイン」を見、猶「ワーベック」機「フツチング」機「米國製にて代價五磅也」サイジング機機械場等を見たり、原動力室を除けば、他は大抵妙齡の女子之に當り、英人多く、皆奇麗に裝束せり、附屬消防機、及消防夫道具置場等をも見たるが、之を要するに全工場は整然として、心持善く奇麗なり、流石は「マンチエスター」紡績なる哉と感心せり、併し日本人を恐れ厭ふと甚しく、余は紡績には少しも關係なきことを証言して、當工場の見聞を許されたるなり、以下數字

を列挙せん

錘 數	一三〇、〇〇〇	紡 工	三、〇〇〇人
織機 臺	三、〇〇〇	織 工	七五〇人
蒸氣機關	四、七〇〇馬力		

紡織兩部及原動力室の總賃銀、一週貳萬圓にして、織工は一週平均二十五志、紡工は十五志位の割合なりと云ふ

本工場は、一週五百封度入三百五十俵の原棉を消費し、重に米棉にして、少量の埃及棉を川以四十手以下を紡ぐ、一週の石炭消費額は三百五十噸あり

工場の敷地は十三噓にして、場内の電氣燈は五千個なり

本工場にて一週間に織出する反物を纏き合せば、四百五十哩の長さに達すべしと今日迄に製織したる縞柄とて示されたるを見るに、實に立派にして申分なし、製品の種類は、白地「カーキ」「帆布」「トウイル」「ドーチー」「綿チル」等なり

十月二十一日 朝十時例のフレサー商會の紹介を以て「ヘル、エンド、ホエーガー」染場を覽る、鐵製の四角箱に染料を溶かし置き、繩を棒に掛けて染める工合は、日本の紺屋のやり方と少しも異ならず、漂白所にて、大釜で漂し粉を煮出し、此内に糸を入れて

沸々煮き込み、清水にて洗滌すると例の如し、當工場にては「ペンコール」藍の外に、多量の人造藍を川以、價格に於て甚た廉なるも、染上に於ては少しも劣らずと云ふ、次に漂粉調合所を見る、大角箱の上に梯子にて登り見るに、中には濃厚なる「アルコール」液あり、次に遠心力乾燥機、乾燥熱室等を見つゝ、總場に至り、最後に艶出し機を見たり、此工場は名の示すが如く、獨逸人の所有にして、職工三百七十人を有し、工場の面積は一萬平方「ヤード」、建物は赤煉瓦の平建なり、勿論二階三階の建物もあれども、染場は皆な平建なり

十二時半カーデアン社にモンクスハウス氏を訪ひ、氏の案内にて、市役所裏の「フレースノース」俱樂部に晝食す、話頭各般に亘りたるが、要領を摘まめば、例の英國産棉獎勵協會は、三週間前「ローヤルチャーター」特許を受けたり、其組織は株式にて、茲數年間は無配當なるべきも、追々は、有利なる事業あることを第一として、此頃「マンチエスター」が印度特に支那方面に多大の商賣をなし、或會社へ來年十二月迄の先約をなせりと云ふが如き盛況を現はせるは、全く日本が戦争の爲め支那に輸出せざるの致す處なり云々、余は之を駁して曰へり、日本が支那に輸出するは、英國品と全く別物あり、又印度特に孟買に需要多きは、近頃待ちに待ちたる膏雨を得、本年も豊作あるを確めたる

より、頗る需要の起りしもののみと、先生大に謝せり、開けば氏の妻君は昨日觀覽せし
ハウオース紡績主の姪なりと、由て惟ふに氏は投機にて産を失ひ、差當り新聞屋とな
りて飯を食ふものにあらざるか、非耶、食後、社交室に至る、圖らず横濱の「コーンス」商會
員にて日本に二十年も在住せりと云ふ、英人アーサー・ジョー・モルレー・ウィール氏
に會す、盛に日本語を話せり、アナタ日本語ナカク、旨いと言へば、アナタ夫れオベ
ンチヤラありますと言ふ、他に三十五年以前、日本にありしと云ふ、老人に會せり、ワタシ
天秤棒で固めた肩が未だ堅いですと云ふ、マンチエスターの中心で、名譽ある日本語
を川ひ、百人余の英人を驚かしたるは、近頃の痛快ありし

歸路「マーケットデー」なるを以て、取引所を見る、其盛況驚くに絶へたり、「カーデヤン」
社にヤングを訪ひ、寫眞取るとを約し、バルマル街にホルデン氏を訪ふ、不在なりき、

十月二十二日 日本尙の好天氣、當市にては初めてなり、但し少し寒冷を覺へぬ、
「ピシエラム」商會に、チャール氏を訪ふ、氏は當市に生れ、二十五年間此の業、棉布機
械類を扱ふに従事し、大に經驗を有するに加へ、有力なる會社の重役を知るを以て、他
店よりは一層得意先に満足を與ふるとを得るなりと、例の吹聴をなしつゝ、器械の話
しに轉し、此頃發見したる「エコノミカル・ボイラー」に付て曰く、此は普通の「ランカシヤ、

ボイラー」の半分の長にて、「エコノマイザー」を要せず、「ボイラー」の尻の方に白熱室を作
り、普通の煙は此室に入るや、火とかりて、「ボイラー」の中の管「エコノマイザー」代用を通
り、煙突に出づ、如此あれば、「エコノマイザー」の必要もなければ、煙「スモーク」もなきに至
ると、又氏に聞くに、此頃「エンジン」に「フリクシオン」を減却したるものを發見したる由、
此等は証明書を付して呉れることになれり

一時半、魏々として半天に聳ゆる「ミッドランドホテル」に晝食す、チャール氏の案
内あり、此「ホテル」は恐らく英國第一の大「ホテル」なるべし、中陸鐵道會社が、マンチエス
ター驛「ターミナス」に建設したるものにして、建築費壹千貳百五拾萬圓、道具を加算す
れば貳千萬圓なりと云ふ、序に昨年の純利益は貳拾五萬圓なりしと聞けり、此鐵道會
社は、非常に進歩的で、我山陽の如く、凡てに於て他社に魁するなり、余は當市に來りて、
種々觀察したるに、倫敦よりは遙に進歩的なり、企業的あり、米國的あり、是れ蓋し米國
との交通盛なると、陸運の中心なるが故ならん

食堂に入り、樂隊の奏樂を聞きつゝ、食ひ且つ語る、誠に極樂なり、食膳の美酒佳肴は
申す迄もなく、御腹の痛まぬ御馳走は又格別の味あるものあり、「ホットハウス」の如く
屋根を硝子で張れる花園に出で、園遊會の如く美人か商へる小店の間に座を占め、煙

草を吹かし珈琲を飲む、其快益し王侯と雖ども及ばざるものあり、余は庭前に咲き亂れたる日本の菊を指し、之を縁として、日本風俗、日本軍隊等の講話をなす、場内の「アリカンバー」に至り名酒「コックテール」を試み、「パンクエットルーム」を見る、此は「デナー」の時「ターブルドート」を食ふ處なり、買切の「テーブル」上にはいづれも椅子を載せてあり、椅子を凭せ掛けるは兼てより知りつれども、之は初めてなり、此室の佛蘭西「ハットラー」を案内とし、「ホテル」内なる「ミンドラントホテルシエター」芝居を見る、九百名乃至千名を容るゝに足り、切符賣出場、喫煙室、酒場、珈琲室等を備ふ、旅人の部室の前には、重き「バルコニー」あり、長椅子に横臥しながら、庭前にて吹奏する音楽を聞くことを得、しかも珈琲を飲みつゝ、次に舞踏室「プレイヘートルーム」「レデース、ライチングルーム」兼應接室等を見たるが、腰掛窓掛等皆絹布を用ひ、各室に必ず時計あり、電氣にて回轉す、蠟燭に擬せたる電燈、赤青の絹傘着せたる電氣「ランプ」等あり、廊下には「チューブ」管の作用により、金を送り、受取り又釣銭を取上ぐる機械あり、到る處「ラポラトリー」便所のあり、「リフト」あり、「バー」あり、本屋あり、散髪屋あり、「ドレッシングルーム」あり、土耳其湯あり、佛國食堂あり、獨逸料理店あり、玉突場あり、此宿に泊れば、何物として、坐なから求められざるはなし、建築に大理石を馬鹿に使用せるは注目すべきなり

七時半、オックスフォード街に「パレーシエター」寄芝居を観る、見物人の音楽に熱心なる、成程當市には獨逸人多きより感化せられたるものと點頭かる、別嬪舞臺に歌へば、見物人之に和す、ハリローダーと云ふ、大鼻の圓遊に似たるものあり、「スコッチ」に似せ色々のとをあし、非常の喝采を博せり

十月二十三日 此日は日曜なるが、天氣は御談の麗らかなる、如何にも安息日的なり、兼ての約束に従ひ、十二時ヤング氏をその私宅に訪ふ、チータムヒルと云ふ、閑雅ある地あり、ヤング氏曰く、外人は、マ市の雜沓を見て、マ市人はよくあんな處に住むものよと云ふが、大なる間違なり、市街は吾等の仕事場あり、吾等の住所は此處なりと、成程閑靜にして、休息するに適當かり、市人は今や教會よりの家路に群を爲し、羊の子の如く温和ある顔付をなし、清麗に結束して歩を移し去る、英國の日曜日は慥かに見物なり、冠木門を入れれば、十五歩にして玄關に達す、赤煉瓦造の好個理想家庭的の建築あり、前庭には灌木草花等の植込あり、英人が我家を城と頼むは、實にこゝなんめりと思はれたり

ヤング氏は余の楚音を聞き、窓掛を掲げ、硝子越しに、莞然余に目禮せらる、即ち「ノック」する必要もなく、氏に迎へられて入る、ヤング夫人に引合はさる、コケ茶の禮服を着

け、顔色は青白く、神経質らしけれども、日本的美人と見奉れり、拙譯の説明、日本のどの字が英語のどの字に當るかを、宜敷説明あつて「デナー」日曜なればを食ふ、食卓上には大菊花二輪の活けられたるを見る、夫人が特に余の爲めに活けられたる由、余大に彼女が厚意を謝せり、「スープ」及英國料理に不可缺「ロースビーフ」等は、ヤング氏が分配し呉れたるも、獨り「フゾング」に至りては、夫人の分配に俟てり、食事の時日本人は遠慮するを禮式と心得居ると云ふ話が出て、余の爺が若き頃婚禮に招かれ酒を勧められたるとき、例により遠慮をしたりしに、主人は西洋人風の人なりしと見へ、此若者は酒を好まぬものなりとし、以後少しも勧めざるのみならず、他人の盃を指すものあるときは、傍らより此御方は御飲みにならんのですと云ふ工合、其實爺は非常の酒飲なりしなり、此事に懲りて、平生余に戒めて曰く、遠慮はするものにわらず云々、と云ふ話をなしたる處、夫婦共吹き出し、抱腹絶倒したり、是れからヤング氏は余がモイいらぬと言ふのに無理に少しやり玉へと強ひらる、こゝ先生日本通を氣取れるなり、食事畢るや、夫人起て別室に入る、是れ余等男子をして自由に喫烟快談せしめんとしてなり、二階の書齋に至る、澤山の書齋室に滿てり、二人の玉の様を令嬢登り來り、緑の眼、林檎の様な頬べたしたる姉さんは、頻りに喋べる、ヤング氏が喫烟せるを見て、私烟草をく

ゆらすの大嫌よと云ふ、阿父曰く、そんなら下へいらつしやい！或は膝に上り、頬べたに吸ひ付くまで、仲々活潑なり、ヤング夫人亦來る、大きに御邪魔でしようと言へば、ヤング曰く、どうして却て余等を楽しませしめたり、夫婦間に禮讓教さ、毎度もあがら感服の外なし、散歩せずやとのと、余は即諾す、例の如く一匹の犬氏の口笛に應じて、何處よりともなく飛來る、即ち歩み即ち語る、此日天氣晴朗、滿身暖日を浴び、清涼の大氣を吸ふ、其快言ふ許りなし、遂にヤング夫人の榮或捺染會社の支配人にして、父は捺染同業聯合會の頭取ありを誘ひ、三人にて公園を散歩す、日本人は何故彼が如く勇敢なるや、東郷の報告に、陛下の御盛徳によるもの也等の語あるは、文面上の形式なるや、或は實際を思ふものなるや、支那は日本の様に文化するや等、あらゆる難問を發して余を困らしたり、かくの如きと一時半余にして歸宅、夫人共四人で、又四方山話が出た、夫人は茶を侷めらる、余は日本茶を飲む禮式などを聞かし、陶磁器の話しに轉す、ヤング氏は骨董癖のある人と見ゆ、種々の物を蒐集し居れり、山の如くに支那製、朝鮮製、印度製、日本製等のものを余の前に積み上げ、鑑定せよと註文せらる、余は有る丈けの智慧を搾り、盛に批評を試みたるどころ、先生方感服斜ならず、余は愛ぞ切上げ時と見計らひたるに付き、マルウエーなるホルデン氏と約束あればと申立て、ヤング家を辭したり

「キャブ」を驅りウイクトリア停車場より、ダルウエンに至る、スプリングエールと云ふ一ツ前の驛で、態々出迎へられたる「フロックコート」及絹帽のホルデン氏に會ふ氏は非常に快活ある人にて、四十五六才と見受けたり、全くの英商人肌で、竹を割りたる様な人なり、ダルウエン驛に達するや「ブローガム」に乗り、直ちに氏の邸に到る、大きな地面に純粹英國風の建物立てり、余は蝙蝠傘を舍き外套を脱し、玄關に上る、ホルデン氏更めて余に握手を求め「ユー、アール、ウェルカム」よくこそと云ふ、何でもさき挨拶あれども、英人の禮讓に敦きを知るべし、大廣間を對角線の方向に横きり、家族的客室に入れば、ホルデン夫人余に手を與へつゝ、貴殿に面晤するを得るは妾の名譽とするところなりと云ふ、鐵縁の鼻眼鏡を懸け、地蔵様の様を慈愛に溢るゝ容貌を以て、話さるゝなど、余は古里に歸り、両親に迎へられたるが如き感を起せり、英語の「クリサンスマム」〔菊花〕の由來を説明するや、ハウ、ファインと賞し、花は櫻木人は武士を解説するや、インデイトと褒め、富士山琵琶湖の由來を、お伽噺的に物語るや、腹を抱へて笑ひ、日露戦争の談となりて、日本結局の勝利を主張するや、夫人は色を正ふして論すらく、勿論です、日本は正義の爲めに戦ふあり、日本人は彼が如く勇敢あり、此神兵の前に射向ふ敵やあらんと嘆賞し、露兵の遺品を其遺族に贈り届けたる日本の義侠を激賞し

ンプリーナイスと感極つて泣けり、ホルデン氏傍より、日本は御金に困りはせずやと云ふ、決して困らず、此戦争が五六年續くも平氣だと、大言を吐きたるところ、夫人は名狀すべからざる歡喜を叫びたり、食事をなす、例により喋くこと亦例の如し、此處にて「スニプ」〔魚肉〕、「ロースビーフ」等は、ホルデン氏が「サー、フシ」〔フゾン〕は夫人、之を別つ、ホルデン氏曰く、魚ですか、肉ですか、夫人曰く、少し肉を貰ひましよう、デュー、ホルデン氏の名なり、「ソー」澤山つゞの嫌や、デュー、ソといへば、ホルデン氏は餘り少きにわらずや、モ少し食ひ玉へと云ふ風に、夫人の顔を見乍ら微笑せり、余は傍より之を見て、彼等の生活が如何程愉快ならんかと思へり、食後、ホルデン氏は奥様煙草を飲でも宜敷やと聞く、宜敷とざるも承諾を得て、火を付け、やがて英人の所謂「ファイヤサイド」〔爐邊〕に到り、又た話を初め茶を飲む、ホルデン氏は紡績業、織物業等に關し、百餘の質問を發せり、晝間、ヤング氏邸にて疲勞し來りたることとて、こゝ非常に閉口せり、辛ふじて切抜け、夫人の爲めに繪畫彫刻、焼物等の話をあし、最早十一時あればと二人が留るを聴かず、寢床に入る、此室で日本人會頭の「アーサー、デナシー」が訪問のとき、は寢るのだと聞たが實に立派なものなり、三十疊位敷ける室で、「ベルシヤンカーベツト」が敷き詰められてある、大理石の顔洗臺や、絹地に日本繪したる屏風様のものもあ

り、側には鏡入りの化粧臺「ソファア」等もある。寢臺には枕に沿ひ屏風の厚き緞子の風蔽例の如く、電燈は枕上に吊り下され、其紐及點火機は、枕の傍に横はる。是は眠る前本を讀む人の爲めに備へたるものならん。此他に肩の「コリ」を治する爲め、電氣按摩器あり、「シート」にて毛布を包めるもの件の如く、「ヘッドカバー」(寢臺掛)は日本絹にして、花鳥の模様眼覺むる程眩麗あり、直ぐ手のとどく處に書架あり、文學的美裝のもの幾冊あるを知らず、余は「ラムス、エッセイ」及「ライフ、チーフ、ビー」を抽きて讀下せり、寢室には煖炉あるに拘らず、猶ほ寢床を煖める爲め、熱湯を入れたる湯マンボあり、隣室は浴場にて、風呂は大理石製「ハンドル」を振れば、湯及水を出すとを得るなり、使所も亦此室内にあり、瓦斯「ストーブ」も具へられてある、余は快く一睡し翌朝八時隣室の風呂に入り、室に歸るやホルデン氏は林檎、葡萄、梨子等を盛れる日本の錦出大鉢を持來り、余は貴殿が善く眠り玉ひしを望む、朝の菓物は金の如く善くある杯言ひて余に渡さる、猶新聞を見せ「バルチック」艦隊が英國の漁舟を撃沈めたるを報せり、彼は非常に憤怒の色を現はして曰く、シンプリ、アボミナブル！、セーム！、コンテンパチブル！、ワントン！、リヂャユラス！と彼は凡ゆる侮辱の言葉を連發したり

十月二十四日 麗日也、余は所謂黄金の如き朝の菓物を喰ひつゝ、服装して下に來

れば、千七百二十年と刻せる長持が階子の下に横はるを見たり、聞けば此はホルデン氏の爺さん時代のものなりと、英國極で、其當時の彫刻が施されてある、其様印度彫刻に似たり、大廣間の客室に入るに、日本製の屏風あり、象牙細工にて櫻に鶯柳に燕を刻せり、雪山の號あるが仲々高價なるものと見たり

又虎の皮、彪の皮等敷詰められ、安からざる御座敷なり、朝飯を喰ひ、庭園を散歩す、非常に廣大にして、下に至れば瀧などあり、我京都邊りの別荘の如し「ポットハウス」あり、日本の菊數十種を培養せり、此他珍奇なる熱帯植物蒐集せられ、一人の園丁之を守る、後、ホルデン氏と「イングヤ」紡績を見る、立派なる石造にして、烟突は煉瓦なるが、此烟突に拾壹萬七千圓を費せりとして、ホルデン氏は愚なりと叫べり、眞に愚かり、此紡績は紡績のみ、而かも「ミュール」機のみを用ひ、「リング」なし、錘数は八万六千、原動力は千二百五十馬力、米棉にては廿八手より四十手迄を紡ぎ、埃及棉にては四十手より百手を紡ぐ、本工場にて使用する職工は二百人にして、六本の蒸籠を一人にて受持てり

ホルデン氏の話に、英國紡績の原價は、一錘平均五十志、即ち二十五圓なりと言へ

次にホルデン氏所有の「パンクトップミル」を見る、織物會社にして、七百十一臺の織

機を有せり、職工二百八十名、賃銀平均廿五志と云ふ、一人にて四臺の織機を受持てり、機械場には一人の専門技師あり、一の自動機を試験し、盛に工夫を凝し居れり、「ハクマ」機と「ノースロッパ」機の合の子機あり、

之れから學校、水練場等を觀覽し、瀝車を取りて「ブラックパーン」に至る、「ウイリヤム」ヂッケンソン織機製造所を見んとてなり、當工場は四百人の職工を使用し、其賃銀平均二十五志なりと云ふ、一老技師案内して「ブラックパーン」を覽せしむ、此老人は永く日本にあり、大阪の平賀博士などは懇意にて、久しく天滿紡績に居り、弟子か四五人もありと云ふ、

鑄型を作る「ファウンドリー」及「ファーチス」熔爐場、「ミリング」室、「トリンミンク」室等を見る、自ら稱す本工場は世界最大の織機製造處ありと、

ホルデン氏が留むるを聴かず、三時半強てマンチエスター市に歸る、チャチヒル君ピクトリヤ停車場迄、雨を冒して出迎へらる、二三軒の本屋に立寄り、各種の本を買入れて、氏の事務所に至り、種々面白き話を聞く、又「ミントラントホテル」にて夕食し、七時頃「プリンセス」に至り、「オクリター街」と云ふ劇を観る、姉妹あり、姉はエンゲリッセル人死して後家なり、妹には海軍士官の戀人あり、互に戀慕したるところ、士官

戦争に出で、妹は教師とありて、士官の歸來を待つ、士官凱旋し、女の家を訪へば、見る影もなく荒れ果てたり、女は餘りの耻しさに得堪へず、其身を躲せしに、男は女が既に戀に飽きたるものと速了し、敢て追はず、女は士官の冷淡なるを見て、燒腹となり、昔の若き心を起し、立派に衣服を着け、若返りて、舞踏をさす、此處へ士官來り、大に惚る、女は男が風装により心を左右するを惡み、盛んにじらしたる後、遂に夫婦にあつて、ふ筋書あり、「クオリター街」とは、「グールド、フォーク、クオーター」を意味する由、今日より六十年前のところに、禮儀人情の敦厚なるところ、凡て日本的なり、チャチヒル氏大に賞嘆し、近世人情浮薄紙の如きを慨す、

十月二十五日 晴、天、朝飯前、「ホード、チブ、トレード」當市支局長「デョーシデックス」君訪問、日本紡績事情の報導を托せらる、十時「オーエンス、コレツシ」に教授「チャップマン」君を訪ふ、「ヤング」氏の紹介、不在なり、「マンチエスター」運河會社に「ピツテル」氏を訪ふ、是又「ヤング」氏の紹介也、氏は十年前孟買の「ガダム」商會に居たる人にて、彼の地にても仲々の敏腕家なりしと聞きしが、今や此大市の大會社に入り、要職を占む、得意想ふべし、非常に多忙なる身にも拘はらず、約四十分間雜話するを得たり、船渠地圖、及「エレベーター」説明書等を貰ひ、明日運河及船渠を見物すべきを約束して、辭し去る、余は次に

マンチエフター棉花協會に、書記長アレン氏を訪ふ、ヤング氏の紹介氏は有名なる雜誌「コットン」を出版し、米國の諸雜誌に筆を執り、外に事務所の雜務に拘はり居れり、而も獨力以て之を辨じ居らるる次第にて、非凡なる事務家なり、氏は大尉なりしが、軍人より商人に轉籍したるありと云ふ、成程軍人の面影あり、盛に「バルチック」の暴行、英國漁舟を擧沈したる件を慨し、今や全英人の血は湧きぬと云へり、十月廿二日發行の「コットン」誌上には「ガーデアン」紙の余の意見を轉載したる由を告げ、一部を惠まる、十月十四日には、英國紡績聯合會員、及棉花協會員の集會あり、あらゆるエコノミーを行ふ方法を論じたる結果、運河會社を十分に使用し、直輸入をなすに議決せりと云へり、李坡の棉花協會は、賣手の會合で、當市の棉花協會は、買手が主で、賣手は一步通なり云々、又曰く、當地の紡績聯合會は、職工其他に關係し、棉花協會は、仲裁等の事を司ると、即ち我紡績聯合會は、英國の紡績聯合會と、棉花協會とを兼ねたる者なることを確めたり、次に「ロイヤル」取引所の「ビラー」第十五番の溜りに友人コッカー氏を訪ふ、アールブライトとて有名なるジョンブライトの孫に當る人に遇ふ、此人は全名紡績會社の持主にして、一ヶ年前日本に在りしと、少しは日本語を話せり、

三時半頃「ヘザリントン」父子商會、高田商會の紹介と云ふ紡績機械製造所を觀る、取

締役の「ボード、ルーム」にて、取締役のロバート及ジョンソン兩君と會談し、技師長某の案内にて工場を覽る、大仕掛驚く許りなり、然れども不景氣の爲め、二分一通り運轉をさせるのみ「シヨールーム」にて全社製の諸機械を陳列し、運轉せしめて見せる大室に至る「メールブレート」「ホッパーフヒーダー」「オーブナー」「クライトン、オーブナー」「スキャッチャー」以上を「コンバインドマシーン」と云ふを見、次に「シングル、スカッチャー」「カード」「ドロイニング、フレーム」「フラビンク、フレーム」「インターマチエート」「ロービング」「スピニング、ミュール」「トワイナー」又は「ダブリング」普通の「ミュール」は錘の方が動けども「ダブリング」の方は臺の方が動くなり、「リング、フレーム」「ウエースト、ミュール」「バインリシグ、マシーン」錘を廻轉する紐を製造す等を見、一々其説明を聞きたり

次に「ツール、シヨップ」器械製造の道具を作る處「ストワー、ルーム」「ミリング」部「トルーイング」部「ドワリング」部「鑄型場」「ドレッシング」部等を觀る、三千人の職工を使用せり

十月二十六日 晴天

十時半「オーウエンス」大學に、教授チャプマン博士を訪ふ、博士は口髭なき、敏捷らしき近世英人型也、諸先生の團休かと思はるゝ、大きな立派な生徒が十四五人、講義を聽

くべく待ち居れり種々談話を爲し、晝飯を進められたるが、他に用事あればと、再會を約して辭し歸る、ホルデン氏を訪ふ、不在あり、チャチル君を訪ひ、暫時話したる後、ヤング氏を訪ふ、今日は運河を視る積りありと告げたるどころ、ヤング氏及スコット氏同行せらる、運河會社員ローウエ氏の案内にて、小蒸氣船に乗り、八番の「ドック」に至る、ハナ、の倉庫を見る、煉瓦造にて五階建なり、最上層は「アスファルト」の平面を敷し、「ウイッチ」揚卸機あり、電氣力にて動せり、三十噸を揚卸すと云ふ、此等の倉庫には印度行の反物箱推積せるを見たり、カラチ港よりの穀物袋も澤山見受けたり、凡荷役後、四日目より倉庫料を取る規則にて、棉花は貳拾「ハンドレットウエイト」一噸に付、五志の運河税を課せらると云ふ、次に「エレベーター」を見、鐵道の四通八達せる状況を見、材木の所狭き迄に堆積せるを見たり、此の運河會社の所有に係る「ロコモーチブ」機關車のみにも三十五臺あり、境内の鐵道線路も皆な運河會社のものなりと云ふ、半哩に亘る新「ドック」及「エレベーター」を構へつゝあるが、特に注目すべきは「セッドハウス」にして少量の鐵材と「コンクリート」のみによりて建られて、五階にて「ドック」に沿ひ、長さ半哩あり、此他「ドライドック」「バンツーン」「ドック」等、皆な人をして瞻若せしむ、ヤング氏曰く、「エズ運河會社は運河のみを造りたるに過ぎざるが我マンチエスター運河會社は「ド

ック」を造り、橋梁を作り、鐵道を敷けりと、如何に御高慢なざるも小生に於て一言も無之候

事務所には寫眞帖を備へ、明細に運河の事情を報し、外に凹凸地圖を作り、「ドック」倉庫等を現はし、紙を船の形ちに切りて、船名を記し、現在所繫の「ドック」にピン付せり、又二ツの時計様のものあり、時及満潮時を示せり、かくて凡ての現状を一目瞭然たらしめんとするなり、余は元來大阪築港が紡績業者に非常なる利益を來すべきを信ずるものあるが故に、「マンチエスター」港の裝置に付ては特に精査せり

二時半頃「リホーム」俱樂部の「サンドウイチ、バー」に入り、三人にて「ビール」「サンドウイチ」「カステラ」等を食ひ、満腹の後二君に別れを告げ、ストラットフォードなる「ブリチッシュ」ユウエスチングハウス電機工場を見る、總支配人「シー、ビー、オウエル」氏と會談後、「チンク」なる見習技師の案内にて、工場を一覽す、宏壯至極、「コイル」製造電流止、大「セチレター」「ミリング」「トルイニング」「ドリ、ング」部を見たるが、瓦斯機關などは、廣大驚くべきものなり、モーツ驚きたるは橋梁の横になりたるものが、機械工場の上に在りて、重量物を上下左右に動すと自由自在あるにあり、木型製造場、鋼鍛兩鐵の鑄型場、鍛冶部等、皆驚く許りの大仕掛なり

此會社は米人の企業に成るものなるが、資本は英人の出資に係ると云ふ、取締役は英人の方多しといへども、總支配人副支配人等はみち米人にて、事務は米人の掌握するところなるが如し

歸路電車を取る、工場歸りの職工と同乗す、一人の種ヶ嶋氏と一處に働きたる者あり、君は日本人にて我工場に働たる種ヶ嶋君を知るかと云ふにより、然り倫敦にて會したりと答ふるや、盛に日本人の敏捷親切、義侠なるを歎賞し、日露戦争に移り、バルチック艦隊の暴行を論じ、日本が此暴略を打ち亡ばさんことを望む、英國も行きませし云々、皆一日の業を終り、此から家妻と差向ひで、一杯やろうとするのであるから、甚だ以て元氣なり、余輩亦渠等と同乗し、一種言ふべからざる愉快を感じつゝ、歸宿す

十月二十七日 日本晴、朝十時「フレーザー」商會に行き、度々厄介になりし謝禮を述べ、社長「ドリ」と會談す、次に約束通り「ヤング」氏と撮影し、ピクトリヤ停車場より「オルダム」なる有名の「プラット」工場を見る、恰も晝飯時ありしを以て、取締役其他紡績業者と會食す、老ひたる「プラット」パーソン、マースデンと云ふ重役に、先日買求めたる「プラット」紡機の満足すべき者ありしを述べ、取締役一同大に喜ぶ、次に當社の「コンマール」シヤルト「ラベラー」出張員と名乗れる四十七八位の人あり、明治元年頃日本に在り

たりと云ふ、今度歐大陸旅行に出掛くる筈ありと語る、次に之も紡績業者あらん、四十二三の髭髯蓬々たる温和なる人あり、二十五六と思しき息子を伴へり、今度「プラット」社に見習として使用せられんことを依頼の爲め來れるあり、「スー」ア「ビー」ン「ペン」グ「琲」珈、煙草等の御馳走なりしが、老實ある「パット」ラ「ハ」は、絶えず白或は赤酒を勧め來れり、日本人は勿論余獨りなるが、一同より盛かに款待せられたり、聞けば我最初の紡績島津公所設に機械を供給したるものは「プラット」社ありと、今日同社機械が、我紡績界に好評を博せる宜かりと謂ふべし

食後新舊両工場を見たり、両場で一万人の職工を使用せり、職工工程は、四百馬力の機關を片腕左腕機械の爲めに奪はるの老人、一人にして受持つと云ふ割合なり、新工場は材料を仕上げ、舊工場は之を組立つるなり、マーステン氏は舊工場の長なるが「オルダム」滞留中、余は氏の自用馬車を使用せり

此工場にて、露西亞人、佛人、伊人等の見習を見受たり、日本人にて齋藤大久保の両氏、近頃迄居たりと云ふ

午後十時頃「チャーチル」君來訪、喫煙室にて快談す

十月二十八日 晴天、十時半「ホルデン」君を訪ひ、別辭を述べ、次に「チャーチル」君を訪

ひ次にヤング氏と別れるべく「ガーデアン」社に行く、モンクスハウススコット等に別れ再びヤング氏の室に來れば氏は容を正して曰く、余は君が余の著書の譯者なるの故ではなく、君が左様に多くの新らしきインホーメーションを與へられたるが故でもなく、唯た君の如き有爲の人堂々たる日本紳士と親しく知り合ふことを得たるを名譽とし又幸福として神に謝するなり、君は多分世界棉業に就て著書を爲すからんと信す、余は之を英語に反譯する能はざるを憾む、然れども余は君が之を譯し能ふを疑はず、其時は之を英國にて出版せらるゝ様希望す、凡ての盡力は余に於て之を負擔すべし、爾今我等は兄弟たるべし、君が今度英國に來らば、余が家を家とせざるべからず、「ホテル」に投すべからずと、彼は實に余をして感極まりて泣かしめたり、十二時半チャーチヒル君等に送られ、セントラル停車場より李浦に向ふ

李浦浦第一の大ホテル「アデルフイホテル」に投す晝食後、ホルンビーヘメリツク商會にヘメリツク君を訪ふ、(タ、商會紹介)圖らざりき、氏は當市に於ける日本名譽領事からんとは種々談話の後、直ぐ隣なる棉花取引所を見る、唯見る大建物の内部に亞米利加先物、埃及先物等の「リング」あり、數千人賣る、買ふと、狂聲疾呼、眞に喧騒を極めり、米國紐育市場等とは僅かに二分間にして返電を取るとを得ると云ふ、米國相場は着直

ちに、白墨もて黑板に書出さる、埃及も全様なり、政治的電報も、委細謄寫して揭示さる、埃及棉の「リング」は、地上に直徑一間位の輪を作り、商人此に寄り集るものあるが、米棉のそれは直徑七八間もある中に、階段を丸く造り、次第に深くなり居れり、商賣出來たるときは相方の手代自分の手帳に記し置き、相間に引合はすあり、勿論、コンファーマーは書式に據るも事務所に歸りてからのとなり

夜、エル、シー、トライピー氏に伴はれ、ロッド街の獨逸的料理屋に會食す、先生加特力教徒あればとて、魚肉のみを食ひ、肉を食はず、此日は金曜日なり、余は大ビヤ、三瓶、魚は勿論、鶏肉、牛肉、豚肉等を食へり、此人は獨逸人なるが、誠に上手に英語を話せり

八時ロンドン路の「セキスピア」劇場に「オセロ」を観る、本場丈けにて又格別なり

十月二十九日 「ホルンビーヘメリツク」商會に行き、「ブローカー」としての商賣遣り方を教はりたる後、グリーン君を案内として、雜物大取引所、器械、船舶、材木等を見、マクプアーデン商會の「サンプル」室にて、實際商賣の行はるゝ模様を見、次に有名なる「ドック」を見たり、八哩に亘る「ドック」セツトハウス、電氣鐵道(高架)、六七階の煉瓦造倉庫、鐵道の「ターミナス」ラングセツド等づらりと込み合ひたる工合、其繁昌其大仕掛、唯あつど驚く許りあり

所謂ノールリバー、マーセイ川のランカシャ側を李坡浦とし、チンヤ側をパーク
ンヘッドとなす、此間を大フェリーが五分間毎に來往するなり、大西洋航船は、パンツ
ンセッドに横付けになり居れり、余は米棉の荷揚場、カーチング、馬二三頭が一度に
四五十俵の米棉を運ぶの工合、及米棉を倉庫に入れる方法等を視察し、李坡浦が驚く
べき海港たるを感銘して歸路に就きぬ

歸來、ヘメリック氏の案内にて氏は蘭人の歸化せるものあり、コンサーバーチブ俱
樂部に會食す、一老人來り余に握手を求め、日本萬歳を三唱し、種々日本を賞讃したる
後、ユー、アール、グレート、パワー（汝は偉大なる國民あり）と言ひつゝ去れり

午後四時五分の氣車にて歸倫す

十月三十日 雨天恰もよしマンチエスター、李坡浦旅行の慰勞として遊ぶことに決
定し、梅田氏の來訪を幸ひ、相共に野澤組の林、高嶋兩君の許に抵り、快談快飲嬉笑抱腹、
時の移るを知らず、夜十一時に至りて歸宿す

十月三十一日 小雨、朝十一時正金銀行に赴き、五十嵐君に預け置きたる四十九磅
十志を受取り、トーマス、シツクにて倫敦よりトパー、チスタン、ブラッセル、コロン伯林、
漢堡を経て紐育に至る一等通し切符を、十八磅十七志にて買求めたり、次に三井物産

に行き、小室君に別辭を述べ、日郵に至り、數日前米國經由にて復任せられたる支店長
根岸君に會ふ、長々御高説を承るに、仲々エランなる御方なり、夫れから高田商會、領
事館等に立寄り、御禮なり別辭ありを述べて歸宿す

十一月一日 雨天、朝十一時日本郵船會社に行き、セームス氏と會談、バルチック艦
隊のことに關し、氏は全艦隊が東洋に往き能ふことを主張し、余は其不可能なるを主張す、
國際公法を云々するは學者のとなり、我等商人は實際出來得るや否やを見ざるべか
らず、バルチック艦隊は、實際行きつゝあるにあらすやと、例の英人一流の實際論を擔
き出せるあり、永井君及日郵ステアード（荷役人）の案内により、倫敦の港灣制度を視る、
人倫敦の偉大を知らんと欲せば、必らずや其根元たる倫敦橋下流テラムスの光景と
其兩岸のドック制を精察するを要す

十一月二日 小雨、余は本日只今倫敦に別れんとする也、余が倫敦に來りたるとき
は小雨シヨホ降る日なりき、今余が去らんとする時、亦小雨霏々たり、東方の一貴公子
を迎へて、嬉し涙に咽びたる彼女は、告別に際し名残を惜むものならん耶、余が初めて
倫敦に來りたるとき、彼は非常に冷淡なりき、然れども少しく慣るゝに従ひ、彼は老實
なる友人となれり、巴里を出發したるときは、情婦に別るゝの感を起したるが、今倫敦

を去るゝに際しては、善友と分袂するの情に堪へざるあり

チャールリントンクロス停車場朝十時發の列車を取り、ドバーを経て、オスランドに渡る、海上穩かかれども、多少船酔の氣味あり、四時過ぎ全地に着す、オスランドは白耳義王夏宮のある所にして、歐洲屈指の海水浴場なり、毎夏歐米人の此地に遊ぶもの五萬を下らずと云ふ

五時發の列車にて、ブラッセル府に向ふ、兼て白耳義の滌車は世界第一なりと聞きしが、成程立派なるものなり、併し停車場名の掲示なきには失望したり、六時卅分ブラッセル着、マンセルホテルに投ず

十一月三日 天長の佳節、近來の快晴早朝より十二時二十分迄、ブ府を見物す、申す迄もなく、是は白耳義の首府なり、センヌ河邊の一大良都にして、小巴里の名あり、人口七十萬を有す、官語は佛語あれども、下級人民は、フレミッシュを話せり、余は佛女型の頗る付き別嬪を案内として、五千萬フランを費せりといふ有名な裁判所を見たるを初めとし、市役所、セントグリユール寺、上下兩議院、王宮、グランバルク、大公園等を觀覽したり

十二時二十分、カールツノール發の列車にて、アントワープに到る、安府はセルド河

に沿ひ、人口三十五萬を有す、多くはフレミッシュ人なり、本府は又歐洲屈指の大港にして、ドックは市の北端にあり、三百六十哩の水面積を有し、遙かに倫敦と其覇を争はんとするの概を示せり、ドック「カセドラル」寺、商業大學等を見る

歸路、有名なる古戰場「オートルロー」を過ぐ、時既に黄昏、鬼氣人に通る

華都兒樓懷古

久米 易堂

是戰也。佛帝拿破侖命悉銳挑戰。期日備必勝。英將堅陣不敢動。將候前村普國旗見焉。佛帝望之。自知事破。跳白馬逃歸。軍中無知者。戰聲益急。馳突英壘。夜半未休。枕骸相依如丘。戰罷。就其劇戰處。起大冢。高數丈。上坐獅子銅像。眼日向佛都巴黎。世雄驚佛人。惡之。後佛人助白國獨立。欲毀其像。白人極力護衛。永存鯨觀。至今華都兒樓。英人來吊者。陸續不絕。而佛人過者甚少云。

萊隴高低負廢垣。喬林無不帶彈痕。守園老叟迎吾說。佛將七回爭此門。狼烟日暮帝先逃。夜半風聲尚怒號。獅子于今睨佛國。滿原青草古墳高。歸宿したるは八時、今日は天長の佳節なり、旅順の落つべき吉日なり、晚餐卓上特に三鞭酒を抜き、聊か祝意を表す

武魯勢耳府

谷 朝 軒

砥平大道盡通衢、壯麗之觀小佛都。爭上市來人似蟻、巧牽車去犬疑駒。儉勤成俗眞王道、
築鑿全工乃翫圖。鋼鐵由來多若土、餘贏遠向外邦輸。

十一月四日　カールツミデ午前九時四十分發の列車を取り、リーツユハルヘステ
ル(白耳義と獨逸の國境にして、税關吏此處に行李を檢す)等を経て、四時二十分コロ
ン市に着、コロン市は有名なるライン河に沿ひ、嘗て羅馬人の殖民地たりし古都にして、
人口三十七万を有する獨逸國重要な商業市なり、歴史的にして清麗なるを以て、伯林
を東京、漢堡を大阪とせば、コロンは正に我京都なり、余は税關に到り、倫敦より書留に
せる荷物を受取りたる後、市中を馬車にて見物したるが、ハンザリング、ホーヘンゾル
ンリンク等は清酒なる大通にして、市を取巻きライン河を直徑として半圓を畫けり、
ホヘ街最も雜沓を極む、市に繁昌を持來たすライン河岸の荷物卸場、倉庫等最も觀る
に足る、中央停車場附近の料理屋にて、名物麥酒數瓶を傾け、其勢に乗じ、九時四十分の
瀛車にて伯林に向ふ

拉　因　河

柳　原　青　々

孤舟遠上拉因河。水自清漣山自峨。兩岸風烟人不見。古城秋冷夕陽多。

十一月五日　晴、午前七時二十分伯林に着す、フリドリツヒパンホフ直ぐ停車場前

の伯林最大ホテルなるセントラルホテルに投ず、學友堀、小泉兩君に來着を電報し、徐
ろに浴を取る、清快言ふべからず

伯林は言ふ迄もなく獨逸の首府にして、人口二百五十万を有す、フリドリツヒウイ
ルヘルム時代より漸く繁昌し初め、フリドリツヒ大王之を大成したるなり、チャペラハ
ウス建築者として有名名なるノベルスドルクは、多くの建物を附加し、市街を美化し
たり、チャガルケン(公園)の如きも、大王の創造に係るなり、王は又殖産工業を非常に奨
勵したるを以て、百工頓に興り、十八世紀の末葉に至り、伯林は北歐絹業の中心となれ
り、大王は亦音樂を好み、音樂家、文學家其他の美術家に特惠を給ひたるを以て、大家は
星の如く諸國より伯林に群來したり、即ちホルテールはポツダムに、レツツング、メン
テルン等伯林に、バック、グヨーテ、シラー等は、常に大王を圍みたるあり

潔癖なる現皇帝は、一塵の道路に横はるをも許し、玉はざるを以て、伯林市中の清潔
あると、世界に其比を見ず、眞に嘗めても宜敷かるべき程なり

東道の主人たらんことを依頼せる堀、小泉兩君を待詫たるも來らず、決意して起ち、
有名あるウンテルデンリンデン(菩提樹下と云ふ意)の大通を見る、伯林市目貫の處な
り、西端ブロンセンパーセルトール(凱旋門)より、東端王城橋に至る約二哩の間には、有

名なる建物ツラリと幾を並べつるなり「アカデミー」美術學校、御廐、大學圖書館、フリドリッヒ大王像、伯林大學、近衛番兵屯集處、遊就館、カイゼルウイールヘルム一世王宮、ロイヤルオペラハウス、其他産業諸會社の本部は、すべて此區域に集中せり

伯林府

朝軒

三軍精銳望隆、五尺童猶說戰功、君相誼非魚水比、普英勢與晋秦同、酒香撲鼻難支醉、瀾氣侵膚不可風、朝暮街頭人作堵、親兵代衛帝王宮。

伯林府建都門

中井弘

戰後人情日見真、記功碑畔感殊深、建都門上女神像、昨在巴黎今伯林。

夏夜過鱗田街帝宮

渡邊東民

祥雲掩映帝王宮、面々樓臺開晚風、玉榻珠簾涼可想、袞龍影動月明中。

觀獨逸學士決鬪式有感

渡邊日升

酌自一盃到幾盃、隊々競雄宴始開、維文維武干城士、慨歌聲和響如雷、視死如怡笑上場、刀光一閃殺氣催、怒髮衝空皆欲裂、大喝一聲山亦頽、雄飛雌伏鬪方決、滿場喝采呼快哉、日落秋風凜且腥、盃盤狼籍血作堆、此血此酒君休恠、注瀉報國丹心來。

余は王城、カセドラル、博物館及西方凱旋門外の凱旋塔、帝國議院「チャカルトン」勝利

路、歴代帝王の大理石彫像、両側に並らぶを以て、日本人は之を人形町と呼ぶ等を見現、帝カイゼルが伯林を偉大ならしめんとせらるゝ苦衷の跡、歴々たるを看取しつゝ、歸宿す、恰もよし堀小泉両君來訪せらる、今日は丁度チャイロツタンバークの例會、理科と工科の理工會ありしを、謎山人がリコウの例の字と、コオのコの字を取り、かく名けたるものありと云ふの會日なればとて、伴はれて出席す、集るもの十六人、専攻學は、醫科あり、工科あり、理科あり、理財科あり、運輸科あり、寫真科あり、皆文部省の留學生か、然らざれば公達なり、談笑湧くが如く、散會したるは正に十二時なりき

十一月六日

朝曇夕雨、小泉君を東道の主人とし、先づ帝國議會の前に、蓋々天を

摩せんとする勝利塔に登る、句に曰く、今に見む山王臺に此塔を、塔上より伯林市を大觀したる後、ピスマーグ大彫像、ローンの像、デーゲスアレ「勝利塔」ライプツヒ街の郵便博物館等を觀覽し、夜十一時歸宿す

十一月七日

朝晴夕雨、又々小泉君を勞し、午前十一時王城内部を拜觀す、莊麗偉觀を極む、午後動物園を見る、獅子が三匹兒を生んで居たり、まるで小猫の如し、倫敦の動物園に比せば小形なり、「スードリンク」「ノルドリンク」と云ふ、伯林の周圍を取巻ける鐵道に乗り、市を一周す、夜一時迄玉突等をなし、歸宿したるは夜二時半なりき

十一月八日 雨天、朝の内に博物館、遊就館を見物したり、前者は英國博物館を見たる余には、貧乏人の蒐集したる骨董品陳列場の如くに見ゆるが、後者は流石に近世陸軍の本案本元丈けありて、立派なるものあり、言ふ迄もなく、近古武器の組織的陳列所なり、外に練兵場、繪畫展覽會等を見、大々的市中散歩をなしたり、夕飯後、フリドリッヒ街及ライプツヒ街を散歩す、獨逸人は朝七時より晚七八時迄働くなり、但し晝間三時間を休み、此間に晝寐をなし、八九時に夕飯を済まし、之れより或は俱樂部に、或は青樓に、或は珈琲屋に遊蕩す、街頭を散歩すると十二時頃より盛となり、二時頃に至りて其極に達す、醜業婦群をなして往來し、顔色憔悴せる遊冶郎等之を追ふ、夜の伯林は實に醜態を極むるなり、十二頃歸宿す

十一月九日 雨天、午後一時二十分レイターバンホフ發の列車を取り、四時五十分漢堡に着、ホテルリユロープに投宿す、晚食後、ピンチンアルスターと云ふ美しい湖水の周圍を散歩す、二哩もあらん、伊國ベニス夜景に似、畫けるが如し

漢堡は、現今六十五萬の人口を有せるか、シャールマンが紀元八〇八年頃創設したるものなり、十一世紀頃には所謂自由都府として、共和制を行ひ、十字軍出征に關しては、金錢上の補助をなし、十三世紀頃に及びては、夫のハンザ同盟に入れり、かく一盛一

衰今日に追ひたるものなるが、現今は獨逸第一の要港として、我大阪の地位を占むるに至れり

十一月十日 曇天、朝九時、トーマスクック及漢堡亞米利加船會社等に行き、一面米國行の川意をなし、ふきてクロニンゲン街ある三井物産會社に、支店長井上治兵衛君を訪ひ、獨逸人の番頭を案内者として、取引所、市役所及有名なるエルベ河の港灣制度を見る、出船入船の頻繁、雜然轟然たる光景、李坡浦と相似たり、實にエルベ河は漢堡を作りたるなり、三時頃より小供を案内とし、主要なる街區を見、晚景井上君の案内にて、どある青樓に會食したる後、當市第一の芝居を観る、時代物にて例のハウトマン先生の傑作なり

十一月十一日 獨逸入國以來の好天氣なり、ハノババンホフ發九時三十一分の列車にてブレメンに至る、途中は大平原あり、但し印度の荒原の如くならずして、處々に森林の蒼鬱たるを見る、十一時半同市着、案内書片手に徒歩して、カイゼル街のエミル、リチテンバースク氏を其商會に訪ふ、井上君の紹介なり、氏の案内にて雜物取引所、棉花取引所、市役所、ドック等を見物す、就中棉花取引所は、其組織に於て將た其規模に於て完全を以て世界に鳴るや久矣、實に余は之を見んが爲めに來武せるなり、成程立派

に又堂々たり、されど勢に思ひぬ余りに規則に束縛せらるゝの憾あきやと、見よ李坡浦、マンチエスタ、紐育、ニユナリヤン等の棉花取引所は、書記長一人にて容易に運轉しつゝあるにわらずや、然るに常取引所にては、曰く所長、曰く副所長、曰く書記長、曰く次席書記長、曰く仲裁者(アービトレーター)、曰く助手、曰く何と殆ど人の爲めに、局を設けたるの觀あり、即ち李坡浦の取引所に年々壹萬圓の費用を要すとせば、ブレメン取引所は拾萬圓を要すべし、偕て事務の執り工合に於て、差異ある點は如何と云ふに、前者は紛議を決するに、賣買相方より仲裁人を撰定するも、後者は特定仲裁者を取引所に備ひ置き、紛議起る毎に仲裁をあさしむるなり、理論上後者の公平なるに若かざるが如きも、政治上發言の權利なき、專制君主治下の臣民の暗愚なるがごとくに、紛議裁定の機會なきブレメンの商人は棉業の一般的智識を闕如するの嫌あるを免れず、況んや何もかも規則スケメのことでとて、李坡浦の如く敏活自由なる取引をなす能はざるの弊、歴々たるをやだ、元來獨逸人は規則スケメにすることを好み、いな希望せり、或曰本人の如きは同國法律の完備せるを嘆賞し、我も進んで之に倣はざるべからずとなし、川もなきに法律を作り置くの愚を演せんとすれども、余を以て之を觀れば、獨逸人は法律を以て束縛するにわらざれば、個人として活動する能はざる不完全なる人民

たるとを憫むと同時に、深く自由の民たる英米人を羨望せざるを得ざるなり
ブレメン市は人口十六萬を有し、ウエーセル河に沿へる獨逸第二の港市なり、漢堡は屢々戦亂の爲めに蹂躪せられたりしが、當市は不思議にも格別の災害を受けず、従て名所舊跡の觀るべきもの多く、到る處歴史的趣味津津たり、夜九時頃歸宿、明日は彌々米國に向て出帆すべきなり

十一月十二日 朝雨夕晴 朝八時頃旅亭を出で、ハノバパンホフ九時發の漢堡亞

米利加線特別一等列車にて、コックスハーベンと云ふエルベ河口の小市に向ふ途中一美人と一塊人に懸意を結びぬ、彼等は今は米國人にして余と同船にて米國に歸へれるあり、十一時半着、大待合室にて麥酒サンドウィッチを喰ひ、先づ腹を拵ぬ、多くの米人(主にも獨逸人の米國に歸化せるもの)と快談す、長く待たされて漸く二時半に至り、グラフウルデルゼー二萬四千噸號に乗る、甲板上バンドは凱旋の譜を奏す、上等客二百名、二等客三百名、下等客二千五百名なるが、日本人は唯余一人あり、三時ヤオラ此巨船は進航を初め、樂隊は進軍の譜を奏し、陸上の見送人と船中の見送らるゝ人とは、或は泣き或は呼び、或はハンケチを振るなど、今更の如く騒げり、歐山を跋渉し盡して米水に向ふ余は、泰然として甲板上の長椅子に横臥し、頻りに萌す意氣の軒昂を抑

へんと勉めたるも、無益ありき

十一月十三日 快晴、午後五時英國の「ドーバー」に着、流石になつかし、七時半佛國の「ローン」着、此處より可愛らしき男の兒乗れり、ジャックと呼ばれ、巴里生れなり、佛語の外英語獨語を善くす、盛ある日本最負にして、自ら時に東郷と稱し時に又黒木と稱す、唯々余に纏ひ付きキッスの亂射をなすのみならず、日本のものと云へば、行李にでも靴にでも接吻するなり、余は之が爲めに大に國民的精神を振起し、又外人を輸入して能く日本化し得べきを感せり

十一月十四日 日本晴、大西洋と云ふも、宛然たる瀬戸内海なり、余は甲板上の長椅子に横臥し讀書す、ジャック來り、首にカシリ付き、例の如くキッスを亂射して曰く、ユー、アール、カンニング、カンニングは米國にて「スコート」と同意義に川ゆチネスト、エント、ブレブ、アイ、ラブ、ユー、アズ、ツル、アズ、エンセル、フロム、ヘブン(君は敏活あり、正直なり、大膽あり、余は天より來る天使の如くに、誠意誠心君を敬愛す)云々、傍人皆ドツと大笑す、ジャックは九時に寢床に入るを常とせるが、必ず余に接吻せざれば退かざるなり

日本船の場合を除き、余は諸人に獨逸飛脚船を薦む、先刻御承知の如く、獨逸飛脚船

は大抵巨船にして、必ず音樂隊を備へ、料理は甘く、船員は親切に、而して器具清麗なればなり、余の船にては朝七時喇叭にて起床を報し、三十分の後、同じく喇叭にて食事を報す、十時半頃より音樂隊奏樂を、初め「スープ」「ビスケット」「サンドウィッチ」等の間食持運ばれ、十二時半晝飯の喇叭を吹き、四時半頃茶又は珈琲及菓子出で、六時四十五分第一喇叭にてドレスの仕度をなし、第二喇叭にて晩食を食ふべく、食堂に集る、即ち卓上の美酒佳肴に加へ、嚙嚙たる音樂を聴くを得、喫烟し飲酒するものは、「パイ」及「スモーク」「キング」室に至るべく、麥酒に飽き、獨逸的元氣を振起せんとするものは、晩食後開かるべし、「ビヤ」「コンサート」に行くべし、諺に曰く、米人は婦人間に人と成り、獨逸人は「ビヤ」「コンサート」に成人すと、真に善く兩國人の實性を穿てるなり

十一月十五日 曇天、併し海上は誠に平穩、終日「ランドナブ」「フィチュア」「未來の國」「米國論」と云ふ、獨逸人の名著を讀み、「ビヤ」「コンサート」を開きつゝ寢る

十一月十六日 終日雨天、多少風波あり、然れども船少しも動搖せず、船長と語るに、彼は近來迄東洋通ひの「ハンバーク」號船長なりきと、嘗て日本人十五名を救助し、日本政府より銀章を賜はれ、ミカドよりの賜物なりとて珍重すると夥し、又同様のとにて獨逸皇帝より、金側時計を拜受し居れり、彼は老實なる好漢也

十一月十七日 朝來の曇天午後に至りて晴れ渡り、風波亦収まる「ビヤールコンサー」あり

十一月十八日 晴天、東風吹けども寒し、晩飯のとき例のジャック其友たる小女を拉し來り、大音聲にて「ミスター、タツタ、プリース、キス、ハイ」竜田君どらか彼女に接吻を與へよ！と満室大笑す

十一月十九日 終日雨天、風さへ添ひ、不快を覺ゆ、余は「ケビン」に引込み、歐州日記を書けり、本船は絶えず汽笛を鳴らしつゝ進む、之れは海上霧深きを以て、他船との衝突を避けんとてなり、此邊は「パンクス」にて寒流と暖流とが出合ふ處なるを以て、一年中絶えず霧深しと云ふ

十一月二十日 晝飯頃より晴れ渡る、ジャックの父と緩談す、彼は奥人なるが、嘗て獨逸の軍醫として同國に住みたれば、日本士官中には多くの知己を有すと云ふ、彼は佛女と婚じ、ジャックは此間に生れたるなり、彼は進歩的なるの故を以て日本を崇拜す、而も又彼は非常なる佛人崇拜者なり、曰く、佛人位頭腦透徹せるものなし、佛人は非常に節儉なり、百姓の如きは「スープ」と「パン」のみにて生活するなり、是れ佛國の「パン」が旨き所以にして、又佛人が富裕を以て天下に鳴る所以なり、佛人には又非常の俠氣あり、物事に熱心なり、彼の英人が常に理性に訴へ冷然たるが如きにあらず、然れども惜むらくば此民を率ゆる好宰相なく、内閣は常に國家として執るべき政策を誤り人民を苦しむ云々

十一月二十一日 晴天、終日讀書

十一月二十二日 晴天、午後四時頃、紐育より歐洲に向へる大船と相逢ふ、同時に本船は停まれり、何事ぞと聞けば、下等船客の一人が落ち込みたりと、電氣浮標を二ツ三ツも流すやら、「ボート」を卸すやら大騒なり、而かも遂に見當らず、多分自殺せしものならんと云ふ

本船は明晩か明後早朝、紐育着の筈なればと、晩食には大馳走あり、餘興あり、舞踏あり、船長の挨拶船客の答辭等あり、餘興は日露戦争と云ふ題にて、日本軍露軍の行列は樂隊により食卓の間を練り行くなり、日本軍人は一々余の處に來り最敬禮をなす、例のジャックの喜ぶと限りなし、九時頃より舞踏初まる、獨逸人は由來茶飯より舞踏を好むと稱せらる

十一月二十三日 日本的好天氣也、午後三時頃、第一の「ライトシップ」燈明船を過ぐ、樂隊は米國々歌を吹奏せり、余は晩餐に平生の通りドレスにて出掛けたるどころ、

他は皆常服なり、キマリ悪かりき

十一月二十四日 朝九時紐育ドックに着、ハドソン河の大きな船渠制度の大仕掛なる市中の所謂スカイスクラッパー(聳天閣)の宏大ある、流石の歐洲通もこゝ一寸たぢろさたり

本船は紐育の對岸ニュージャージーに碇を下したり、何十艘と云ふフェリーボートは此両市間を絶えず往復せるが、運送賃は馬鹿に貴し、余は馬車に荷物を積みたる儘紐育のブロードストリートに至る、賃銀三弗六十仙を取られたり、米國は電氣鐵道が非常に發達し居れども、馬車制は反對に甚だ不完全なり、歐洲を見たる余には、紐育は不潔、粗製、下等なるの感想を起せり、其住民に至りても、紳士淑女と申すべきものも、實に歐洲喰ひ詰め者の集合ならんと思はるゝ程、野鄙にして劣等なり

紐育(グレート・ニューヨーク)は新世界にて最大最富の市府にして、倫敦を除けば世界第一流の大都會なり、紐育灣に位し、マンハタン、ブロンクス、ブルクリン、グイニス、及びリッチモンド等の諸撰擧區より成り、其人口は三百四十三萬七千四百人にして、内百二十七萬人(三割七歩)は外國産あり

新 約 府

杉 田 定 一

屋上蒸車地下樓。人家百萬水中洲。三千鐵路何言遠。客夢既過東半球。

十一月二十五日 朝より雪ちらつく、三年半目の雪なれば、慄ひ上りつゝもなつかしきこと限りあし、トーマスクックにて磅を弗に切換へ、ブロードウェイ電氣車を取り、倫敦のシターに當るダウンタウンに至り、其ロンバード街に當るウォール街なる正金銀行支店を訪ふ、今西一宮森本最上等の諸君に會す、小遣として二十磅を引出し、孟買倫敦等よりの手紙を受取りなどして、同街あるタ、エンド内外商會に、エメデク、及バルサワの兩氏を訪ふ、兩君共孟買に於て懇親を結べる人なり、三人にて「ブロードエキステンション」と云ふ二十八階の料理屋(佛式)にて晝飯を取る、非常に款待せらる、是よりイーストリバー河岸に沿ひ、雜沓極き波止場の光景を見つゝ、有名なるブルクリン橋に到る、いま此大橋の中央に立ち、顧みて紐育市を望めば、大厦宏樓は崇く地を抜き、争ふて天を摩せんとし、千聲万響耳を劈き、喧轟地を撼かさんとす、伏して東河を瞰れば、河水滔々として流れ、大小の蒸船梭の如くに入り亂れ、吹き競ふ汽笛の聲すさまじ、而して此大鐵橋は虹の如くに此大河に跨れるなり、余は今更の如くに紐育の偉大を感じ、人工の恐るべきを覺へたり

午後五時頃ウイリヤム街ある日本棉花會社の山田君を訪ひ、日本料理屋に會食す

〔紐育に日本料理屋三軒あり〕

十一月二十六日 晴天、タ、エ、ノ、ド内外を介し、ウエ、ル、ド、ネ、ルより南部諸地方への紹介状を貰ひ、山田君より南部旅行に關する種々の注意を受け、午後一時のセントラルデポに發の列車にて、セントルイ博覽會見物及南部棉作地視察にと出掛けた。此紐育セントラルの鐵路はアルバニー迄、ハドソン河の左岸を溯るものなるが、川口よりアルバニー附近迄、其川巾少しも狭ばまらず、實にハドソンは驚くべき名河也。

十一月二十七日 晴天 昨晚余は「ブルマンカー」(睡眠車)を取りたるが、發澤を極めたるものあり、「スモークン」(喫煙車)にて、一米人と親善となりたるが、晝食の時例により「コックテール」を勧めらる。夜七時聖路易市ユニオンデポに着、日本旅店横濱館に投ず。

セントルイス市はミズリー州第一、米國第四の市府にして、世界最大河たるミシシッピの西岸に位し、六十万の人口、十萬の獨逸人、三萬五千の黒奴を含むを有す。ミシシッピ流域の物産集散の中心にして、「パン」粉、肉類、烟草、家畜、材木、穀物、羊毛、獸皮は其重なる産物なり。當市は烟草業に於て世界第一にして、一ヶ年の製造高九千萬封度と稱す。又麥酒、メリケン粉、靴類、鐵器類、鐵道車、煉瓦、木細工等の製造甚だ盛なり。

十一月二十八日 日本晴 當市は南部に屬するとして、今や春風胎蕩の氣候なり。十一時名高き聖路易萬國大博覽會を觀る。五十仙銀貨を投じて入場すれば、「バイク」云ふ淺草奥山的大通に入る。右に途を取り、更らに左に行けば、運輸館、電氣館、工業館等の大建物聳立するの處に至る。場内、オートモビルあり、瀛車あり、馬車あり、人押車あり、誠に目を廻はしうなり。余は此博覽會の概念を興へんが爲め、左に要點を目錄的に掲ぐべし。

四月三十日開會、十二月一日閉會

敷地 千二百四十噓

四十四州參與す(米國は五十三州也)

諸外邦五十ヶ國の參與出品あり

農業館の長さ四哩

標本、アメリカインデアン學校及百名の生徒

完全なる世界各人種の集合

各國各人種の競技

往昔希臘オリンピック祭の復演

原始的黒西哥銅鑛の光景
世界最大漚鑽
完全に機装せる快走船
大氣中より窒素製造
無線電信機(實地操演)
製靴場(全上)
寶玉研磨
盲啞學校標本
十二噓の鑛坑實景
英國女王グイヤモンド、ジユビリ贈與品展覽會
フイリツピン展覽場(費用百万弗)
世界最大の瓦斯機關(三千馬力)
裝飾彫刻物(原價五十万圓)
虹形花園
空中飛行機競争(賞金二十萬弗)

世界最大「オルガン」(パイプ一萬箇)
合衆國軍艦模型陳列
標準農場(米國政府出品)
印度出品(敷地四十噓)
本博覽會の總費用五千萬弗
特別玉蜀黍陳列(費用五万弗)
十噓の薔薇園
四噓の菜物園
半月毎の季節花展覽會
半噓の烟草陳列
一噓の温室(奇卉珍草)
大時計(分針二千五百封度)
園藝館内の「バルコニーカフェー」
農業館内の集會堂(千二百人を容るべし)
棉花隊列(三分一噓高さ六十呎)

砂糖製造實地

一噠に亘る「バター」及「チーズ」製造

四噠の農具陳列

二噠の食料品陳列

アラスカ建築及住民

日本の北海道アイヌ

墨西哥ミトラ市の復活

ルイシヤナ領地の沿革

大競馬場

端艇競漕の大會

体操大會

体操に關する重要な講義

バルカンの鐵像(五十呎)

タルクチャイス鐵實地光景

ペンシルバニヤ鐵坑實景

炭坑の光景

貴金屬及珠玉の蒐集

分拆局

十五噠に亘る森林局出品

萬國釣魚術競技

ビーエンドナー鐵道の歴史的陳列

エジソン氏の發明機出品

模造金剛石商會(製造實演)

各種「ペン」製造

各種寶玉の陳列(一千万弗)

タービンエンジン(八千馬力)

家畜業陳列(三十七噠の敷地にて費金二十六万弗)

陶器製造實地

五噠の生産植物米國地圖

北カロライナ八百年の大木

三百呎長の鳥籠

本博覽會で、最も眞面目になりて出品せるものは、日本獨逸にして佛國之に次ぐ、殊に日本は目下振古の大戦争中あれば、一層觀る者の注目を惹ける也

十一月二十九日 日本晴、外套なしに博覽會見物に出掛く、機械館、電氣館、雜工業館、農業館、園藝館、運輸館等を見る、足棒の如し

十一月三十日 晴天なれども大陸的寒氣を感ず、十一時博覽會に行き、製造工業館、採鑛冶金館、教育館、技術館、政府館、美術館、行政館、白耳義館、自紐育至北極館等を見る

十二月一日 快晴の好天氣、此日は博覽會最終の日也、總裁フランシスの功績を表彰紀念せんが爲め、フランシス、デーと稱し、聖市の休日とあし、貧窮者は入場料なしに見物するを得せしめたり

十一時電車を取りダウンタウンに至る、先づ「ラクレードナショナルバンク」正金の取引先に松村君を訪ふ、正金銀行森本君の紹介によるなり、「フランシスデー」にて休業せり、トーマスクックに行き、セントルイス、リッセルロック、ユーストン、ガルベストン、ニユーオリヤン、モンゴメリー、アトランタ、ワシントン等を経て紐育に歸る通し切符調製を依頼し置き、兼て紐育の内外商會より紹介せられたる「レッサー、ゴールドマン」棉商

會を訪ふ、ゴールドマン氏(パートナー)は、二十五六の青年なるが、非常に親切にして、有爲活潑なり、レッサー氏は五十七八の老人にて、實に「アンタルサム」的にして標本南部人あり、相携へて「ファウスト」ある名高き料理屋に行き、名代の「ビール」を傾け、且つ語り且つ飲みたり、彼等の談によればセントルイスには粉袋を製造する紡績が一ヶ所ある丈けにて、棉花に就ては内地より來る「サンプル」に對し此處にて唯「クラス」付する「李坡浦」は、タイプ商業なれども「ドメスチック」内國一は「デスクリプション」によると云ふに止まる、尤も當市を距る六七十里の處には、勞銀の低廉及石炭の豊富なるを根基として、打建てられたる數多の紡績ありて、此等に原綿を供給するも、直接に現品を當市より送るにあらず、其他一切の商業に於て當市は之を指揮する本陣と見るを得べし、尙故此處を本據と爲すの必要ありやと云ふに、金融及鐵道に於てその中心たればなり云々

又曰く、米國紡績は此頃原棉買入に際し、必ず棉商より直接にし、決して昔日の如く仲立人を介せずと

晝飯後、更らにゴールドマン氏に伴はれ「サンプルルーム」(見本室)に至る、見聞したることを個條書になせば

「ルーズエットン」「サンプル」を「クラス」格付するに際し「トリーム」するとき「落ちた
る棉を拾ひ集めたるものを云ふ

「ベンダー」ミスシツピー河の曲りたる處に出来る、毛足の強硬なる棉を云ふ、今
や柔かならざる棉は皆之を「ベンダー」と稱するに至れり

「クバー」毛足軟弱なるものと「ベンダー」に對して云ふなり、「ベンダー」は「クバー」に
比し、七八弗貴し

「ダスチーエンドステインコットン」葉塵及赤飛を混合するもの也

「リッター」ス」「チイルミル」にて油を搾るに先ち棉實を洗ひ、残り居る棉毛を取り
集めたるものなり

「スレツシユド」是は棉實の破片、葉切等が混合せる不潔棉にして、昨年之れが十
一仙にも賣れたるが、上棉十八仙のとき、本年は買手あしと云ふ

此見本室は二階三階四階等にある大室なるが、内地より来る「サンプル」俵は、一々此
處にて開封せられ、一俵毎に一小塊棉を取出し、其俵の代表棉として之を格付するな
り、十人程の「ステープライ」格付人あり、レッサー氏の息子之を指揮管理せり

レッサー氏曰く、日本の森村商會は、此頃棉を取扱ひ初めたるが、善良なる買出人あ

るを以て旨をやり居れり

日本紡績が米棉を買ふ主たる棉商は「マクファアーデン」「ウエルドネベル」「ハイネツ
クボカサルング」及「レッサー」「ゴートマン」の四軒あり

當市の取扱ふ棉は「アーカンサス」「ミソリー」「インリヤナ」「オクラホマ」棉等にして、積
出港は「ニューオリヤン」あるが、日本行は「シャトル」桑港何れを経由するも、運賃は同額な
り

余は「リッルロック」への紹介狀を貰ひ、此處を辭して、「ミスシツピー」河岸に至り、トラ
フヒツクの模様を見たり、成程非常なる大河にして、沿岸凡て石を以て壘まれ、立派な
るものあるが、此頃は鐵道の競争あるが爲め、可惜此名河を利用せざるの觀あり、勿論
此河が「セントルイ」を造り出し、又沿岸諸州の民に絶大なる利益を與へ居るとは、論を
待たざるあり

十二月二日 午後一時横濱館を立退く際、兼て友情を結び置きたる高橋要、及立花
覺三の兩君を訪ひ、別辭を述べ、先生等猶眠て床に在り、停車場迄見送りやらんと言は
るを固辭し、電氣車にて「ダウンタウン」の「ユニオンデポ」に行き、手籠を預け置き、「クレ
イト」銀行に杉村君を訪ふ、先生病氣とあつて出勤なし、兎に角二十磅を信用狀にて引

出し、トーマスクックに行き、セントルイス、リッフルロック、テキサカナ、ロングビニー、バ
レスティン、ヒューストン、ガルベストン、ヒューストン(再)、ニューオリヤン、モンゴメリー、
アトランタ、ワシントン、紐育廻りの一丈もある、長切符を六十八弗にて買求め、午後八
時二十分發の瀛車にて、リッフルロックに向ふ、米國の瀛車特に南部の瀛車は、切符を
が馬鹿に複雑にして、車掌等に叮嚀なる仕打少しもなく、職務に忠實ならず、便所手洗
處等、停車場に其備なく、特に余は博覽會歸りの乗客多き爲め、大窮屈を感じたり

十二月三日 朝九時前リッフルロックに着(六時五十六分着の筈なり)同地の最大「ホ
テル」キャピタルにて投じ、取り敢へず「レツサーゴルトマン」同會に、其代理者たるアド
ルフハンパーグ氏を訪ひ、此處にて初めて米國農務局の本年の米棉作報告を聞き、た
り、曰く「リッター」を包まず、一千二百十六万二千俵なりと、最も多額に見積りたる豫想
出來高より、猶一百万俵方多き爲め、紐育市場は一度に、五十六點の暴落を見せ、近來の
大混雜を來し、多くの棉作人は、舞々ど詰かけ、大に政府の無情を憤り、こゝろ政府はな
い方がよいなど、今更仕方なき愚痴をこぼしたりとは可笑し、ハンパーグ氏と「ボ
ドオブキレード」取引所とも云ふべし)に行き、取引の模様、各地よりの報告揭示等を見
「キャピタルホテル」にて晝食をしたため、一先同商會に歸り、同社の「ゴールドン君とハン

パーグ氏の「ボギー」(馬車)を驅り、セントルイス俵裝會社を見る、當時其處に堆積せる棉俵
「プランテーションションベル」にて、百姓より持來りたる儘の俵也(二万二千俵ありき、一日
壹千俵を俵裝し得る由にて、勞働者は黒奴なり、其賃銀は一日一弗半なりと云ふ、一立
方呎に二十二封度の割合にて壓搾し、運賃は百封度幾何と建てる由、米國にても折々
百姓が鐵とか石とか砂とかを棉に混ぜるとあるが「コットンオーガー」と稱する棒に
て、内部を見るところを得べしと云ふ

次に余は「トーマスシンコンプレス」を云ふ棉線兼俵裝場を見たり、七八臺の「ソーシ
ン」及「ローラーシン」を大俵裝機一臺を有し、トーマス先生、一人の黒奴と之を運轉せり、
至て簡單明瞭なり、南部にて黒奴を呼ぶには「シン」を云ふ、其名の何たるに關せざる
なり

余は次にトーマス氏の案内にて、直向側の棉實油會社を見たり、棉實を「エレベーター」
にて三階に上げる仕掛、之を破碎する器械、之を篩ふ機械、皮は上に残り實のみ下に
來る等、觀るに足る、皮は油槽と混ぜて家畜を養ふに用ひ、實は之を蒸し壓搾して油を
取るなり、油槽は又更らに之を打碎き「メリケン」粉袋の如くに之を仕立つるなり、棉實
油が器械油として用ひられしは、昔日の如く、今日は之より料理油「バター」等を作る

に至れり

歸路馬車を公園に驅り、曲乘をなして戯れ、六時頃入浴し、ハンバーグ氏の誘引に任せ一旦同氏の住宅に至り、息子ハロルドと云ふ二十才許りの青年と談話しつゝ、久し振りにて「ピヤノ」を遊びぬ、此息子仲々面白き奴にて、君とは昨今逢た友人とは思はぬ、永年の友人の感がするどやらかしたり、余が明朝出發の積りなりと言へるに對し、明日は私が田舎へ馬車で案内し、種々面白きものを見せるから、モ一日泊り呉れずやと、親子に強請せられて、一日延ばすことにせり、とある青樓にて三人が會食し、ハンバーグは聖路易に行き、ハロルドと余とは芝居に行けり、外題は「ターキツシユトレアドア」と云ふのであるが、見惚れ入ると、亦アーカンサスの片田舎に居るとは思はれざるに至れり、ハンバーグ氏別れるとき曰へり、ハロルドには女友がおりますから、多分今晚君に紹介致すべしと、今ハロルドと別れんとするに臨み、彼は曰く、今こゝかに家路に歸りつゝある女は皆喜んで君が枕席に待すべし、一番選擇し玉はずやと、余は例の如く固辭して歸宿す

南部の「ホテル」は、非常に部屋廣潤なり、凡て「アメリカプラン」にて宿賃には、部屋代及食料を込めたるなり、下男下女に黒奴を用ゆるを以て、印度内地を旅行し居る感あり、

又「ホテル」の下階は、客の外澤山の人群集し居り、倶楽部の觀あり

十二月四日 晴天あれども寒さ甚だし、十時頃ハロルドと「ボギー」を驅り、アーカンサスの棉畑を見る、茫々たる原野、彼處此處に枯木の林あり、畑道は電信柱と共に走り、柵には廣告札が貼られてある、雲凝り風寒く、鳥枯枝に憩ひ、天地寂として聲なく、薄戦々、彼邊には、西行が行くかと思はるゝ景色なり、青春の夫婦者が「ボギー」を驅り來るに會す、棉作人なり、妻君を余に紹介し、車上種々の話をなせり、彼曰く、ドーカ日本に、モ一百万俵米棉を引取り呉れずや、さすれば直段か復しますと、農務局報告に蒼くなりたる一人也、凡て米國の百姓は、日本の所謂百姓にあらず、實に大名の暮しなり

夜七時ハロルドに見送られ、ヒューストンに向ふ

十二月五日 テキサカナにて乗り替へ、ロングビューにて夜中三時頃下車、三四時間不潔なる停車場にて待たされ、轉た人世の不如意を歎せざるを得ざりし、朝方パレスタイン行の列車に乗らんとするや、車掌は余に黒人車南部にては電氣車は勿論、瀝車にも白人黒人の車を別にせり、に乗るべしと言ふ、如何に寢れたりとは云へ、餘りの失禮さに物をも言はず白人車に乗りぬ、乘て懇意にせし乗合白人、此車掌を叱して曰く「ノー、ヒー、イズ、ジャパニース、否、彼は日本人なり！」と、是に於て、車掌先生グーの音も

出ず引下れり、然れども余は此出来事より一種の不快を感せり、人間は平等なりと、米人の金科玉條とするところなり、而して黒人を視ると動物の如し、矛盾も亦甚しからずや、之れが抑も「アングルサキソン」の偏見ぞかし、己に此感に打たれたるに加へ、乗替の頻繁なる、乗客の下劣なる、便所に手洗所の備へなき等、人をして厭忌の情に堪へざらしむ、南部の旅行はこり／＼したり、六時三十分頃、ヒューストンに着したるが、長時間の後、漸く電氣を取り、「ライスホテル」と云ふ當市第一の「ホテル」に投ず、宿賃五弗なり

十二月六日

ウエルドネルに行き、ペイン君及ワルレイ君に會す、長時間談話の後、ペイン君と取引所を見、午後二時半頃、「クレブランド」(俵装場)を見る、見本を作り、重量を測り、俵装するが十五仙なりと云ふ、又一ヶ月の倉庫料は十五仙(一俵)なりと聞きぬ

ヒューストンは「テキサス」棉の大中心市場あるが、人口僅かに六萬に過ぎず

元來「テキサス」全州の收穫は、二百萬俵あるが、當市の受入俵數一百万俵に上り、重要な輸出先は、李坡埔、ブレメン、ハーブル、パロセナ、ゼノア、ロシア、日本等の順序なりと云ふ、夜七時三十分の瀛車にてガルベストンに向ふ、九時着、「トリモンドホテル」に投ず

十二月七日

快晴、快暖、孟買の一月頃の氣候也、八十仙を投じて散髪し、ウイリヤムパー氏を訪ふ、(ペイン氏の紹介)同氏と棉花取引所に行き、クラーク氏(此人にも紹介

狀を持てる也)に逢ふ、此兩君共に英人にて、「シッププロカー」なり、前者はマンチエスタターのホルデン型の人にして、後者は孟買のグレイズブルク型なり、棉商ウオルラル(之も英人)氏にも紹介せられ、同氏と同氏の馬車にて、市中、「ドック」(「シーウオール」等を見る、但し「シーウオール」は當市を圍む大城壁にして、世界第一の大工事なりと稱せらる

午後一時ウオール氏私宅にて、クラーク氏と三人にてウ氏が一昨日撃ちたりと云ふ野鴨等を食ふ、食後、クラーク氏が整へたる「ランチ」に打乗り、ガルベストン港内を巡覽せり、其エラサ加減、孟買總督の港内巡閱に異ならず

南太平洋鐵道が、自己にて廣大なる荷卸場を築造し、「エレベーター」(倉庫等)凡ての海陸聯絡に要する装置をなし、數艘の瀛船を所有せるも、鐵道米國の鐵道は、皆大勢力を有す(會社の勢力大なるを見るべし、此他墨西哥灣漁業會社、北獨逸「ロイド」會社等の大「セッド」を見ぬ

ガルベストンはヒューストンに比し道巾廣く、凡てが立派なり、何となく「ポートサイ」の觀あり、現今僅かに三萬の人口を有するに過ぎざれども、將來必らず恐るべき處とあらんか

當地にては、一立方呎に二十二封度半の棉花を壓搾する習慣あり、時に三十三封度迄も壓搾を加ふるとあるも、かくては毛足を傷めると云ふ、又南部にては「カンツリーメン」云ふ保險の付方ありて、此は運搬の際に起る凡ての損害を擔保するものにして、其保險料は四分一「パーセント」なりと云ふ

十二月八日 快晴 朝飯の時「カルベストン毎日新聞」を見るに、昨日取引所にて吹き置きたる小生の法螺が、二號活字で出て居るではないか、こゝ一笑を禁する能はざりし、食後ウオール君の事務所を訪ふ、氏は當地商賣の仕方を説話せり、曰く、ニューオリヤンヌにては、仲買「ファクトリー」が百姓に前貸年利一割より一割二歩をちし、出來棉を平均「グレート」にて買取り、之を格付せしめ、陳列し置きて、棉商に賣り付ける例なるが、當市にては、内地へ買出人を派遣し、直接に耕作者より買取るを常とす

氏は又棉花を買ふには、「グレート」を注文するよりも、數多の「グレート」を注文せば、割合非常に安く買付け得べきを切言せり

余はニューオリヤンヌ在なる、氏の「パートナー」マツキンマイル氏へ宛てたる紹介狀を貰ひ、此處を辭し、クラーク君、パール君を訪ふ、パール君の話に「テキサス州は、土地が新開地で、肥沃なるを以て、肥料を要せず、棉花一封度五仙にて耕作し上ぐるも、アラ

バマ州以東にては、土地荒れ、肥料多くを要するを以て、一封度の棉花に七仙半を要すと云へり

午後五時〇五分の列車にて、ヒューストンに出で、乗替へて、

十二月九日 朝八時ニューオリヤンヌに着、セントチャールズと云ふ、南部第一の大「ホテル」に投ず、瀛車が「ミスシッピ」河を渡るには、列車と共に大きき「パーツーン」に乗せ、瀛船之を牽き行くあり

ニューオリヤンヌ市は、人口三十萬を有し、佛獨伊西等の入種澤山住居し、仲々立派ある都會なり、「セントチャールズホテル」の如き、其裝置少しも紐育大「ホテル」に劣らず、音樂隊を有する外に、佛人多き土地とて、其料理は又格別旨し

晝飯後、例の「マツキンマイル」君と共に取引所を見る、宏大なものにて、李坡埔と同一組織あり、此取引所が發する相場付に於て、現物に分數を川ゆるは、先物の如く「センシティブ」感し易きにあらざるが故ありと、又此日の新聞に、棉花を把持することを論し居るも、銀行利子、保險料、倉庫料等嵩むを以て、六ヶ敷問題なりとの評あり、但し「ブラウン」先生は盛に棉花把持策を主張せり

此より氏の見本室に行き、種々有益なる談話を聞きたるが、其要領を擧ぐれば左の

如し

棉花の格付と毛足を並稱するには、インチソックオーター、グードミドリソック等と稱へ、李坡浦へ送る荷物は、大抵シフ六と云ひ、原價、保險、運賃及カンパスエンドパンの重量、即ち風袋の「アローソックス」を示す、又李坡浦行の棉花には、五歩掛けの目減を許し、極普通の棉を「アレッドバター」棉と云ひ、李坡浦紡績は、當地に人を派し、此等の人は當地の商人を通して棉花を買入れるなり、若し李坡浦着の上「サンロバック」又は「ドグテール」等稱する悪棉入ることを發見せば、其損害要償は當地商人に來り、廻はり廻りて百姓に拂はしむることを得れども、紡績は結局使へざる棉を買ふこととなり、一方からぬ困難に會するを免れず、故に當地にて格付者に、一俵づゝ吟味せしむるを宜敷とす、普通の仲買口銭は一俵十仙なるが、品質の前檢をなす場合には、二十五仙を取らるゝなりと

又合衆國の法律に従へば、棉花に砂、鐵、水等を故意に混淆したると發見せらるれば、懲役に行かざるべからざるなりと

又李浦にては特別品を要する場合には、同地の現物を買ひ、當市に注文するものは、皆「タイプ」によると

これよりふらく市中を散歩し「シムナシヤム」俱樂部に往き、愉快なる運動を見、
にて快飲す、幾多の英米人を相手に、例の法螺を吹き、近來の愉快を感せり、マツキン
マイル氏と共に氏の下宿に行き、老判事（非常なる日本最負也）と八人の美人を相手と
し盛に喋べくりたり、自身ながら感心する程、英語が旨くかつた様に思はれぬ、寄せ芝
居（米國にては「シヨール」と云ふ）に行き、佛、伊、米の混合藝を見たり、當地人は米人の外、佛人、
伊人、獨逸人の混淆なり

十二月十日、日本晴にして快暖、婦人などは丸で夏衣裝あり、棉花取引所に行き、マ
ツキンマイル氏に逢ひ、米國三大機械王の一人なる「ブラウソ」君に紹介せらる、氏は「ミ
スツピ」生れにて、標本南部人なり、ホテイの大腹をつき出し、太き金鎖を光らかに、
農務局報告の信すべからざるを説き、本年作は多くも千百萬俵なりと斷定し、抑揀一
番して曰く、「ドーカ」日本にモ一百萬俵使用し、呉れざるやど、磊落なる快男兒なり

マ氏の案内にて「ミスツピ」港に到り、荷役中の「アラン」線「アトランシヤン」號（三日
間に二萬二千俵を積する）を見、倉庫、俵裝場、格付室等の模様を見たり

米棉の包袋悪しきは、例の「トラスト」の所爲あること、尙荷造の悪しきは、土地が濕地
あると、賄賂公行し、當局官吏の腐敗せると等に基因するを聞き、セントチャールスア

ベニユーにて、仲々立派なる大通を電氣車に乗り、市を一周す、後、取引所、氏の事務所等に至り、實務の模様を見聞し、大に利益を得たり、明日は日曜されば、此處に居るも仕方なければと、思切りて夕八時十五分の汽車にて、アトランタに向ふ、此夕日本軍艦濟遠の沈没を聞く。

十二月十一日 朝七時モンゴメリーに着、途中新聞を閲すに、左の紀事あり、曰く、南部特にアーカンサスの如き、十年前一畝の土地僅かに十五弗乃至二十弗を生産したるに過ぎざりしが、今日は五十弗乃至百弗を收穫するに至りたることとて、南部一般の地價は非常なる騰貴をなし、デュージャの如きは、二割五歩より五割、アラバマの如きは五割より十割の騰貴を見たり云々、モンゴメリーは一見したる丈けなるが、昔し黒奴を賣買取引したる取引所、其儘残り居れり、アラバマ州は、一寸テキサス州に似て、木材に富み、デュージャ州は、赤土にて棉畑を段々に作り、其植付反別の廣大なるを實見したり、ヤング氏の紀事を想ひ出す節多し、十二時アトランタ着、ヤング氏が「米國棉業に云へるが如く、近世風の南部にては稀れに見る立派なる紐育式都會なり、ビーモントホテル」に投ず、持主パロット氏は、親切に余を其私室に招し、種々の話を聞かせられたり、明日は紡績工場及棉花行情を見せて呉れらるゝ筈なり。

十二月十五日 曇天 朝九時半頃、パロット君の紹介にて、エキスポジション「紡績

を覽る、紡績部は三階の煉瓦造なるが、織場は平造なり、此紡績は一八八〇年の博覽會（エキスポジション）より作られたるが故に、此名あるなりと云ふ、空氣清朗なる高地に位し、森林を後園とし、四室より六室の織工家庭、紡績の周圍を取巻くを見る、皆曾社の有にして、一村落を形成せり、鍾數「リング」のみ五萬五千、織機千八百五十臺、内三分一は「フースロップ」自働機、職工千二百名を有す、蒸機は最新式の「コムバウンド、コンデンシ」ング附にして、馬力は二千五百なり、賃銀支拂方は仕事高に應じて給する由、十二手より三十手迄を紡出し、残らず織物となし、支那市場へ輸出すと云ふ。

午後二時半、又パロット氏の紹介にて、棉商ケイ氏來宿せらる、乃ち伴はれて其事務所に至り、當地の棉業に付聞く所あり、氏はブラウン氏と同説にて、去日の農務報告の過多なるを信ぜり、氏は又近頃南部の百姓が貧財饒となりたるが故にとて、棉花把持策の實行せられ得べきを切言せり、又氏の説によれば、南部の棉作は、八分迄、人によりて耕作せられ、特にテキサス州にては、獨逸人を主とし、十中八九迄白人なりと云ふ。

十二月十三日 日本晴 前夜話したる「アトランタニユース新聞」の記者來宿余の

依頼し置ける「アトランタコンスチテューション」棉花増刊を持ち來られたるあり、百十二頁に亘る大冊なりき、十二時の列車にてワシントン府に向ふ途中新聞や旅客の話に聞くに、南部棉花の生産費は七仙なるが、諸色騰貴したるゆへ八仙と見るを相當とす、耕作者は二仙を、企業に對する報酬並びに勞働に對する報酬として、當然受取る權利を有するものなれば、縱令農務局報告通り千二百萬俵作とするも、十仙以下にて賣出すべきにあらざ、從來棉花に關する負債の償却は、十一月の頃に爲すの例なれども、百姓をして強氣とならしむるの目的を以て、一月勘定となすべしとの説もありたり

近日テキサス州スレーフポートにて開かるべき「ボールウィービル」驅除方法として提出せられ居る方法を見るに、左の如し

- 1、既に感染せる田畑には、必要の迫る迄、棉花耕作を見合はすと
 - 2、此大會にて良好案設定せられざる時は、懸賞して汎く方法を求むると
- 南部棉花の總收入は、七億弗にして、製造せば其四倍、即ち二十八億弗となると、實以て驚くべきにあらすや

現今棉花に對する火災保險料は、一俵二弗なるが、耐火的倉庫を各州に百箇宛造る

ときは、四十仙に下落すべし云々

余は南部旅行の途次、木材の夥しきを見たるが、今其數字を聞くに、合衆國の森林事業に投したる資本は、一九〇〇年に於て、六億一千一百万弗にして、之に従事するものに支拂ふ賃銀は、年額一億弗に達し、之に對する生産額は五億六千万弗に上り、米國に於て第四番目の大工業なりと

十二月十四日 昨夜眠らんとすれば、軍掌の白人及黒人、其他白人の旅客等一新聞を齎らして曰く、東京で専ら噂するところによれば、黒木將軍は死せりと、尤も日本政府は之を否認せりと云ふ、眞偽如何と、余は其虚電あるを斷言したれば、彼等喜ぶこと甚し、然れども且つ問ふて曰く、君の政府は八島艦の沈没を隠蔽せり、同理により、黒木將軍の死を秘するにあらざるかと、余曰く、我日本には陸軍大將林の如く、彼等は皆黒木大將と均しく善く戦ひ得るあり、故に黒木大將にして若し戦死せば、他の大將を補充するのみ、何を苦んで其死を隠蔽するの愚をなさんやと、彼等大に憤りて曰く、君の言の如んば、世界に黒木大將の如きは幾人もありと云ふに似たり、余等は信ず、彼は二十世紀劈頭の最大名將にして、世界獨歩なりと、言々肺腑より出で、容を正して余を攻撃せり、余は常に歐米人の英雄崇拜心に富めるに感服するものなり、彼等が宗教心に

厚き彼等が大事業を經營すべく所ちに英傑の下に附趨團結するものは、一に此英雄崇拜心に因ものなるを了せるなり、今又此實際の場合に遭遇し、私に感激に勝へず、日本人に英雄崇拜心の微きは遺憾なり

十時十五分米國首府ワシントン府に着唯さへ閑靜なる市街の今日は、又降雪深き爲め片田舎の觀あり

華 聖 東 府

綾 部 葛 里

摩尾於南極。翹首於北辰。右踞寧海。左擁壓瀾。地勢南北伏又起。一洲中分跨乾坤。夷虜割據自爲團。蕃布粟散各接隣。就中誰是最強大。共和政治華聖屯。時昔嘗屬班牙地。一朝爲英夷所吞。英夷視民如視獸。苛政役民酷於秦。妹去兄走民轉壑。天荒地老一劫塵。獨有民間稱華聖。德如天地智如神。自言天時不可失。義兵一舉攘妖氛。英兵萎靡強弩末。佛蘭居間事始竣。謳歌同唱凱旋日。倒懸始解無冤民。立爲統領非僭立。翊戴除君別無人。部落新分廿有九。周道如砥到處分。數個氣球冲空去。幾條鐵路火輪奔。階前萬里如指掌。電機傳令一瞬間。山河抱城砲臺聳。艦艦接尾封江灣。尙見當時新築蹟。遺業巍然歌海濱。我踏其地嘆其壯。萬里直超寧海濱。不問先知華聖城。百尺門聳青霄上。以石壘城峻於山。絕壁巖巖立可仰。柳比圍城一萬家。々々層樓如疊嶂。各戶夜明煤氣燈。每窓盡閃錦紋帳。聊鬱耕

車東西客。把袂握手花柳巷。婦女絡繹履聲輕。風吹輕羅飛欲颺。輕羅妝成唇何豐。不似細腰楚宮樣。舞衣纏纏鶴衣翻。不似步步蓮花狀。歌喉調春鶯舌滑。不似淫聲鄭衛唱。迎賓接唇情何切。見客呈花亦雅尙。國稱共和豈負名。家無勃谿免鹵掠。最有遺德存嚴禪。華聖廟向河水瀕。停車欲吊斜陽暮。花影禽聲總傷春。劇畔空題姓名去。東洋狂夫綾部新。

是よりバルチモア、ウインスター、フライデルフイ、ジャマーセー等を通過したる

が此等の市府は、皆紐育式からずして、低き建物、市廣く四方に擴がれる市街等、寧ろ倫敦式なり、此等市府の間を綴れるものは、森林を切開きて打建てられたる村落、採掘せられたるある鑛山、若くは千百牛羊を放てる牧場にして、其餘は是れ一望千万頃の麥畑に過ぎず、漠々茫々更に見るに足るものなし、之れが抑もワシントン府より、紐育に至る間の景色なり、是に由て之を觀れば、米國は當さに之を三部に分つべく、南部は農業を主とし、中部は農業に工業を加味し、北部は純然たる工業都市あり

紐育へ近づくに従ひ、次第に寒冷を覺え、ハドソン河は殆ど結水せるの姿なり

十二月十五日 晴天なれども寒氣甚だし、朝十時紐育の宿を出で山田君、内外商會等を訪ひ、正金にて六十磅を受取り、歸路領事館に内田領事を訪ふ、夕七時山田君と日本料理屋に會食し、圖らず湯川岩下、最上、今西等の同窓生諸君に邂逅す、快談湧くが如

十二月十六日 晴天、湖風凜烈膚を劈くが如し、ブロードウェイ電氣車により、セントラルパーク(中央公園)を見る

紐育公園

奥井清風

十里之園十里池。于花于月四時宜。亭臺可憩榻可倚。晴時殊好雨亦奇。府民相謀築此苑。來往自由無公私。舟車復耶任他擇。有車有馬宜以馳。孔雀引雛碧桐阜。老猿乳兒翠松枝。異艸奇花千又百。人間其名多不知。奏樂堂邊佳人集。噴水器畔兒童嬉。博物館聳曲池上。天下奇珍集于茲。園南更構動物苑。小禽猛獸雄與雌。丘上石塔形如鏡。云是紀元年前碑。突兀凌雲高百尺。遠從埃及舶載來。滿都士女簇如雲。都在十里園池隈。吾亦來憩樹陰石。空對風物感今昔。聞說英兵跋扈時。此境無總不荊棘。魅魍作巢豈冥々。豺狼橫路夜叢々。厚斂無厭恣貪婪。苛虐不憚逞猖獗。天人共怒專橫甚。十三州民怨透骨。正氣所凝嚴於霜。誓爲國家攘讎敵。伐竹爲槍席爲旗。手拋耒耜執矛戟。糧盡城陷兵益振。父死子歿憤愈激。裏瘡吮血入春秋。沐雨梳風三千夕。墮而又起倒又立。自由之旗獨立檄。精神所到感鬼神。遂破英兵保社稷。爾來一百有餘年。休兵放馬民安息。共和政治致殷富。荊棘變作黃金國。如何六十餘州民。曾受外侮知幾年。關稅元有約束存。金幣爲耗財理紊。政法權亦被限

制。勢力日蹙國步難。况又兄弟內相鬪。或恐禍在蕭牆間。燕鷗擊攘太平春。東海元多好山水。不川十里築公園。天然之山天然水。襟帶長。護別乾坤。古往今來感無極。秋風蕭々客衣寒。

午後正金内外、山田君等に別辭を述べ、三井物産に往き、圖らず一ヶ月前來米せる同級生大貫忠一君に逢ふ。此晚氏と日本料理屋に會食、互に舊を談じ、又身の米京に在を知らず

十二月十七日 雪天(スノーストーム也)トーマスクックに行き七十磅にて自紐育至横濱、上等通し切符を買求め、三井物産にいとまごひし。夜八時の列車にてバアファローに向ふ

十二月十八日 晴天 朝八時半頃バアファロー市着、茲に下車し、九時の列車にてナイヤガラ瀧の雪景を見る。壯觀瑰奇を極む。序に加奈太領へも足を入れたり

乃瓦刺

末廣鐵腸

乃瓦刺水曾傳聞。偉觀卓出天壤間。我今書劍走萬里。來蹈音太湖上雲。水流滔々疾如矢。石立水激生狂瀾。中間有島分水勢。雙龍相對爭騰奔。忽逢懸崖絕壁立。瀉下萬丈掀還翻。大鵬拗怒奮翼起。南溟之水恣扶搏。百萬雷霆一時吼。疑拔地軸搖天根。洶湧回轉卷白

溟淵底不詳蛟龍蟠。風吹飛沫作大霧。百丈虹霓中天隱。維時盛夏六月半。巖頭皚々冰雪寒。兩耳爲聾眼爲眩。登臨自覺心悽酸。古來騷客眼孔小。一條素練誇廬山。對此難着常套句。雄風誰壓李青蓮。傾洞滄浪萬里水。紫烟蔽日天日昏。

十二月十九日 晴天なれども寒し、朝九時頃チカゴに着、ブリグスハウスに投宿す、チカゴは紐育とフライデルフイヤとを加へて、二で割た様な都會なり、午後一時領事館に金萬喜人氏を訪ふ、氏は余と同窓生なるが、嘗て孟買に居たるとして、例により舊を談じて飽かず

三時頃有名ある「ストックヤード」(屠畜場)を観る、其慘景目に餘り、肉食人種の罪惡實に大あるを知れり、米國五十三州より集中する家畜は、一部は更らに歐大陸及英國に輸出せられ、殘りは皆此處に屠殺せらるゝなり、元來當市が今日米國第二の都會となりたるは米大陸の中央に位し、蜘蛛の巢の如き鐵道が周囲の豊饒なる諸州より、此處に物貨を持ち込む結果なり、元來此「ストックヤード」は、數多會社の聯合より成るものにして、牛豚置場、大鐵道、ターミナル等共同の利害に關するものは、凡て此聯合會に於て處置し、各自會社は獨立の營業をなすこと、恰かも我紡績聯合會と、各自紡績會社との關係の如し、就中余は最大と稱せらるゝ「スイフトカンパニー」を見たり、本社は二萬

三千人の男女を使用し、千五百頭の「ベルケエロン」種の大荷馬を有せり、而して牛は一時間二百四十頭、豚は七百頭の割合にて屠殺せらるゝなり、其慘憺たる光景、到底正視すべからず

十二月二十日 再び屠畜場に赴き、「クビーマクキイルビー」と云ふ鑑詰會社に至る、同工場は一時間に二百五十頭を料理し、一週間の屠殺頭數一萬五千と稱す、十八個の蒸籠あり、三千人を使用し一年の賃銀百五十萬弗を拂ひ、毎月の生産高一千萬鑑あり、組織的に鑑詰せることとて、不正あると行はるべき機會なし、又揃ひも揃へる別嬪隊をして鑑詰せしむるを以て、本社製の鑑詰は必らず美味なるべしと思はしめぬ

二時頃、再び金萬喜氏と會談後、チカゴの生命たる小麦取引所を見る
午後八時〇二分ノースウエスターン線を取り、桑港に向ふ例の「フルマンカー」を買す、此代桑港迄十四弗なり

十二月二十一日 天氣清朗 通過する處は坦々たる大平原にして何の奇もなし、日本人神崎直三君と相知る、氏は博覽會へ赴ける我帝國事務員にして、英語をよくす、近頃の人物なり

十二月二十二日 晴天、グリーンリバーより、ロッキーマンの景色次第に佳境に入る、

サルトンキーを横ぎる、流車と共に畫中の人なり

十二月二十三日 晴天 所謂シラチバターの絶景を鑑ひ何時も春あるカリホルニアの大緑野に出づ、一時に冬より春に入りたる心地なり、オークランドより桑港に渡る暖風徐々に吹き、前面螢籠を置きたるが如き桑港を望む、心持の好きと言ふべからず、六時着、チクンデンタルホテルに投ず

自紐育至桑港途上

櫻洲山人

妻兒不識路程難 度水經原又過山 萬里歐洲跡已隔 七旬風月鐵車間
鐵車直破幾溪山 不覺天涯道路難 屈指三千五百里 金門遙在海灣間

桑港

全人

漁燈映水爛如星 渡口呼舟到旅亭 半夜隣樓人未寢 絃歌斷續隔窓聽

桑港は加州は勿論米國西部第一の大都會あり、人口三十五萬を有し、我日本人は四千五百より五千名在留せり、我米國殖民が成功すべしとせば、加州は獨逸のペンシルバニヤ、佛人の南部市に於けるが如く、我活動の根據地たるべければ、桑港は吾等膨脹的日本人の最も注目を要すべき試金石と見るを得べし

十二月二十四日 此頃は當地の雨季なる由にて、晴天と思ふも俄に驟雨來ると云

ふ有様なり、朝九時、パンフイックメール社に行き、モンゴリヤ號乗込の事を確定して、同船を一見し、後、正金にて十磅を引出し、三井物産を訪ひ、晩食後、日本街及支那町を散歩せり、街頭の光景大に人意を強ふするに足るものあり

太平洋

櫻洲山人

金門東去駕孤舟 白浪連天感壯遊 却喜順風吹不絕 烟波深處是皇州
經過歐米拂袖還 五千海路不看山 舟中一月無聊甚 始見芙蓉開笑顏
右是房州左豆州 群峰如黛海中浮 聞說橫濱港已近 同朋今夕欲離舟

(大尾)

明治三十八年十月二十日印刷
全 年十二月廿五日發行

(非賣品)

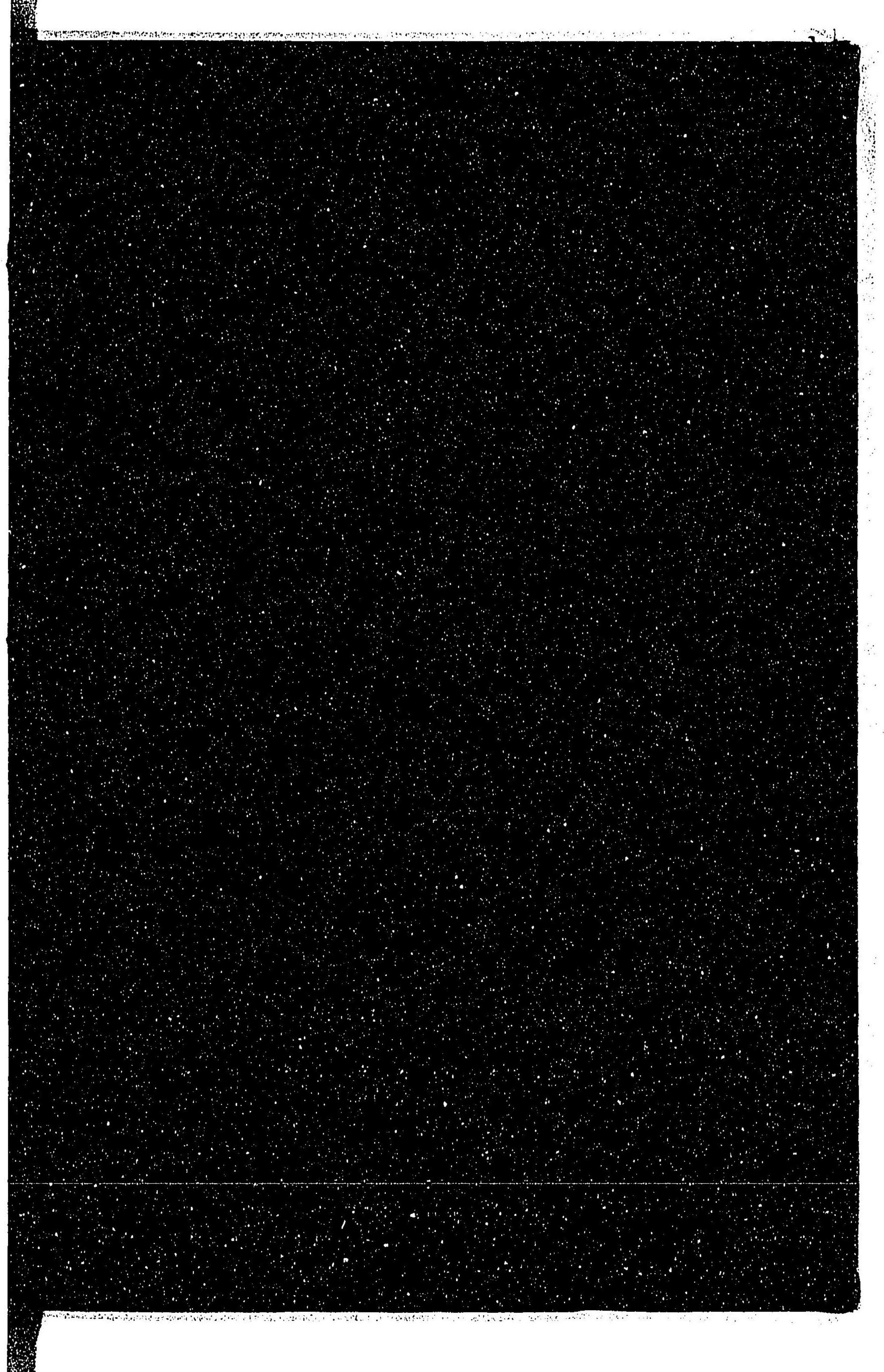
寄發行者 大阪市東區伏見町五丁目七十番邸
竜田 森 吉

印刷者 大阪市南區安堂寺橋通一丁目一番地
濱田 正 夫

印刷所 大阪市南區安堂寺橋通一丁目
濱田 日 報 社

1976/11/1

79
630



79

630

022083-000-4

79-630

竜田式赤毛布

竜田 森吉 / 著

M38

ADA-0434



